

上の山遺跡Ⅱ

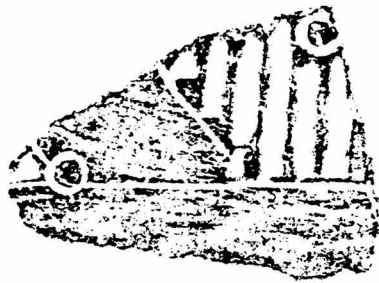
長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第2次・第3次埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

長野県辰野町教育委員会

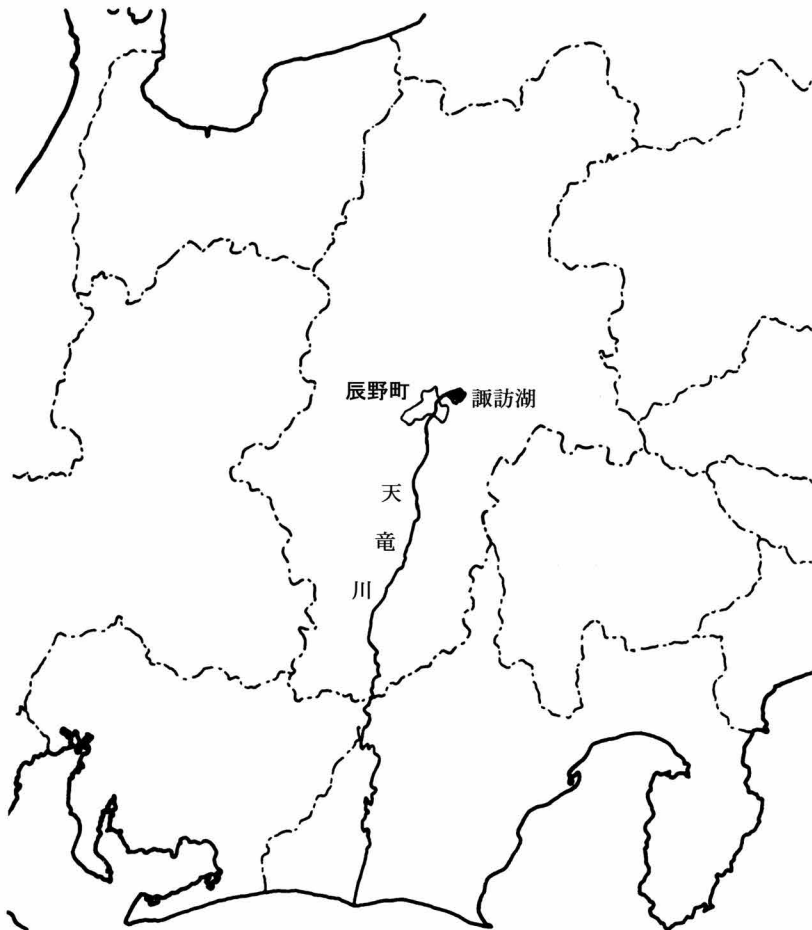
上の山遺跡Ⅱ

長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第2次・第3次埋蔵文化財発掘調査報告書



1988

長野県辰野町教育委員会



序

上の山遺跡は、辰野町宮木辰野高校一帯に位置し、古くから縄文時代の遺物包蔵地として知られ、また「天白の城」として戦国時代末期矢島氏の館跡と伝えられてきたところで、過去に多くの遺物が採集されてきました。なお、昭和60年には辰野高校テニスコート造成に伴って、この遺跡に隣接する滝洞遺跡の発掘調査が行われ、中世の遺構と遺物が出土しました。また、校舎改築に伴い、この上の山遺跡の第1次発掘調査が昭和61年に実施され、縄文時代の遺構とともに中世末期の堀跡が出土し、城館跡の存在を裏づけました。

今回の第2次・第3次調査は、辰野高校昇降口棟及び音楽棟建設に伴うもので、同校の委託を受け、町教育委員会が主体となって実施しました。

その結果、縄文時代早期の小竪穴群をはじめ、同前期、中期の住居跡が出土しました。また、中世城館の腰曲輪と考えられる遺構が発見され、第1次調査の堀跡とともに貴重な資料となり、大きな成果をあげることができました。

ここに調査報告書を刊行するはこびとなり、ご指導を賜った長野県教育委員会文化課をはじめ、辰野高等学校、それに直接調査に従事された調査団の皆様に深く感謝申し上げるとともに、この報告書が広く活用されることを願う次第です。

平成元年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林 晃 一

例 言

1. 本書は、長野県辰野高等学校による校舎改築事業に伴う、長野県上伊那郡辰野町大字伊那富3644の2番地に所在する上の山遺跡の第2次、第3次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野高等学校長山崎袈裟強（山崎耕蔵63.4.1～）と辰野町教育委員会教育長小林晃一との委託契約に基づいて行われた。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は昭和62年11月11日から12月28日（第2次）及び昭和63年2月22日から4月20日まで（第3次）現場作業を実施し、出土遺物等の整理及び報告書の作成は昭和63年11月20日から平成元年3月25日まで（第2次・3次）辰野町教育委員会において行った。
4. 発掘調査現場における記録は、第2次調査は主として赤羽義洋が、第3次調査は田畑幸雄が担当し、遺構等の実測図作成は赤羽、田畑、村上茂子、赤羽やよいが主として行った。また、本書の編集・作成は、第2次については赤羽義洋が、また第3次については福島が主として当たり、全体を赤羽が総括した。遺物等の実測図作成は、赤羽義洋、福島、宇治ひろゑが行い、土器復元は福沢幸一氏にお願いした。執筆分担については各文末に示した。なお、2次と3次の記述、表現等に若干の相違があるがやむを得なかった。
5. 遺構の番号については第1次調査からの通し番号とした。
6. 調査及び整理に当たっては、実測図、写真等多数を作成したが、それらの資料は出土遺物とともに辰野町教育委員会が保管しているので、広く活用されたい。

発掘調査関係者名簿

1. 上の山遺跡発掘調査団

調査団長 友野良一（考古学研究者、宮田村）発掘担当者

調査員 赤羽義洋（辰野町郷土美術館学芸員）発掘担当者

調査員 福島 永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）昭63.4.1～

発掘調査協力者 赤羽信雄・板倉たせ子・小沢百合子・垣内 諭・倉田まき子・倉田守・小松祐二・城倉けさみ・茅野安男・中谷あき子・村上武夫・村山 明・山崎 馨・山崎敏夫・山崎長雄・山崎良之助・山内志賀子・赤羽やよい・村上茂子・福沢幸一・飯塚宣文

整理作業協力者 宇治ひろゑ・赤羽やよい・村上茂子・福沢幸一

2. 辰野町教育委員会事務局

教育長 小林晃一

社会教育課長 小松弘茂

文化係長 平泉栄一

文化係 田畑幸雄・赤羽義洋・福島 永（昭63.4.1～）

目 次

序	
例 言	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 保護協議の経過	1
第 2 節 発掘調査の経過	2
第 II 章 遺跡の位置と環境	5
第 1 節 位置と付近の地形・地質	5
第 2 節 歴史的な環境	7
第 III 章 発掘調査	11
第 1 節 調査の方法と調査結果の概要	11
第 2 節 遺跡の層序	12
第 IV 章 第 2 次調査区の遺構と遺物	19
第 1 節 縄文時代の遺構と遺物	19
第 1 号小竪穴／第 2 号小竪穴／第 3 号小竪穴／第 4 号小竪穴／第 5 号小竪穴／第 1 号・2 号焼土／早期の土器／前期の土器／中期の土器／石器	
第 2 節 歴史時代の遺構と遺物	28
第 1 号腰曲輪／その他の遺構と遺物	
第 V 章 第 3 次調査区の遺構と遺物	31
第 1 節 縄文時代の遺構と遺物	31
第 6 号小竪穴／第 4 号住居址／第 5 号住居址／第 3 号集石／第 4 号集石／第 14 号土坑／第 15 号土坑／第 16・28 号土坑／第 17 号土坑／第 19 号土坑／第 20 号土坑／第 21 号土坑／第 22 号土坑／第 23 号土坑／第 24・27 号土坑／第 25・32 号土坑／第 26 号土坑／第 29 号土坑／第 18・30 号土坑／第 31 号土坑／第 2 号ローム・マウンド／第 3 号ローム・マウンド	
第 2 節 遺構外出土の遺物	53
縄文時代早期の土器／縄文時代前期の土器／縄文時代中期・後期の土器／縄文時代の石器	
第 VI 章 結 語	80
参考文献	
写真図版	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	辰野町段丘面区分図	6
第3図	周辺遺跡分布図	8
第4図	周辺地名分布図	10
第5図	遺跡基本層序概念図	12
第6図	発掘調査区位置図	13-14
第7図	発掘調査区土層断面図(1)	15-16
第8図	発掘調査区土層断面図(2)	17-18
第9図	第1号~4号小竪穴実測図	20
第10図	小竪穴出土遺物実測図	21
第11図	第5号小竪穴実測図	22
第12図	第2号集石実測図	22
第13図	第1号焼土実測図	22
第14図	第2号焼土実測図	22
第15図	縄文時代早期土器拓影図(1)	23
第16図	縄文時代早期土器拓影図(2)	24
第17図	縄文時代前期及び中期土器拓影図	25
第18図	縄文時代石器実測図(1)	26
第19図	縄文時代石器実測図(2)	27
第20図	縄文時代石器実測図(3)	27
第21図	中世以降遺物実測図	28
第22図	第1号腰曲輪実測図	29-30
第23図	第6号小竪穴実測図	31
第24図	第4号住居址実測図	32
第25図	第4号住居址出土埋甕実測図	33
第26図	第4号住居址出土土器拓影図(1)	33
第27図	第4号住居址出土土器拓影図(2)	34
第28図	第5号住居址実測図	36
第29図	第5号住居址出土土器拓影図	37
第30図	第3号集石実測図	38
第31図	第3号集石出土土器拓影図	38
第32図	第4号集石実測図	39
第33図	第4号集石出土土器拓影図	39
第34図	第14号土坑実測図	40
第35図	第15号土坑実測図	41
第36図	第15号土坑出土土器拓影図	41
第37図	第16・28号土坑実測図	42
第38図	第17号土坑実測図	42
第39図	第19号土坑実測図	43
第40図	第20号土坑実測図	43

第41図	第21号土坑実測図	43
第42図	第21号土坑出土土器拓影図	44
第43図	第22号土坑実測図	44
第44図	第23号土坑実測図	45
第45図	第24・27号土坑実測図	45
第46図	第25・32号土坑実測図	46
第47図	第32号土坑出土土器拓影図	46
第48図	第25号土坑出土土器拓影図	47
第49図	第26号土坑実測図	48
第50図	第29号土坑実測図及び付近出土土偶実測図	49
第51図	第18・30号土坑実測図	49
第52図	第30号土坑出土土器拓影	50
第53図	第30号土坑出土土器実測図	50
第54図	第31号土坑実測図	51
第55図	第31号土坑出土土器実測図	51
第56図	第2号ローム・マウンド実測図	52
第57図	縄文時代早期土器拓影図(3)	54
第58図	縄文時代早期土器拓影図(4)	55
第59図	縄文時代早期土器拓影図(5)	56
第60図	縄文時代早期土器拓影図(6)	58
第61図	縄文時代早期土器拓影図(7)	59
第62図	縄文時代早期土器拓影図(8)	60
第63図	縄文時代早期土器拓影図(9)	61
第64図	縄文時代早期土器拓影図(10)	62
第65図	縄文時代前期土器拓影図(1)	63
第66図	縄文時代前期土器拓影図(2)	64
第67図	縄文時代前期土器拓影図(3)	66
第68図	縄文時代前期土器拓影図(4)	68
第69図	縄文時代前期土器拓影図(5)	69
第70図	縄文時代前期土器拓影図(6)	70
第71図	縄文時代中期土器拓影図(1)	72
第72図	縄文時代中期土器拓影図(2)	73
第73図	縄文時代中期土器拓影図(3)	74
第74図	縄文時代石器実測図(4)	76
第75図	縄文時代石器実測図(5)	77
第76図	縄文時代石器実測図(6)	78
第77図	縄文時代石器実測図(7)	79

付図1 上の山遺跡(第2次・3次調査)昇降口棟区平面図

付図2 上の山遺跡(第2次調査)音楽棟区平面図

写真図版目次

- 図版 1-1 第2次調査昇降口棟区全景
1-2 第1号～4号小竪穴
- 図版 2-1 第1号小竪穴
2-2 第2号小竪穴
- 図版 3-1 第3号小竪穴
3-2 第4号小竪穴
- 図版 4-1 第5号小竪穴
4-2 第1号焼土
- 図版 5-1 小ピット群
5-2 第2号集石
- 図版 6-1 第2次調査音楽棟区全景
6-2 第1号腰曲輪全景(東南から)
- 図版 7-1 第1号腰曲輪全景(北から)
7-2 第5号小竪穴と不整形ピットなど
- 図版 8-1 縄文時代早期の土器(1)表
8-2 縄文時代早期の土器(1)裏
- 図版 9-1 縄文時代早期の土器(2)表
9-2 縄文時代早期の土器(2)裏
- 図版10-1 縄文時代早期の土器(第2号小竪穴出土)
10-2 縄文時代前期の土器(1)
- 図版11-1 縄文時代の石器(1)
11-2 縄文時代の石器(2)
- 図版12-1 中世以降の陶器
12-2 発掘調査風景(腰曲輪の発掘)
- 図版13-1 第3次調査区全景(南から)
13-2 第3次調査区全景(北から)
- 図版14-1 第4号住居址
14-2 同埋甕
14-3 同炉
- 図版15-1 第5号住居址
15-2 第2号ローム・マウンド
- 図版16-1 第3号集石
16-2 第3号集石下の土坑
- 図版17-1 第4号集石
17-2 第15号土坑
- 図版18-1 第17号土坑
18-2 第23号土坑
- 図版19-1 第25号土坑
19-2 第29号土坑
- 図版20-1 第30号土坑上面の礫と土器
20-2 第31号土坑覆土中の礫
- 図版21-1 第4号住居址出土埋甕
21-2 第4号住居址出土土器
- 図版22-1 第4号集石出土土器
22-2 第25号土坑出土土器
22-3 第29号土坑付近出土土器
- 図版23-1 第5号集石出土土器
23-2 第15号土坑出土土器
- 図版24-1 第25号土坑出土土器(1)
24-2 第25号土坑出土土器(2)
- 図版25-1 縄文時代早期の土器(3)表
25-2 縄文時代早期の土器(3)裏
- 図版26-1 縄文時代早期の土器(4)表
26-2 縄文時代早期の土器(4)裏
- 図版27-1 縄文時代早期の土器(5)表
27-2 縄文時代早期の土器(5)裏
- 図版28-1 縄文時代早期の土器(6)表
28-2 縄文時代早期の土器(6)裏
- 図版29-1 縄文時代早期の土器(7)表
29-2 縄文時代早期の土器(7)裏
- 図版30-1 縄文時代早期の土器(8)表
30-2 縄文時代早期の土器(8)裏
- 図版31-1 縄文時代早期の土器(9)表
31-2 縄文時代早期の土器(9)裏
- 図版32-1 縄文時代早期の土器(10)表
32-2 縄文時代早期の土器(10)裏
- 図版33-1 縄文時代前期の土器(2)
33-2 縄文時代前期の土器(3)
- 図版34-1 縄文時代前期の土器(4)
34-2 縄文時代前期の土器(5)
- 図版35-1 縄文時代前期の土器(6)
35-2 縄文時代前期の土器(7)
- 図版36-1 縄文時代前期の土器(8)
36-2 縄文時代中期の土器(1)
- 図版37-1 縄文時代中期の土器(2)
37-2 縄文時代中期の土器(3)
- 図版38-1 縄文時代の石器(3)
38-2 縄文時代の石器(4)
- 図版39-1 縄文時代の石器(5)
39-2 縄文時代の石器(6)
- 図版40 発掘調査風景(第3次)

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 保護協議の経過

上の山遺跡は古くから土器、石器が出土し、多くの遺物が採集され、縄文時代の遺跡として知られてきた。また、天白の城と呼ばれる中世城館跡のひとつでもあった。

大正初年、この地に伊北農蚕学校が創立され、戦後長野県辰野高等学校となり現在に至っているが、昭和 54 年校舎改築期成同盟会が発足し、校舎の改築が開始された。これに伴って、昭和 57 年 12 月第二体育館建設に係る埋蔵文化財の立会調査が行われ、昭和 60 年 12 月にはテニスコート新設により、上の山遺跡に隣接する滝洞遺跡の発掘調査が実施され、中世の遺構、遺物が出土した。さらに昭和 61 年 8 月には、混合教室棟、部室棟及び浄化槽の建設に伴って発掘調査が行われ、縄文時代や中世の遺構、遺物が多数出土し、一帯は縄文時代の集落址であるとともに、中世末期の城館跡であることが明らかとなった。(第 1 次調査)

混合教室棟の建設に続き、この北隣りに生徒昇降口棟、さらに管理棟東に音楽室棟の建設が計画されており、昭和 62 年 10 月、辰野高校、辰野町教育委員会、考古学研究者友野良一氏の三者で保護協議を行った。その結果、建設予定地 941.1 m² を対象に学術的な発掘調査を実施し、記録をのこすこととなり、11 月、辰野高等学校長山崎袈裟強の委託を受け、辰野町教育委員会教育長小林晃一が主体となって調査を行うため、友野良一氏を団長とする調査団を組織し、11 日から調査を開始した。(第 2 次調査)

ところが、当初辰野高校では計画図により発掘対象面積は、昇降口棟、音楽室棟の 941.1 m² と判断していたが、実施設計図によれば昇降口棟にはさらに、ポーチ、スロープ、階段、足洗場等が付属することが判明し、この箇所の埋蔵文化財の取り扱いについて辰野町教育委員会へ照会があった。12 月 7 日、長野県教育委員会文化課、辰野高校、辰野町教育委員会の三者により現地で協議を行い、発掘調査を行うこととしたが、冬季を迎え凍結等により現場での作業は困難と思われ、また出土遺物の整理、報告書の作成を年度内に完了することも難しく、辰野町教育委員会が調査を受託するか否かの点も含め、その後三者で協議を重ねた。12 月 23 日、長野県教育委員会高校教育課からの要請により、辰野高校から調査委託について辰野町教育委員会へ依頼があり、基本的には町教育委員会が受託する方向となったが、季節的な問題等整った時点で再度協議することとなった。昭和 63 年 2 月 3 日、辰野高校、改築工事関係者から、学校の年度末休業や工事の年度内完了等を勧案し、3 月 10 日ころまでに調査を終了してほしい旨申し入れがあった。その後県教育委員会文化課とも連絡をとり、第 2 次調査の報告書作成は 63 年度で行うこととし、昇降口棟に付随するポーチ、階段等の 680 m² について、辰野高等学校長山崎袈裟強と辰野町教育委員会教育長小林晃一との間で発掘調査委託契約を締結し、あらためて調査団を組織して 2 月 22 日現地での作業を開始した。(第 3 次調査) なお、第 3 次調査の出土遺物の整理、報告書作成作業は 63 年度とし、報告書は第 2 次分と合本することとした。(赤羽・田畑)

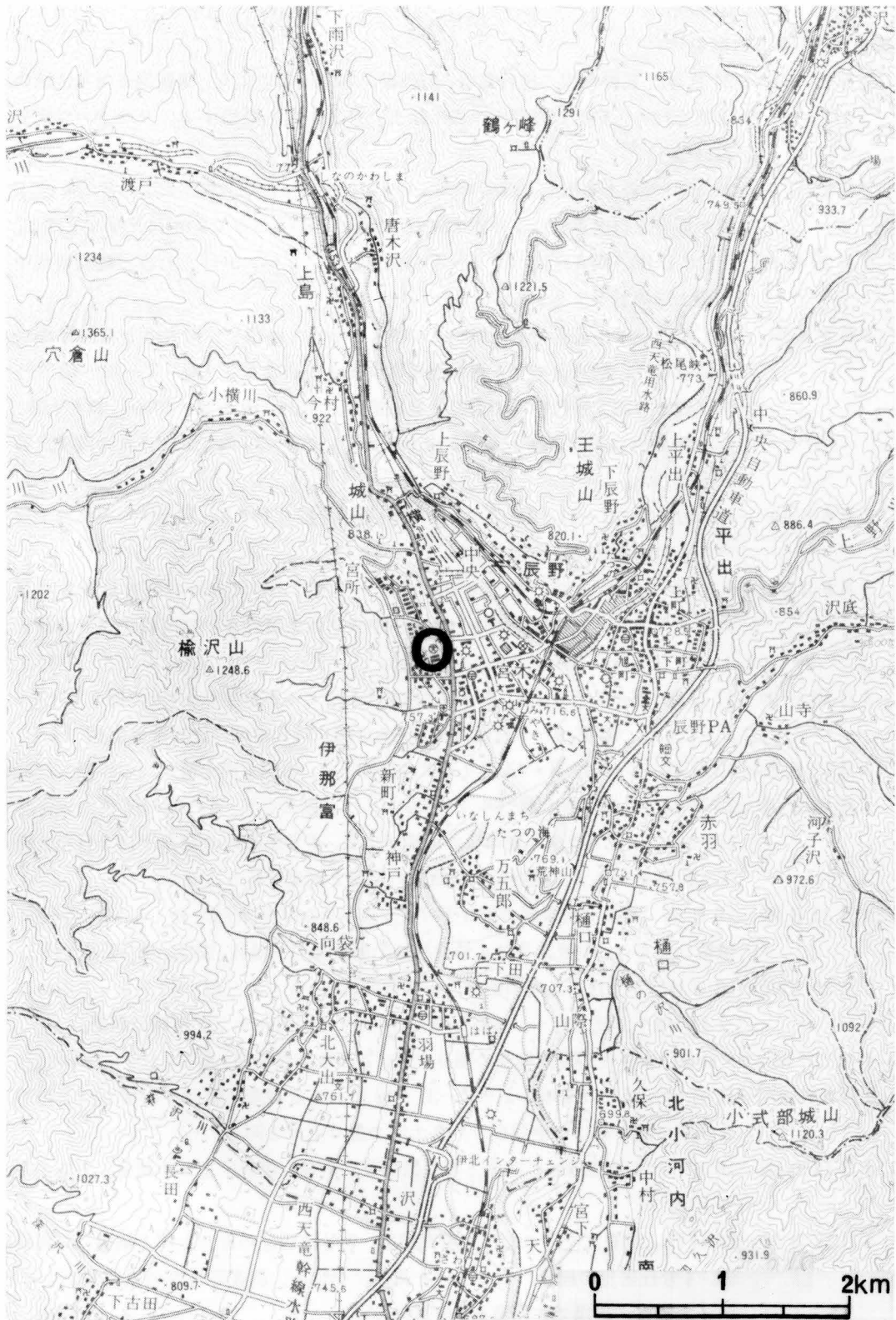
第2節 発掘調査の経過

調査日誌（第2次調査）

- 11月11日(水)～12日(木) 昇降口棟建設予定地の庭園部分以外をバックホーにより表土除去し、第2次発掘調査を開始する。
- 11月13日(金) テントの設置と器材の運び込み。表土を除去した箇所のジョレンがけと排土作業。
- 11月14日(土)～18日(水) 昇降口棟建設予定地内の庭園樹木の撤去に伴い、その箇所の表土除去。
- 11月19日(木)～20日(金) 表土除去を行った箇所のジョレンがけを行い、遺構、遺物の検出にあたりるとともに、20日には音楽棟建設予定地の表土除去を行う。
- 11月21日(土)～26日(木) 昇降口棟、プロパン庫、給油庫建設予定箇所を掘り下げ、遺構、遺物の確認を行う。ア・イ・ウー39・40グリッド付近に、径1.5mほどの遺構らしい落ち込みを確認。遺物は縄文土器が若干出土する。落ち込みを掘り下げ、小竪穴とする。
- 11月27日(金)～28日(土) 音楽棟建設予定地内のグリッド設定と掘り下げ。昇降口棟建設予定地内東西土層断面及び土坑、小竪穴の各土層断面の作成と測量。
- 11月30日(月)～12月1日(火) 1～4号小竪穴の掘り上げと、東西土層断面付近の清掃、写真撮影。
- 12月2日(水)～3日(木) 音楽棟建設予定地内の腰曲輪と思われる落ち込みの掘り下げ。昇降口棟建設予定地内全体及び1～4号小竪穴の清掃と写真撮影を行う。なお、3日には辰野高校教職員、生徒の皆さんを対象に現地説明会を行い、寒風の中多数の方が参加。
- 12月8日(火)～10日(木) 音楽棟建設予定地調査区の全体及びコンタ測量、N～G-54～55グリッドにある土層断面の測量、並びに各土坑、ピットの清掃と写真撮影。昇降口棟建設予定地調査区東壁の土層断面の測量を行う。
- 12月11日(金)～15日(火) イー30～32グリッド内のピットの掘り下げと、イー40～42グリッド内集石の測量。G-57～61グリッドの掘り下げと腰曲輪の遺構測量を行う。
- 12月16日(水)～17日(木) 昇降口棟建設予定地内東西土層断面ベルトの掘り下げ撤去と、音楽棟建設予定地調査区全体の清掃と写真撮影を行う。
- 12月18日(金)～21日(月) 音楽棟建設予定地内土坑、ピット及び腰曲輪のレベル測量。L～P-54南壁面及びG～R-62北壁面の土層断面作成。
- 12月22日(火)～23日(水) 音楽棟、昇降口棟各建設予定地の全体測量。L～P-54南壁面及びG～R-62北壁面土層断面の測量。
- 12月24日(木)～27日(日) 音楽棟建設予定地内の残ったすべての測量と写真撮影を行う。
- 12月28日(月) 昇降口棟建設予定地調査区東壁面の土層断面の測量。テント、調査器材等の撤収を行い、第2次調査の現場での作業を終了する。

調査日誌（第3次調査）

- 2月22日(月)～24日(水) 辰野高校、施行業者、町教委の各関係者により、発掘調査対象区域の確認を行い、発掘調査区内の表土除去、排土作業を開始する。テントの設営と器材搬入。
- 2月25日(木)～28日(日) 表土除去した箇所のジョレンがけを行ったが、黒色土が非常に深く、日程の都合上再度重機による表土除去を行い、深いところで2mほど掘り下げる。
- 2月29日(月)～3月3日(木) 調査区内へグリッドを設定し、ジョレンがけを行う。縄文時代中期の土器等若干出土する。
- 3月4日(金)～5日(土) パイル業者と工事用パイル搬入について協議し、搬入路と資材置場の確認を行う。調査区中央東西土層断面ベルト周辺及びT・U・V-40～43グリッド内から縄文時代中期の土器と集石遺構が出土。またR-40から縄文土器、U-38からは集石遺構と土器が出土し、さらにS-39内では相当量の縄文土器が出土した。
- 3月6日(日)～7日(月) S～U-41～42グリッドのⅣ層内を掘り下げる。調査区中央東西土層ベルトの断面と出土遺物を観察。
- 3月8日(火)～9日(水) U～W-38～42グリッドのⅣ～Ⅴ層にかけて大形の落ち込みと小竪穴様の平面プランを確認する。なお、中央東西土層ベルトの南側では、遺構らしい落ち込みは本日まで認められない。
- 3月10日(木)～11日(金) S・Y-37～40グリッド内の土坑、ピットを半カットして掘り下げる。S・T-35・36グリッド付近の落ち込みは縄文時代中期の住居址となる。(4号)
- 3月12日(土)～13日(日) Y-43、R-43グリッドの掘り下げ。中央東西土層断面の作成、測量。
- 3月14日(月)～20日(日) 中央東西土層ベルトの掘り下げ、撤去。Y・Z-36・37グリッド、U-36グリッド内から集石状の遺構が出土。4号住居址の掘り下げを行い、縄文土器等遺物出土。調査区土層断面の整備と測量を行う。
- 3月23日(水)～25日(金) 調査区南半部の掘り下げとジョレンがけを行うが、かくらん部分が多く遺構は少ない。小竪穴及び4号住居址土層断面の測量後、排土、掘り下げを行う。
- 3月28日(月)～30日(水) 4号住居址内の排土、小竪穴の精査、V～X-39・40グリッド内のピットの掘り上げを行う。集石とW-37グリッド内マウンド遺構の測量。
- 4月1日(金)～5日(火) 4号住居址内細部の掘り上げ。各土坑土層断面、集石、マウンドの測量。
- 4月6日(水)～12日(火) 数日の降雨によりR-31～42にわたる調査区壁面が崩壊し、この排土作業に思いのほか手間取る。各土坑の掘り上げと測量。
- 4月14日(木)～16日(土) 4号住居址の清掃と写真撮影及び測量。調査区全体の測量。土坑の掘り上げ。
- 4月17日(日)～20日(水) 調査区全体の清掃と写真撮影。5号住居址の掘り上げと測量、写真撮影。4号住居址の埋甕の取り上げと測量。テント、調査器材等の撤収を行い、第3次調査の現場での作業を終了する。(田畑)



第1図 遺跡位置図 (○印)

第II章 遺跡の位置と環境

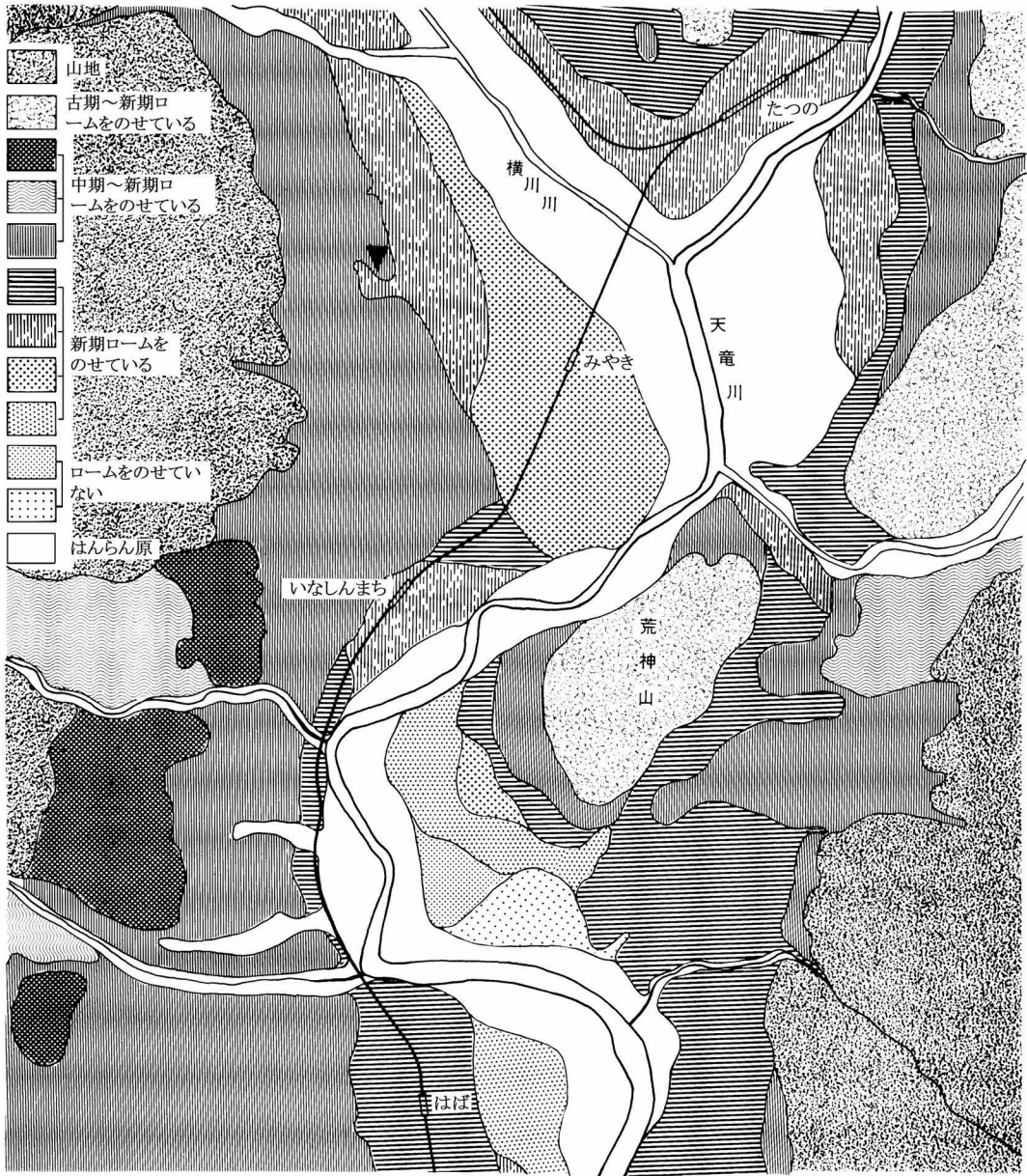
第1節 位置と付近の地形・地質

地理的立地 上の山遺跡は、長野県上伊那郡辰野町宮木の辰野高等学校一帯に所在する。伊那盆地の北端を占める町平坦部では、諏訪湖から流れる天竜川と、小横川川、小野川が流入する横川川とが合流しており、その合流点付近の西1kmの段丘上に立地している。標高は750m前後で、天流川、横川川河床との比高は30~35mである。遺跡西方は木曾山脈北部に属する経ヶ岳山塊の北端で、楡沢山（標高1248.6m）があり、その山麓を東へ流れる楡沢川、滝洞川によって、上の山遺跡の立地する段丘はその北と南で開析されている。遺跡の西側には西天竜用水路が南北に通っており、そこから西方の山地まで複合扇状地が広がっている。楡沢川、滝洞川ともふだんは殆ど流水の見られない涸川で、扇状地下に潜入した伏流水が段丘下の国道脇に湧水となって出ており、生活に利用されている。したがって、遺跡の立地する段丘上は、学校建設以前は畑地で、山麓まで広がる一帯の扇状地は桑園として利用されてきた。

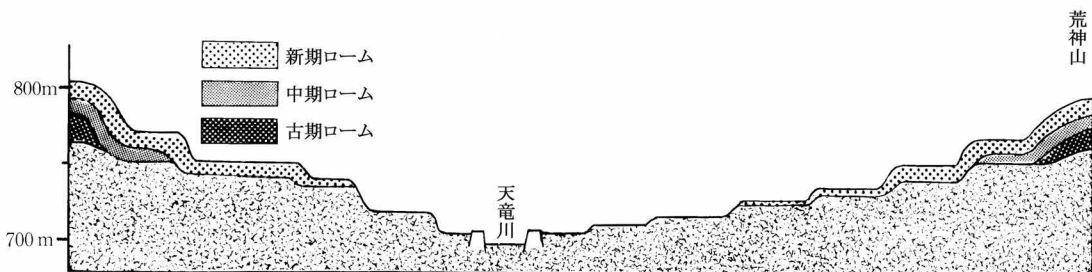
地形・地質 前述したように、辰野町の平坦部一帯は南北70kmの伊那盆地の最北端に位置しており、西は木曾山脈の、東は赤石山脈のそれぞれ北端で、北には標高1035mの大城山がある。これら三方の山地に囲まれた平坦部は、構造運動によって形成されたとされる伊那盆地の低地が埋まったもので、それを埋めている堆積物は、基盤の古生層の上に、天流川本流の古い堆積物、諏訪湖周縁の火山からの火山砕屑物、支流河川から運ばれてきた堆積物、風成テフラ（ローム）、それに崖錐堆積物や沖積土である。

一方、この地域の段丘は、荒神山から南では多いところで6段、北では3~4段が形成されており、天竜川の蛇行する内側ではよく発達していて段数が多い。これらの段丘の基盤を構成しているのが、天竜川やその支流河川による堆積物で、平出礫層、横川礫層と言われている。上の山遺跡の立地する辰野高校の段丘は上から1段目の段丘で、湯舟面と呼ばれ、その基盤を構成する横川礫層の上を、中期ローム上部及び新期ロームが被覆している。この横川礫層は、天竜川東の礫層とは対照的に安山岩を含まない点が特徴で、砂岩、粘板岩、珪岩、チャート等から構成されている。なお、この湯舟面の段丘はPm-III降灰以前に離水し、これより上層のテフラ（ローム）をすべてのせているわけだが、ロームと崖錐堆積物が互層をなしていることから、付近一帯の扇状地の形成は継続していると考えられている。上の山遺跡の北300mの高畑地籍上の湯舟団地下露頭では、Pm-III、Pm-IVが確認されている。（註1）

ところで、この遺跡の西方には活断層のあることが知られ、北大出神明神社裏一向袋西方山地一新町貯木場を結ぶ線がケルン・コルに相当すると考えられており（註2）、新町上水道水源地の露頭では、昭和4年に春日琢美によって、ローム層を切る断層が観察されている。（註3）（赤羽）



▼印は上の山遺跡



[東西断面模式図]

第2図 辰野町段丘面区分図

第2節 歴史的な環境

辰野町宮木地区は遺跡の稠密地帯で、低位から高位の段丘上には大規模な遺跡が櫛比している。町内最大級の前田遺跡をはじめ、重要な遺跡も多い。以下、小横川川南から新町北部付近にかけての遺跡を概観しながら、この地区の歴史的な流れをおってみたい。

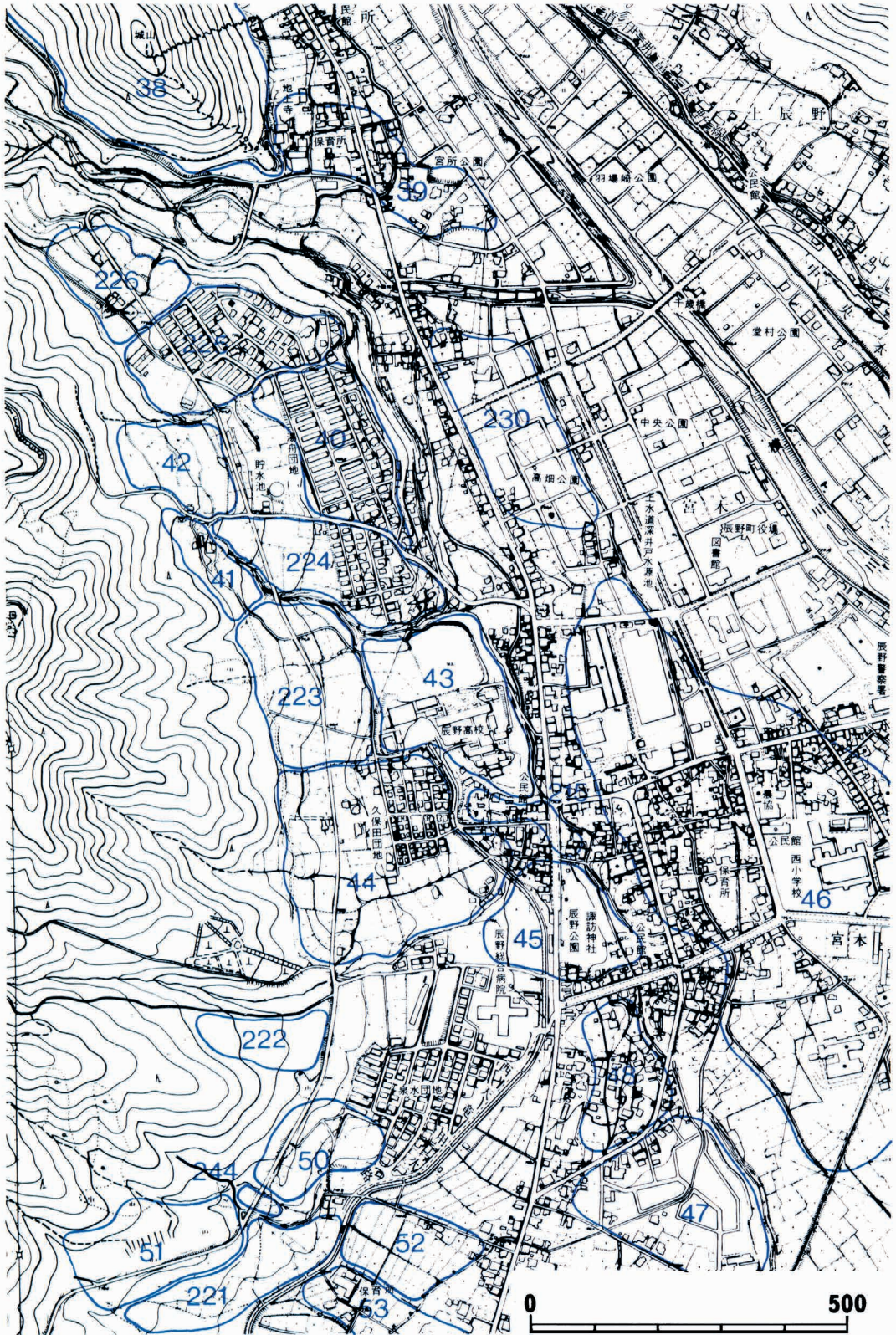
縄文時代の遺跡としては第3図の殆どが該当するが、中でも榊林遺跡は昭和61年に発掘調査が行われ、縄文時代早期の押型文土器を出土した住居址や集石炉が発見された。続く縄文時代前期は、楡沢山麓遺跡として古くから知られていた遺跡があり、前期末葉の土器片が多量に採集されている。また同じく山麓の榊林遺跡では前期末の小竪穴が出土しているほか、中期初頭の小竪穴群が発見された。他に北湯舟B遺跡でも中期初頭の土器が採集されている。中期中葉の時期は今までのところ目立った遺構、遺物の出土はないが、榊林遺跡で復原可能な土器2点を採集している。中期後半の遺跡としては、前田遺跡がある。この遺跡内の春日電機(株)工場から中部電力変電所付近一帯で、曾利式土器多数が採集されているという。なお、富士塚北遺跡では縄文時代中期ころと思われる狩猟用の落穴遺構数基が発見され、一帯の遺跡立地にひとつの示唆を与えた。

縄文時代後期の遺跡としては泉水遺跡があり、県指定となっている加曾利B式の土偶が出土している。また、近接する榊林遺跡では同じく加曾利B式期の土偶片と土器が発掘されている。縄文時代晩期の遺跡は町全体でもきわめて少なく、樋口五反田遺跡で配石墓と土器が出土している例がよく知られている(註4)にすぎないが、上原遺跡では晩期らしい土器片が発見されている。

弥生時代の遺跡は、宮木地区一帯では今のところ殆ど見当たらないが、上の山遺跡の第1次調査で細片がわずかに出土している。今後新たに発見される可能性が十分ある。続く古墳時代の遺物も皆無に近い状態だが、かつて古墳らしいものがあつたと伝えられる所が1ヵ所ある。

次の奈良、平安時代の遺物が出土している遺跡は多く、殆どの遺跡で平安時代の土師器や須恵器の破片が採集されている。諏訪神社境内地を含む月丘の森遺跡では、古くから土師器等が採集されており、前田遺跡でも、昭和40年代初めの辰野西小学校校舎改築工事中には多くの土器が出土したと言われ、詳細は不明だが土師器、須恵器であった可能性がある。また、こうした段丘上の大きな遺跡とは対照的に、山麓にも平安時代の遺跡があり、富士塚東遺跡は急傾斜地に立地し、土師器等遺物も多く出土している。なおこの時代町内には官牧として平井手、宮所両牧が設置されており、特に宮所牧とこの宮木一帯の遺跡との関連は今後十分検討すべき課題であろう。

さて、城館跡としての上の山遺跡と関係の深い付近の中世以降の遺跡は、小横川川をへだてて北側に竜ヶ崎城址がある。北方の山地から文字どおり竜の首のように突き出た山を利用して山城が築かれており、山頂には土塁がのこっていて、その北と南の尾根上や山腹には数本の堀切が見られる。この竜ヶ崎の地名についてはすでに、『守矢満実書留』寛正5年(1464)に、「宮所龍ヶ崎之城」、『諏訪御符礼之古書』長享元年(1487)に「りうか崎之城」とあり、『高白齋記』は、天文14年(1545)6月の武田信玄伊那進攻の際、福与城の藤沢頼親援護のための小笠原長時勢の



第3図 周辺遺跡分布図

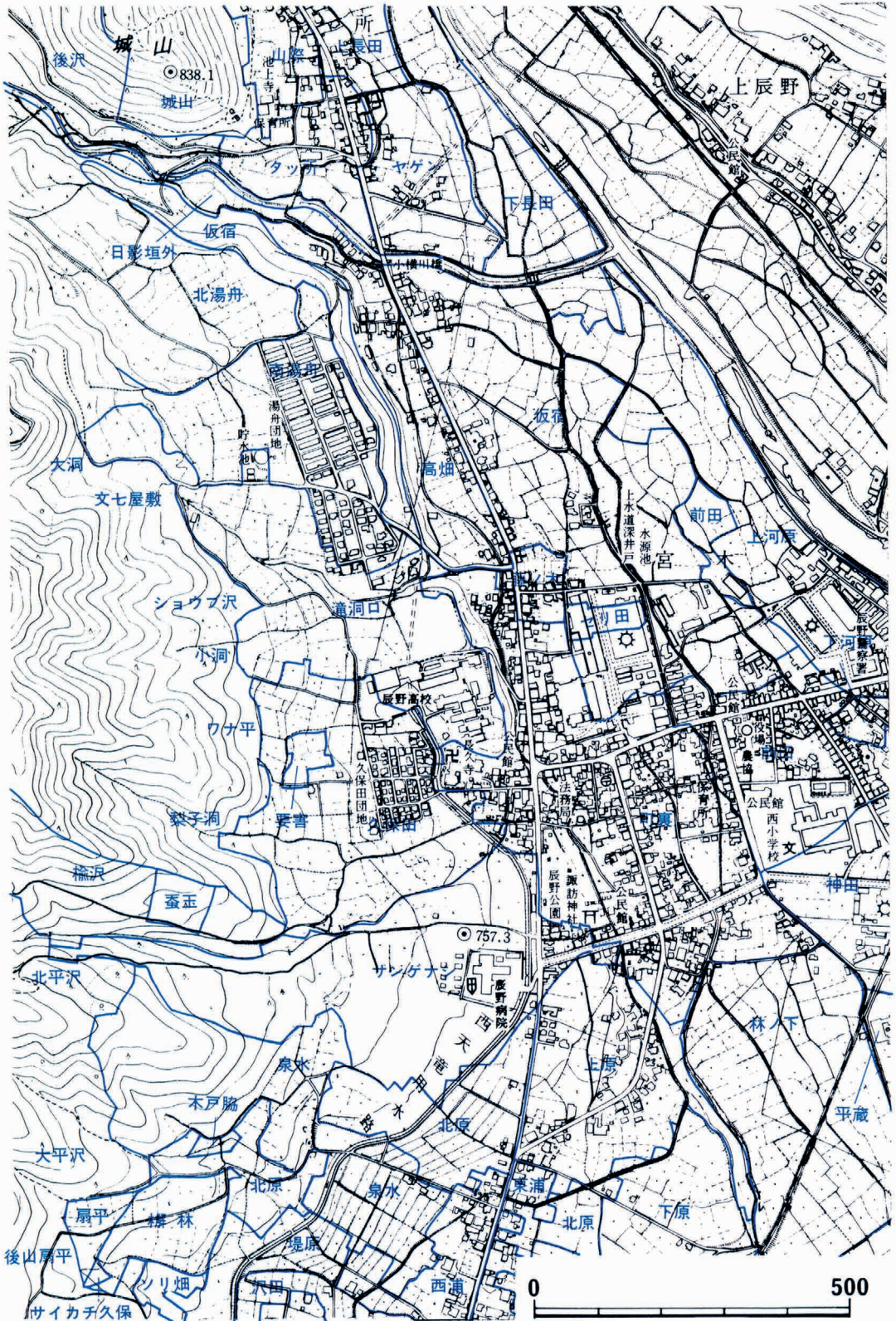
陣場となったことを伝えている。ところで、『伊那温知集』によれば「弘治天正の頃郷士矢島勘六其子勘兵衛居住の後今以天白之小城と云在」とあり、上の山の地は江戸時代にすでに「天白之小城」と呼ばれ、戦国時代末期には矢島氏の城館であったと伝えている。矢島勘兵衛はいわゆる寛永年間の上伊那十三騎のひとりで、寛永13年(1636)の高遠城主保科正之の出羽山形転封の際、従って行ったとされている。(註5)

なお、天和3年(1683)には、伊那街道の宮所宿と新町の相宿に代わって宮木村が継立宿となり、以後宮木宿が成立し、今日の宮木の集落を形成するに至った。(註6)

地名 第4図は明治22年の土地台帳による地名だが、宮木地区の歴史を知る手がかりになりそのような地名も多い。「要害」は城館跡と直接関係がありそうで、元禄3年の検地帳には「やうかい」と記されている。「湯舟」「神田」などは諏訪神社との関連が考えられる地名で、やはり元禄検地帳にも見える。「サンゲナシ」もやはり元禄検地帳に「さけなし」とある。また、「平蔵」は意味がはっきりしないが、平出の辰野東小学校付近には「半平蔵」という地名がある。(赤羽)

No.	遺 跡 名	縄 文 時 代					弥 生 代	古 墳 代	奈 良 安	中 世 以 降	備 考
		早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期					
38	竜ヶ崎城址								◎	別称、小城・城山	
39	タ ッ 所			○							
40	湯 舟			○				○			
41	楡 沢 山 麓		○	○				○			
42	湯 舟 西			○							
43	上 の 山	◎	◎	◎			○		◎	昭61.発掘調査	
44	久 保 田			○				○			
45	月 丘 の 森							○			
46	前 田			○				○			
47	上 原			○		○?		○	○	57	
48	天 狗 坂			○							
50	富 士 塚 東			○				○			
51	櫛 林	◎	◎	◎	◎					昭61.発掘調査	
52	泉 水				○				-	県宝指定 土偶出土	
53	泉 水 南							○			
215	長 久 寺 下						○?	○			
221	櫛 林 第 二	○		○							
222	富 士 塚 北			◎				○	○	昭57.発掘調査	
223	滝 洞			○					◎	昭60.発掘調査	
224	南 湯 舟			○				○	○		
225	北 湯 舟 A			○				○?	○		
226	北 湯 舟 B			○					○		
230	仮 宿							○			
244	木 戸 脇				○						

周辺遺跡一覧表 (○は遺物出土、◎は遺構出土を示す)



第4図 周辺地名分布図

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要

今回の発掘調査地点は、昭和61年7月、8月に行なった第1次調査の普通教室棟調査区の北に隣接するところで、第1次調査の結果から縄文時代や中世の遺構の出土が予想された。このため、旧校舎取り壊しの際には、地下の遺構、遺物が新たに破壊されないよう、廃材等の土中への埋納を避けた。また、第2次調査対象箇所は面積が941.1m²と中規模であり、第1次調査の際に土層の状態もある程度把握していたので、事前に試掘調査は行なわず、最初から対象地全面の発掘調査を行なうこととした。グリッドは2m四方とし、第1次調査のグリッドに合わせ、それと連続するように設定し、南北方向は数字を、東西方向はアルファベットと五十音の片仮名を用いて標記した。なお、第2次の昇降口棟調査区と第3次の調査区とのZ列は手違いにより2m×3mとなっている。また、標高は標高値が求められている工事用のベンチマーク(753.187m)を基準点として使用した。

上の山遺跡内は、大正元年の伊北農蚕学校創設以来、伊北農商学校の時期や、辰野高等学校となってから増改築工事が何回も行なわれ、第1次調査の際にもそのころ行なわれた傾斜地の削平や盛土が認められていたため、調査時の表土除去は盛土と思われる箇所を中心に重機を使用し、以下は手作業で進めた。遺構の所在の確認まではジョレン等を用いて掘り下げ、遺構内の排土には移植ゴテなどを使用した。なお、土坑、小竪穴などは半カットの状態掘り下げ、住居址は土層あぜを残すなどし、遺構内の土層の観察と記録につとめた。また、今後隣接地内において増改築工事も見込まれるため、調査地区内の土層の状態をできる限り観察し、記録化を行なった。なお、昇降口棟調査区の第2次と第3次の調査区の間には、壁面の崩落防止と土層観察のため約2m幅の未掘域が残ることとなった。

出土遺物の取り上げは、表土下から遺構確認面まではグリッド別、層位別に行ない、遺構内の遺物は各遺構別に取り上げ、必要に応じて適宜出土位置やレベルを記録し、図化及び写真撮影を行なったものもある。整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺物番号を註記した。現場での撮影には一眼レフ2台を使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影は大型カメラにより、6×9モノクロームネガフィルムを使用した。

第2次、第3次調査の出土遺構、遺物の概要は次のとおりである。

1. 竪穴住居址2基(縄文時代前期1、同中期1)
2. 小竪穴6基(縄文時代早期)
3. 焼土2ヵ所(縄文時代早期?)
4. 集石3ヵ所(縄文時代2、時代不明1)
5. 土坑19基(縄文時代前期1、同中期3、時代・時期不明15)
6. ローム・マウンド2基(時代不明)
7. ピット(小土坑)約30ヵ所(時代不明)
8. 腰曲輪1基(中世)

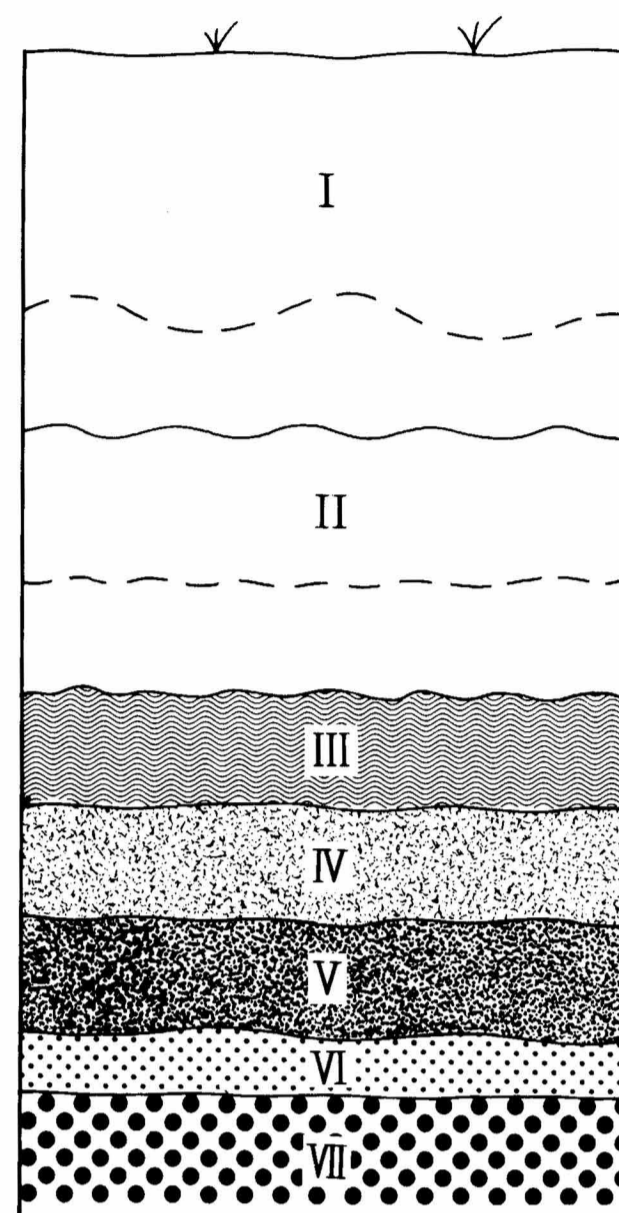
出土遺物総点数(土器、石器、陶磁器)は、第2次約300点、第3次2800点である。(赤羽)

第2節 遺跡の層序

上の山遺跡の立地する段丘上は長く畑地として利用されてきたが、大正元年この地に伊北農蚕学校が創設され、以来70余年の間に校舎等の増改築がたびたび行なわれてきた。もともと段丘上はフラットな面ではなく、全体が東へ緩く傾斜し、東端部近くで急傾斜となる断面構造で、校地内は削平や盛土工事がたびたび行なわれてきた。従って、第1次調査以来、校舎建設以前の旧状を示している土層の状態をできる限り把握することにつとめ、発掘調査区各壁面の土層の観察と測量を行ない、記録化をはかった。(第7図、第8図)

基本的な土層層序は第1次調査時とできる限り統一したが、今回の調査ではひとつの土層内をさらに分層せざるを得なかった層もある。しかし、主要な土層の堆積順序は、遺跡全体としてはほとんど共通していると思われる。

各基本土層は次のとおりである。(第5図)



第5図 遺跡基本層序概念図

I層 伊北農蚕学校、伊北農商学校、辰野高等学校による整地

工事等の埋土で、古いものから新しいものまで含めておよそ3層くらいに細分できそうだが、今回は1層としてまとめた。段丘東端に近いほど厚く、音楽棟調査区の東壁断面では約3mとなっている。大正時代以降の陶磁器などが出土している。なお、古い時期の水道埋設等の掘り込みは、かくらんとして扱った。

II層 学校建設以前の旧表土で、かつて畑地の耕作土でもある。灰黒色の土でやわらかく、中世以前の遺物は殆ど包含していないが、江戸～明治ころの陶磁器片がわずかに出土する。

III層 黒色土でやわらかく、中世末期の遺物包含層である。中世の遺構はこの層中から落ち込んでいたと思われる。

IV層 灰黒褐色で、場所により茶褐色に近い色調となるため、IV-2層として分層したところもある。ややしまった感じの土層で、木炭粒を含み、縄文時代前期末～中期の遺物を包含している。この層の下部付近で中期の遺構が落ち込む。

V層 黒色土だがしまっており、木炭粒の包含が目立つ層である。場所によってこの層の下部でローム粒多くまじり、V-2層とした。縄文時代早期後半の遺物を包含している。

VI層 黒色土とソフトロームがまじった土層で、縄文時代早期後半の遺物が含まれている。

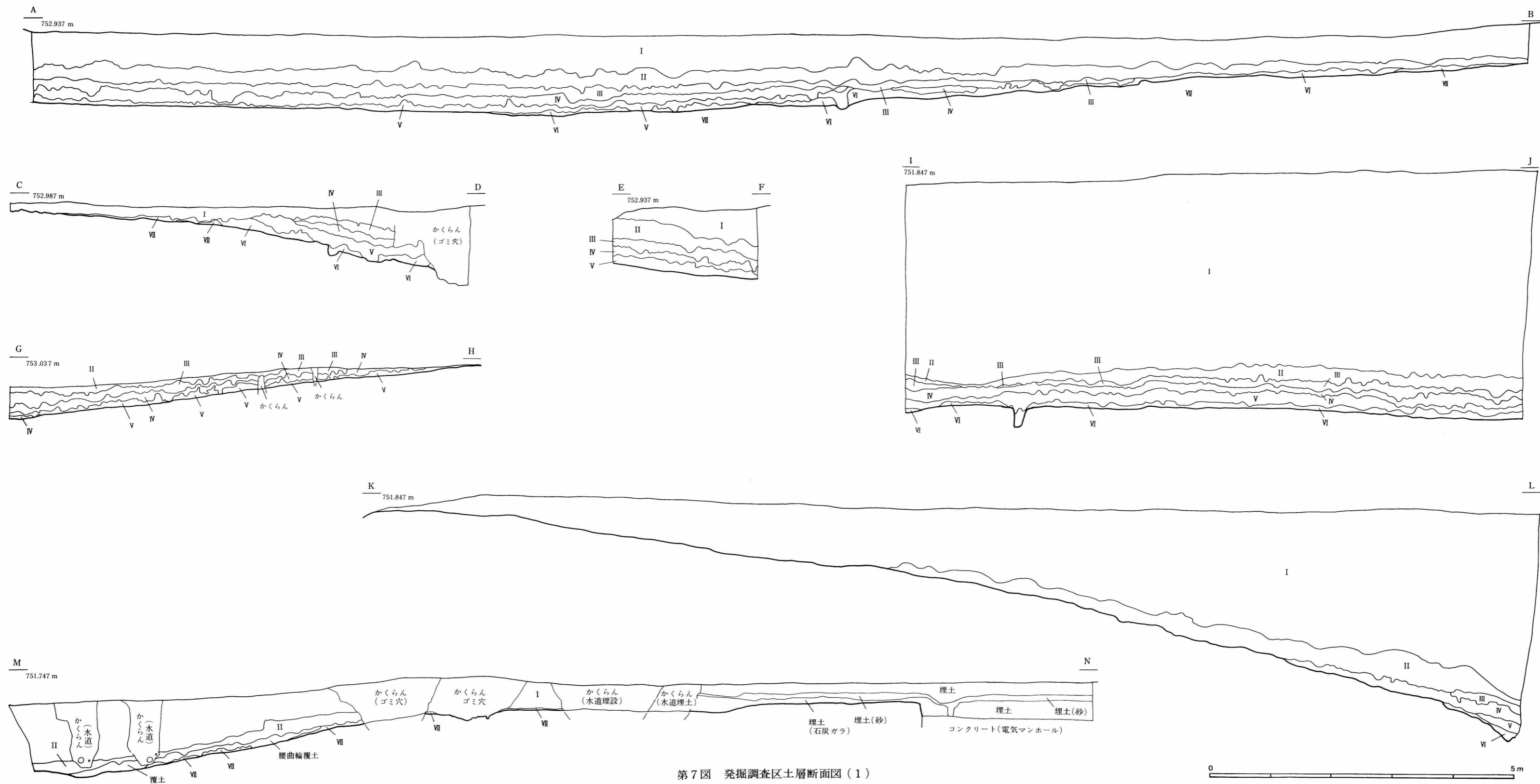
VII層 ソフトロームの上部で、第2次調査区内の西側部分では、この層までが削平されていた。ロームの深掘りは行なわなかった。

(赤羽)



第6図 発掘調査区位置図

第1次調査区
 第2次調査区
 第3次調査区



第7図 発掘調査区土層断面図(1)

第Ⅳ章 第2次調査区の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1. 第1号小竪穴

昇降口棟調査区の北東隅に近い斜面のⅥ層中に4ヵ所の円形の落ち込みが認められ、内1ヵ所からはすでに早期の土器片がまとまって出土していたため、この時期の小竪穴の可能性があると考え、各落ち込みの土層断面を観察しながら慎重に掘り下げを行なった。

第1号小竪穴は径1.6m×1.7mのほぼ円形で、壁高は西側で45cm、東側で35cmあり、垂直に近い状態だが、南～東の壁は中ほどで若干外へ張り出している。覆土は上部は黒色で、プラン確認は容易であったが、内部壁際では色調がロームに酷似し堅かった反面脆く、壁との区別は明瞭であった。床面は堅く、中央部でやや高くなっていた。小穴5個があるが、深さ3～11cmと浅い。遺物 第10図1及び10が出土している。1は繊維含有の内条痕施文の土器で、焼きは良い。10は安山岩の磨石で片面には敲打による凹みがあり、欠失した割れ面にも敲打痕が見られる。

2. 第2号小竪穴

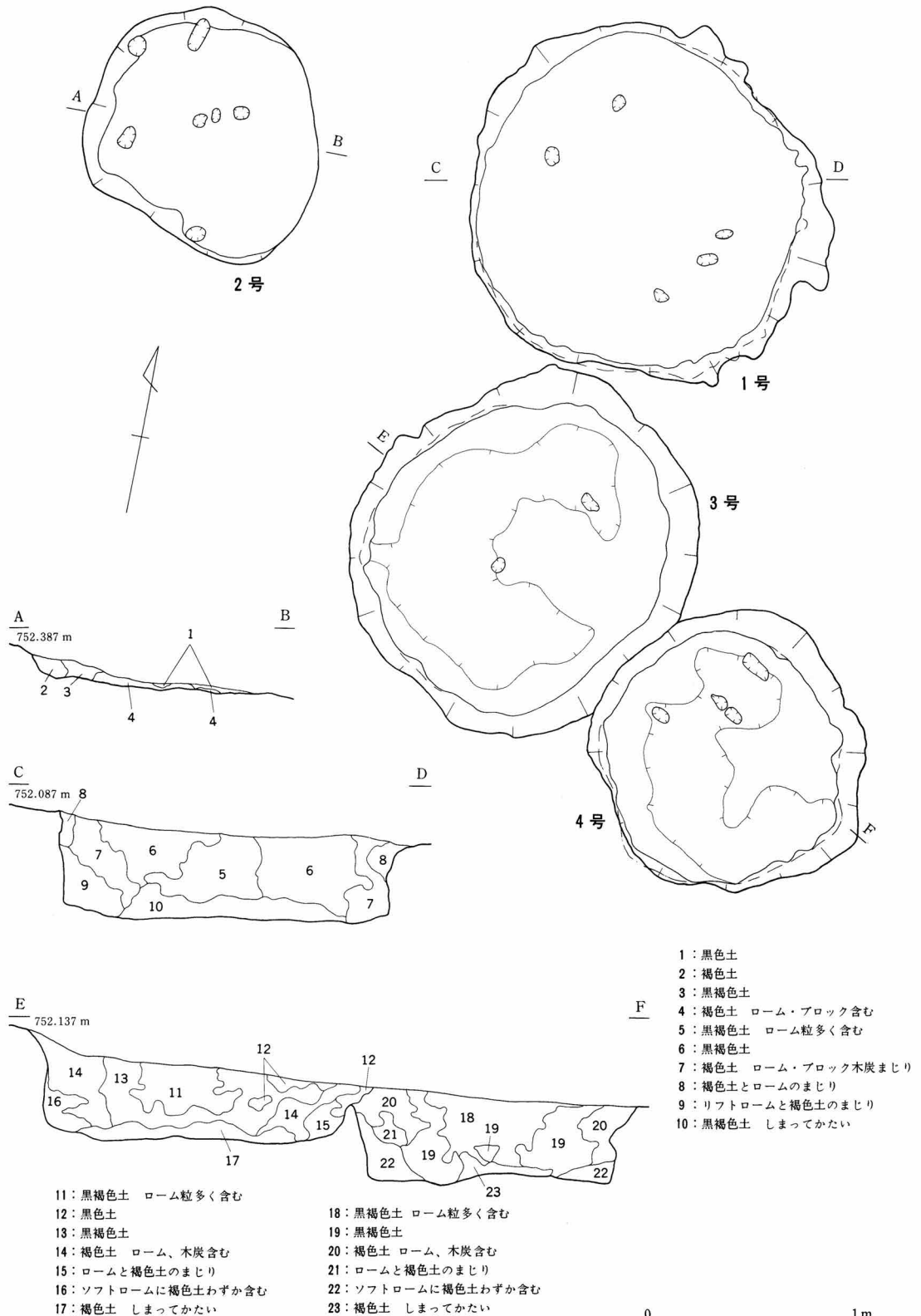
第1号小竪穴の西80cmに位置する。この付近は埋土やかくらんが複雑に入り組んでおり、重機による削りすぎのため壁高はわずかとなってしまった。また、東へ傾斜しているため、東側の壁は確認することができず、床面の広がり把握するにとどまった。床面は他の小竪穴にくらべ、やや軟弱であった。竪穴内には7個の小穴があったがいずれも浅く、深さ10cmに満たない。

遺物 床面に近い覆土中から、第10図11の土器がまとまって出土した。推定口径22.4cmで、頸部をはさんで口縁部と胴上半部に文様帯があり、口唇上には連続押捺が加えられている。施文は、条痕が磨り消し調整された上に、細沈線による区画が行なわれ、三角形の区画内を太沈線により充填する。なお、内面と胴下半部外面には条痕が見られる。底部形態は平底と考えられるが断定できない。外面には、煮沸時のものと思われる炭化物の付着が著しい。

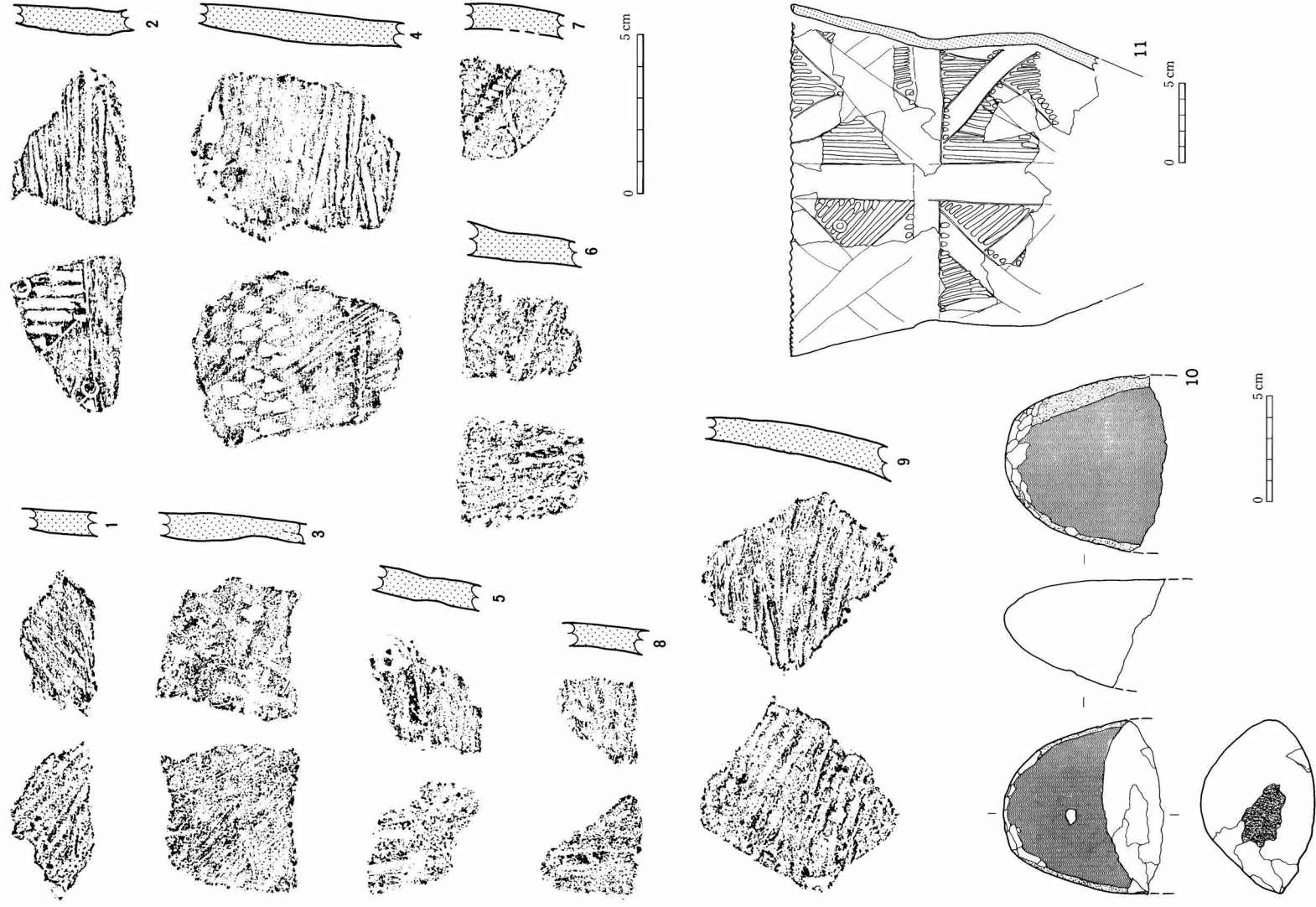
3. 第3号小竪穴

第1号小竪穴の南数cmに近接しており、第4号小竪穴とは南東の壁が重なっている。時間的新旧は土層断面E-Fの観察から、3号は4号より新しいと判断した。径1.7m×1.6mの平面ほぼ円形で、壁は1号と同様明瞭だが、底部近くはやや外へ張り出している。床面は堅いが、壁際と、南東から張り出した中央部がわずかに高い。深さ5cmほどの小穴2個がある。

遺物 第10図2～7が出土しており、2は細沈線と太沈線及び竹管の円形刺突が見られ、内面は幅広の条痕がある。4は竹管の先端部側面を斜めに連続押捺した施文があり、3は擦痕が見られ



第9図 第1号~4号小竪穴実測図

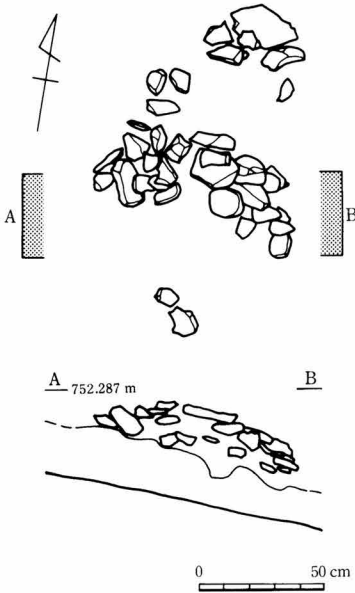


第10图 小竖穴出土遗物实测图

る土器である。5、6、8は尖底土器の底部近くの破片で、器面は荒れているが外面には縦の、内面横方向の粗い条痕がある。7は単節縄文R-Lが施文されており、器面は平滑で条痕はない。以上いずれも繊維を含む。

4. 第4号小竪穴

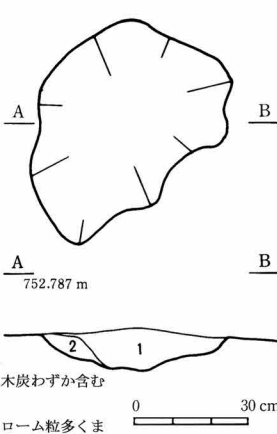
第3号小竪穴と一部重複し、径1.3m×1.4mの不整円形で、壁はしっかりしているが南側はやや袋状となっている。床面は堅いが3



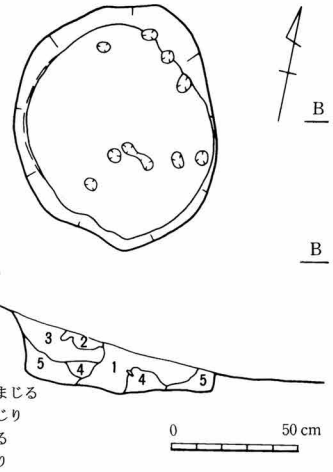
第12図 第2号集石

7. 第1号・2号焼土

1.6m離れて並んでおり、わずかな焼土と焼礫数個があったが、ピット内は焼けて赤化していた。内部から土器等の遺物の出土はなかった。



第13図 第1号焼土



第11図 第5号小竪穴実測図

号と同様わ

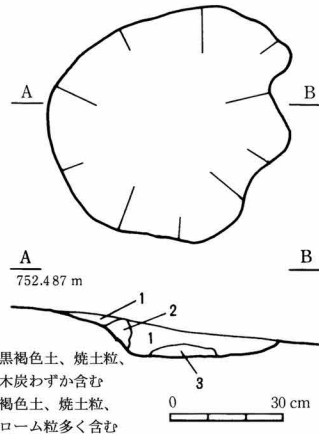
ずかな高低がある。小穴4個があるが、深さ8cmに満たない。遺物 第10図9は覆土中から出土し、内外に条痕が認められる。

5. 第5号小竪穴

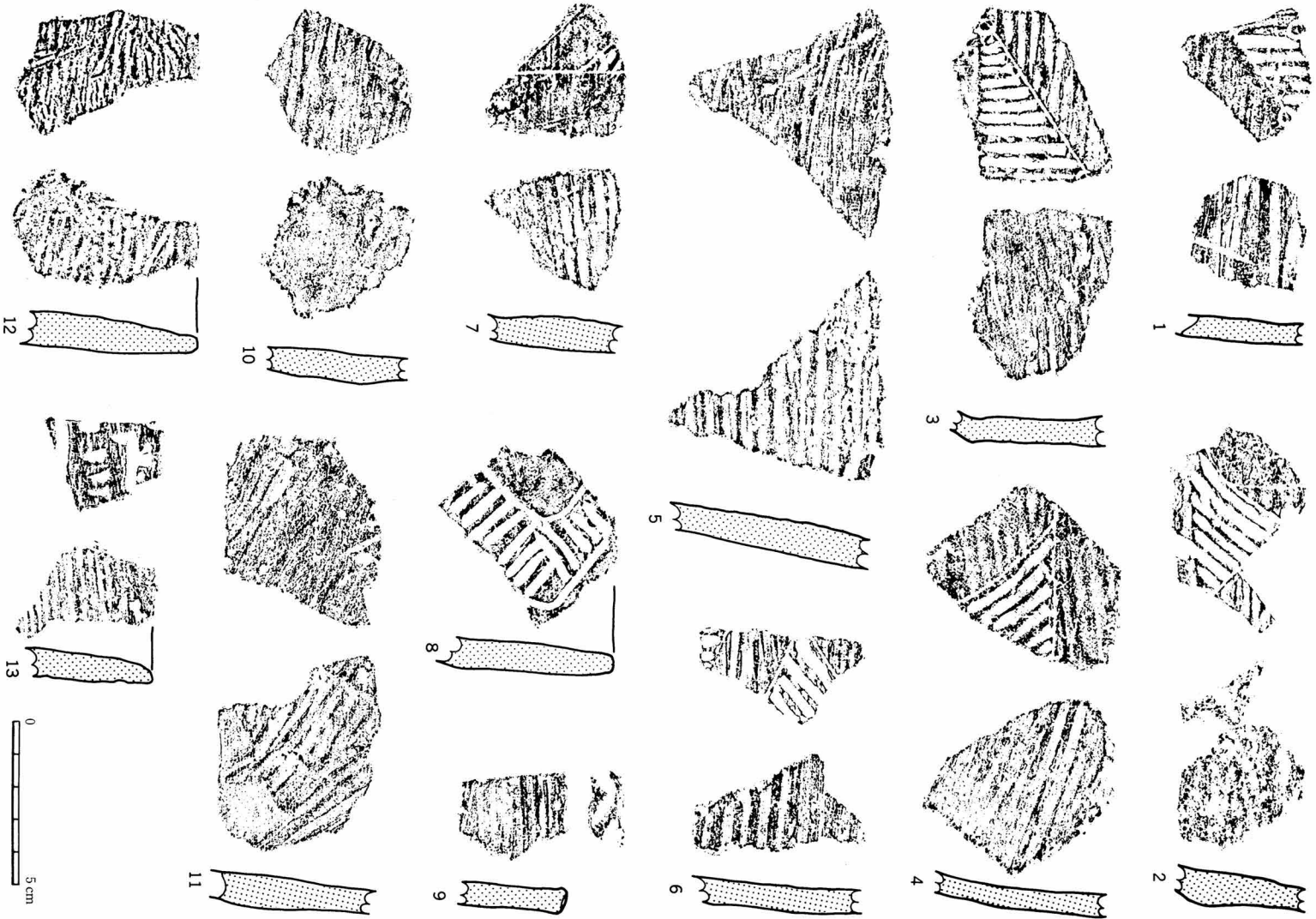
音楽棟調査区東端の傾斜地に発見され、1m×0.8mと他より小形の楕円形である。床面はやや軟弱で、浅い小穴10個がある。遺物 土器細片1片が出土したが、繊維を含まず、前期末の可能性もある。

6. 第2号集石

昇降口棟調査区内の小竪穴群の南に位置する。集石は焼けた礫もあったが、下部に土坑等はなく、遺物は出土していない。



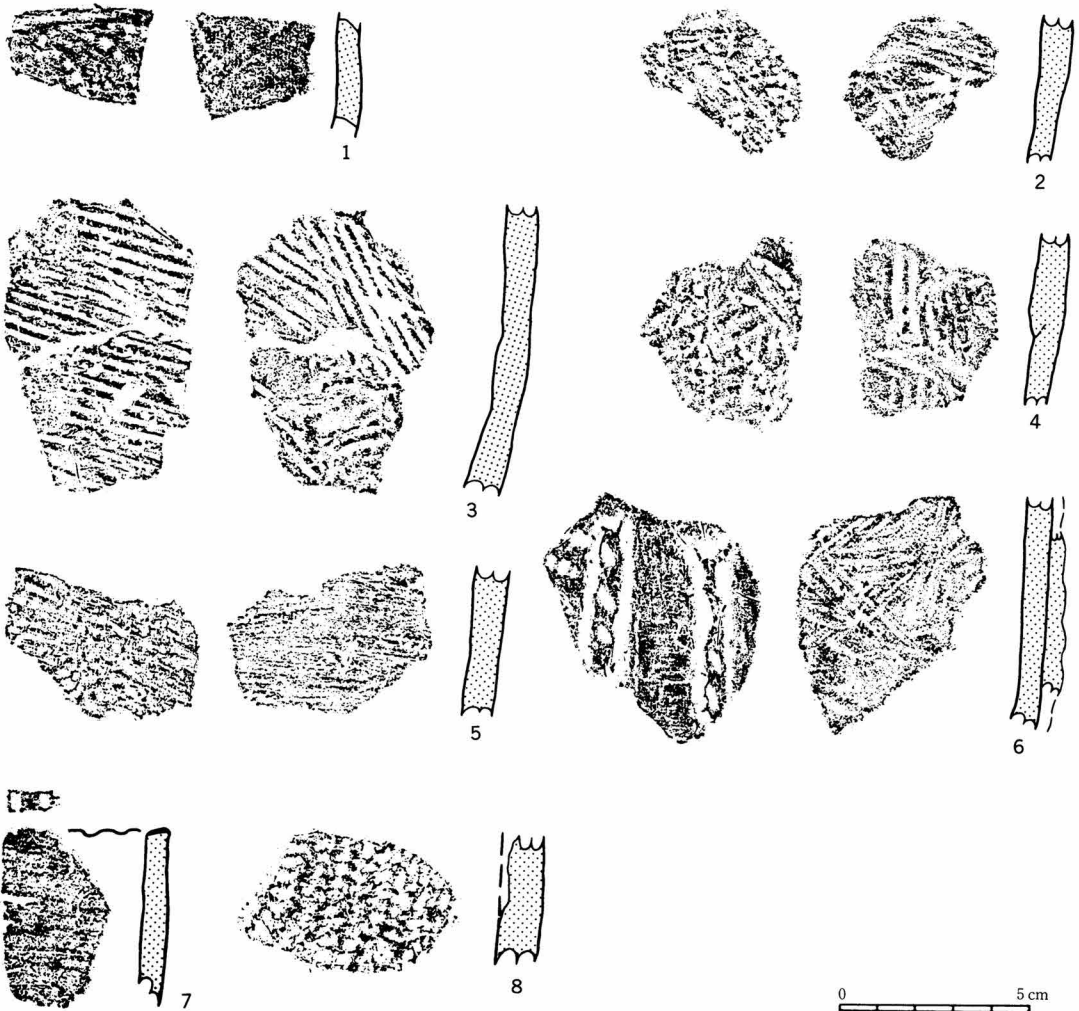
第14図 第2号焼土



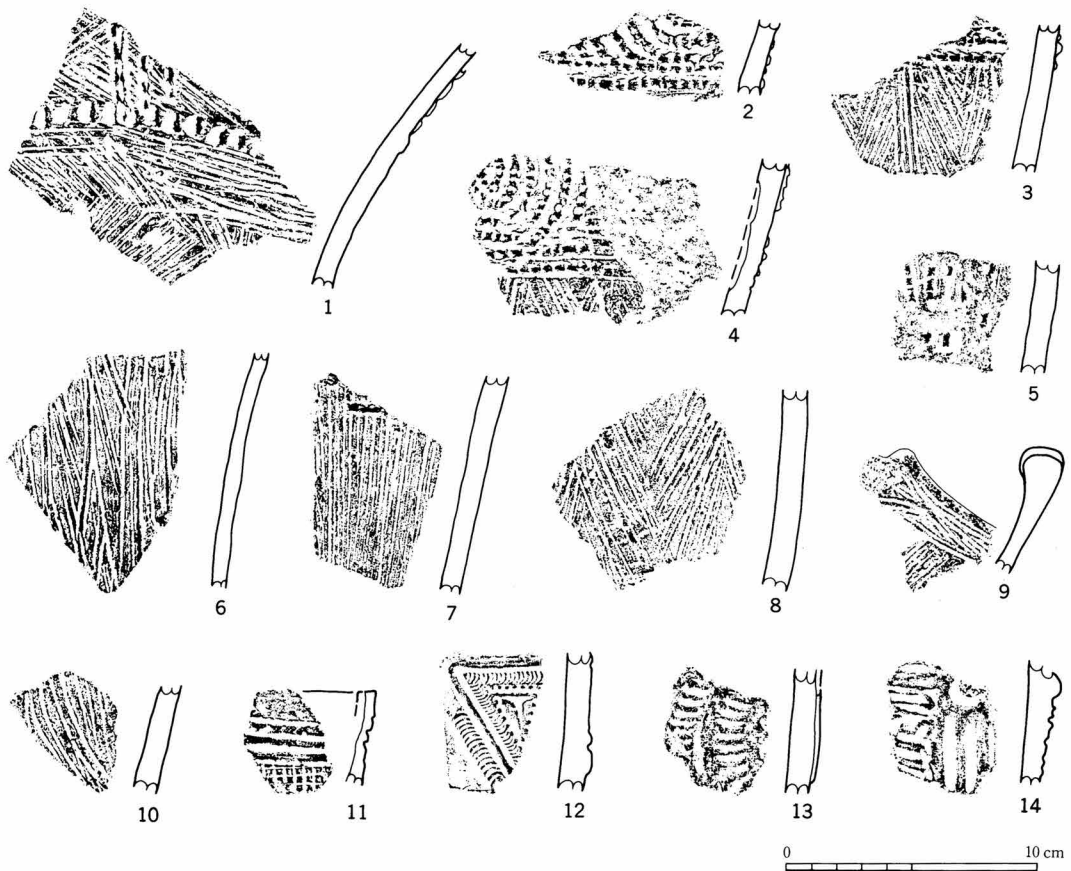
第15図 縄文時代早期土器拓影図(1)

7. 早期の土器

第15図、16図は遺構外から出土した早期の土器で、すべて繊維を含んでいる。第15図1~4、7、8は、条痕施文の上に細沈線による区画があり、三角形の区画内を太沈線で充填する文様が共通するもので、内面にも貝殻条痕が見られる。2、3は頸部直上の「く」の字形に屈曲する部分の破片で、6もその可能性がある。5は外面に細かな条痕文、内面に幅広の貝殻条痕文がある。1~7の土器はこのように施文が共通するだけでなく、胎土、焼成も近似する。18は口縁部破片で、条痕はなく太沈線による区画と充填が行なわれている。9は口唇上に蛇行状の押捺施文がある口縁部破片で、13は2本の平行凹線と連続刺突が施文される口縁部である。10、11には浅い不明瞭な条痕が見られ、12の口縁部破片には内外面にやや乱雑な細かい条痕がある。第16図1、2、4は貝殻腹縁による刺突文がある土器で、2、4は3の内外条痕施文の土器と同一個体である。6は2本



第16図 縄文時代早期土器拓影図(2)



第17図 縄文時代前期及び中期土器拓影図

の垂下隆帯上に押捺が加えられており、竹管状施文具の先端による結節状の施文も見られ、内面は多方向に条痕が施文されている。5、8は縄文施文の土器で、内面はナデ整形痕であろうか。7は厚さ5mmの薄い土器で、繊維の含有はあまり多くなく、口唇上には連続押捺痕がある。

8. 前期の土器

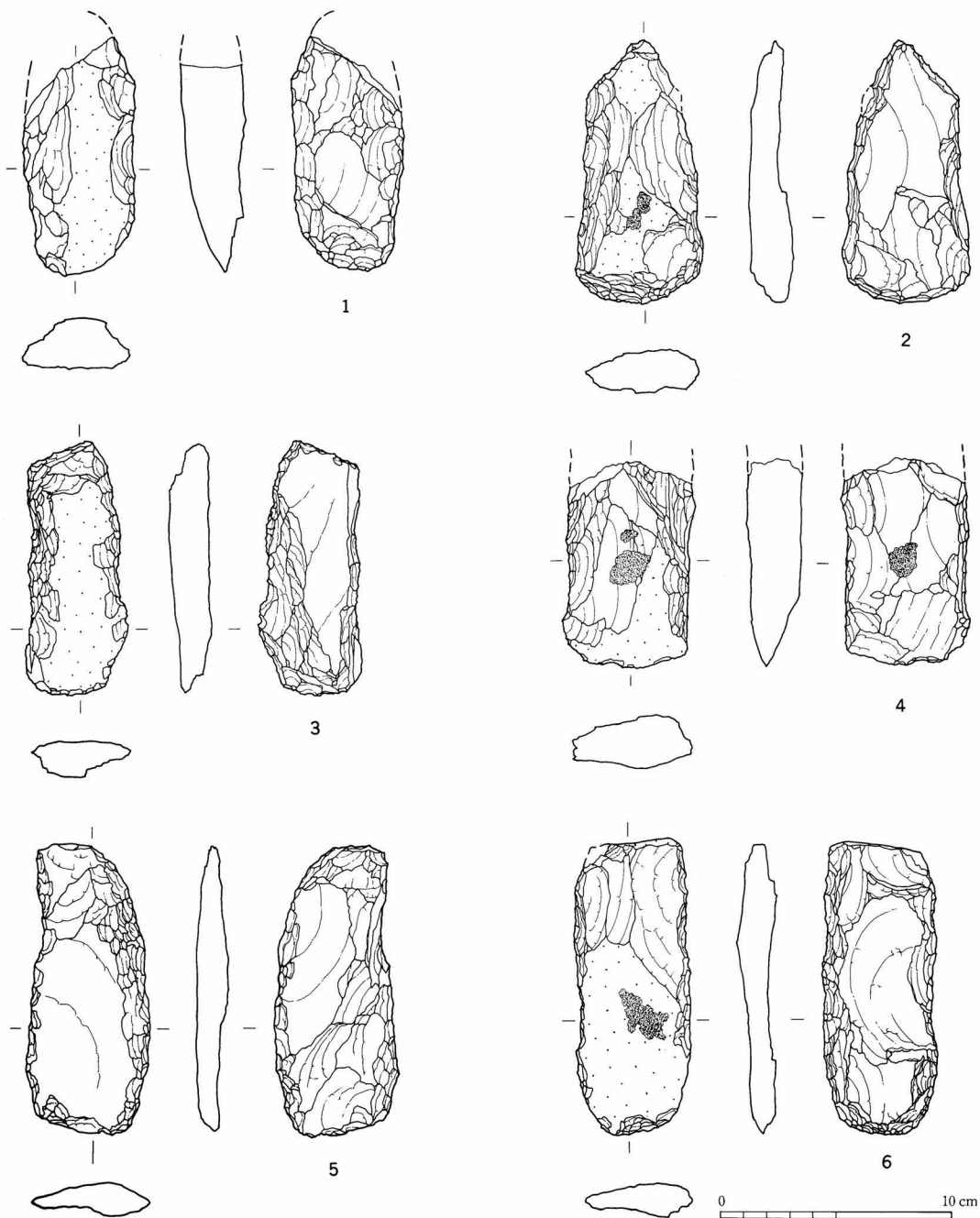
第17図1~10は縄文時代前期末の土器で、1は沈線文の上に結節状浮線文と連続刺突文がある口縁部破片で、強く外反している。2~4は渦巻状に構成される結節状浮線文と平行沈線文がある土器で、同一個体である。5は篋切浮線文がある。6~10は沈線文のある破片で、7には結節状浮線文があり、9は波状口縁頂部の破片で、頂部は肥厚している。10は弧状の構成となると思われる。1、6~8は日向I式、2~4、9、10は日向II式に相当する土器であろう。

9. 中期の土器

第17図11は中期初頭、12、13は中期中葉の藤内式、14は中期末の曾利式土器の破片である。

10. 石 器

遺構外からは、第18図～20図の石器が出土している。第18図1～6はいずれも打製石斧で、2、6の片面には敲打痕があり、4には両面に敲打痕が見られ、1とともに基部を欠失している。ま



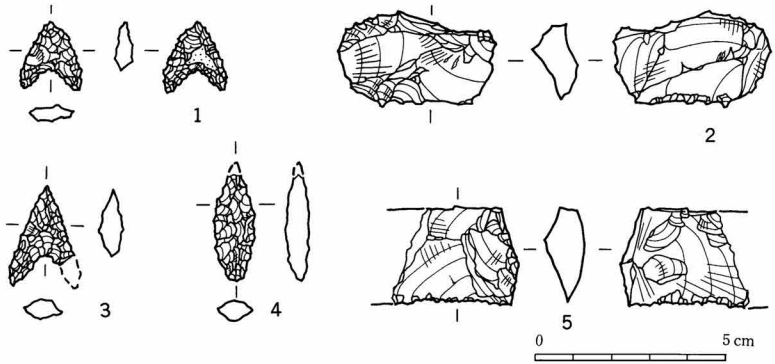
第18図 縄文時代石器実測図(1)

た、3の先端部には肉眼で
使用痕が観察された。なお、1が砂岩を
用いているほかは粘板
岩が使われている。

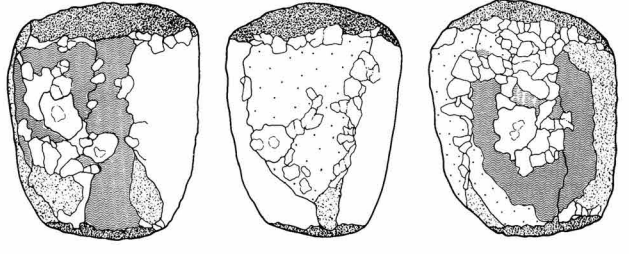
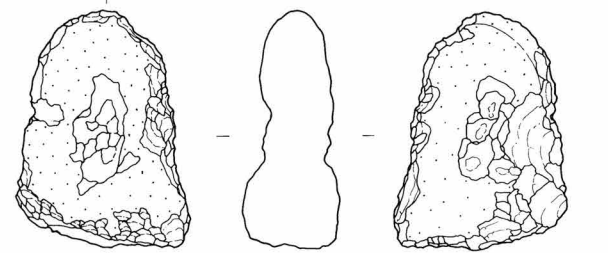
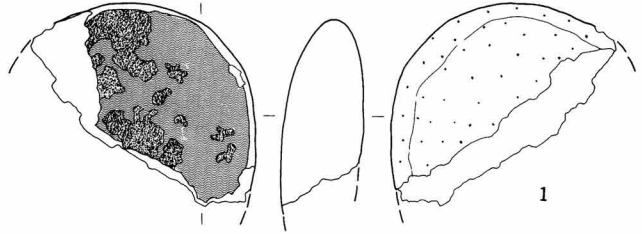
第19図1、3、4はい
ずれも黒曜石製の鎌で、
1は逆刺から先端にか

けての側縁が円みをもつ小形のもの、
4は逆刺のない小形ポイント状のも
ので、先端を欠失している。2は剥
片の側縁のひとつに使用痕が見られ、
5も同様に縦長の剥片の側縁のひと
つに使用痕が認められる剥片石器で、
削器的な機能をもつものであろう。
2点とも黒曜石を用いている。2は
腰曲輪内の覆土中から出土し、1、3
4、5は昇降口棟調査区内から出土し
ている。

第20図1は、砂岩の円礫の片面
を敲打後研磨が行なわれている石器
で、全体の二分の一は欠失している。
2は安山岩の凹石だが、楕円形の礫
の一端が平坦に作り出され、凹石の
凹みと敲打痕が見られる。3も安山
岩の凹石だが、長軸の両端が敲打に
使用されている。また、断面は四角
形に近いが、4ヵ所の稜はいわゆる
特殊磨石に見られる磨滅と、研磨が
観察される。主要な6面すべてが用
いられた多機能な石器である。1は
腰曲輪内の覆土中から、2、3はアー
34グリッド、イー36グリッドから
それぞれ出土している。 (赤羽)



第19図 縄文時代石器実測図(2)



第20図 縄文時代石器実測図(3)

第2節 歴史時代の遺構と遺物

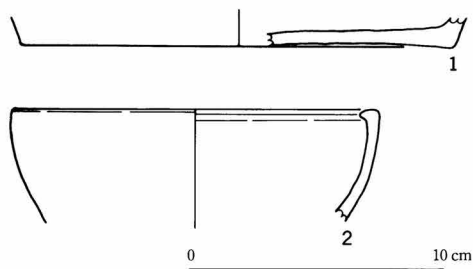
1. 第1号腰曲輪

音楽棟建設予定地の調査区は、高校の正面玄関へ通じる登坂路の南で、段丘の東端部分である。従って、旧図書館は段丘端の傾斜地に盛土と削平を行なって建設されており、調査区内の地表から遺構確認面までは、最も深いところで約4m、盛土部分だけでも3.3mあったが、逆に西寄りの箇所ではローム層中まで削平されていた。丁度この盛土と削平の境付近を中心に大形の落ち込みが認められ、発掘の結果およそ13m×27mの平面長方形の遺構となった。段丘崖へ続く傾斜地を掘り込んで平坦にして床面としたもので堅く、西側の壁高は約1.2mで断面「く」の字形になっている。東側は盛土を行っていたか確認することはできなかったが、この遺構は段丘中腹の腰曲輪のひとつであろうと考えた。遺構内北東コーナーに接して床面のわずかな高まりが認められたほか、内部には多数のピットが検出された。しかし、その内4カ所のピットは深さもあるが、その他のものは深さ数cmと浅かった。これらの浅い小穴はこの遺構に伴うものか疑問で、後世の耕作による可能性もある。

遺物 遺構内から出土した遺物は陶磁器片など12点と少なく、すべて覆土中からの出土で、中世の遺物は内耳土器1片だけであった。第21図2は鉄釉の片口鉢だが、明治時代ころの新しいものである。他の鉄釉、灰釉、染付などの破片も、いずれも明治以降のものである。従って、この遺構の正確な時代や時期は断定できないが、城館跡の付属施設のひとつとして中世末期としておきたい。

2. その他の遺構と遺物

その他の遺構として、昇降口棟調査区内南東寄りと、音楽棟調査区東寄りの傾斜地には、幅2～2.5m前後でわずかに凹むきわめて浅い溝状の部分があり、前者は底部はやや堅く、後者は内部に不規則な凹みがみられる。遺物の出土もなく、この時代の遺構であるか判断できなかったが、一応この節で報告しておきたい。また、音楽棟調査区内には長楕円形の第13号土坑があり、壁高約10cmで内部には木炭が充満していたが、時代決定できる遺物はなかった。



第21図 中世以降遺物実測図

なお、遺構外出土の中世以降の遺物として、内耳土器片15点があり、主として昇降口棟調査区内の東端に近いところから出土している。第21図-1はそれらの内の底部破片のひとつである。その他明治時代以降の灰釉、鉄釉、染付などの陶片8点が出土しているにすぎない。(赤羽)



第22図 第1号腰曲輪実測図

第V章 第3次調査区の遺構と遺物

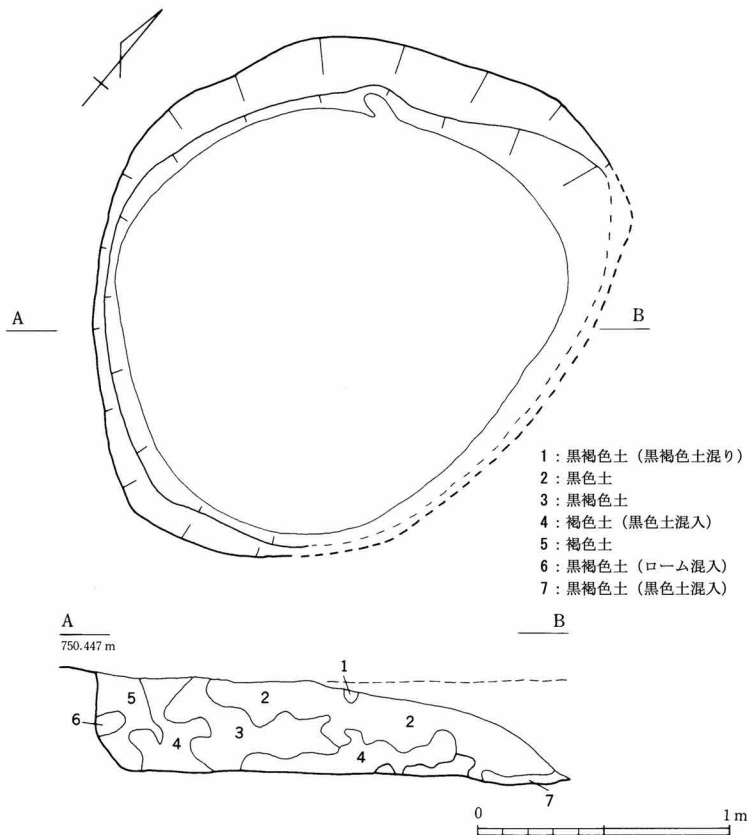
第1節 縄文時代の遺構と遺物

1. 第6号小竪穴

第3次調査で唯一検出されたこの小竪穴は、調査区の南西部、X・Y-31・32地点に位置している。東の一部分は削平されており、壁面は確認することはできなかったが、長軸約2.7m、短軸は推定で約3.1mの南北にやや長い隋円形と思われる。現存している壁の高さは約40cmであり、途中で1段斜きが変化している部分がある。覆土は総体的に黒褐色系の土であり、南東方向より土砂が流入しているようである。覆土の上層にいくにしたがって黒色味が増している。

床面は比較的平らになっており、しっかりとしまった面である。壁際には周溝と思われるもの等が確認されず、また周辺にもこの小竪穴に関連すると思われるピットも確認されなかった。

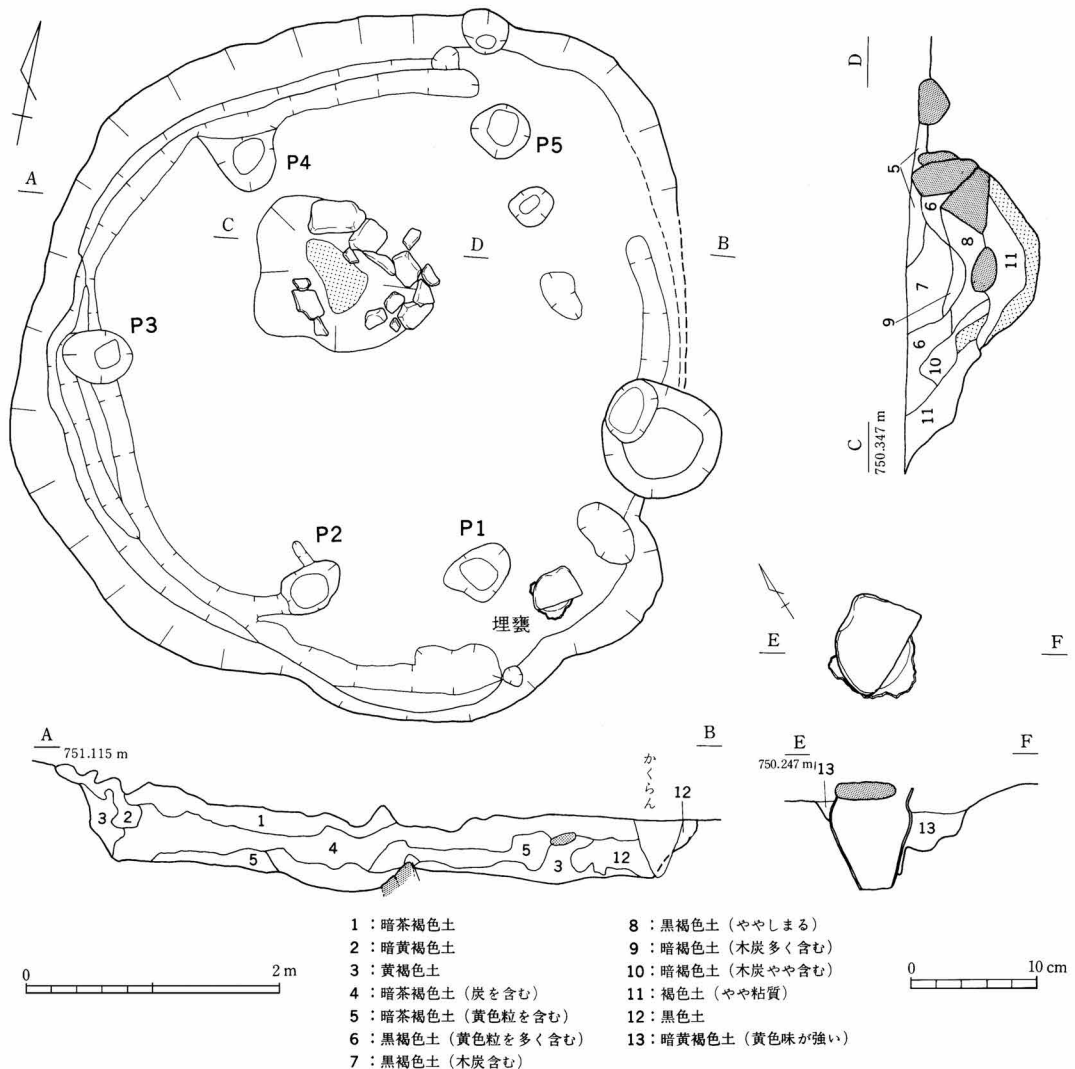
遺物 この小竪穴内から遺物の出土は認められなかった。



第23図 第6号小竪穴実測図

2. 第4号住居址

本住居址は調査区の北端、U・V-42 付近を中心として確認された。プランは東西約3m、南北約3mの円形住居址である。P1～P5の5本が主柱穴であり、壁直下にはほぼ1周するように周溝が巡らされているが、北東の一部と、出入口と考えられる南東部分には周溝はみられなかった。また西側においては2重の周溝となっており、北側においては重なるように掘り込まれている。出入口と考えられる部分には長径で約27cmの偏平な石を蓋石として用いている埋甕が埋設されていた。この埋甕は深鉢よりやや大きめの穴を掘った後に底部と、口縁部の上端を欠いたものを埋めている。埋甕内には褐色土が口縁部まで入り込んでいた。炉は住居址の北西より設置されていたが、炉の北東部に石が残されているのみで他は抜き取られていたり、炉内に流れ



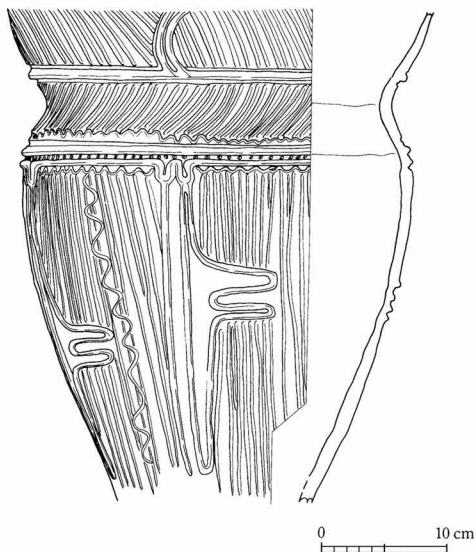
第24図 第4号住居址実測図

込んだ状態であった。炉内の覆土は全体的に黒色を呈しており、底に向かっていくにしたがって木炭片や焼土の混入量がふえていき、底部分には焼土が一面に厚く推積していた。床面は平らであったが、貼り床は認められなかった。しかし全体的にはしまった床面であった。

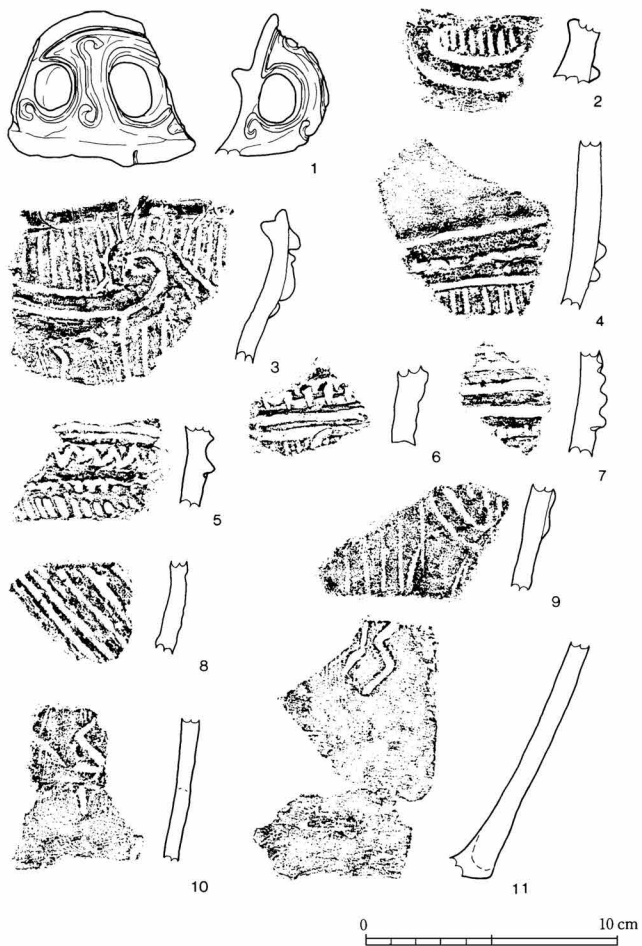
遺物 覆土中より出土した遺物は縄文時代早期末葉から縄文時代中期後葉に至るまでの広い時期に渡っているがいずれも破片である。

第25図は埋甕として埋設されていた深鉢である。口縁部上端部と底部は欠損しているが、他はほぼ完全に残っている。口縁部に斜位の沈線を施し、その下部、頸部は口縁部とは逆方向の斜位の沈線文を施文し、その境界部分には横位の隆帯を貼り付けている。体部上部には横位の2条の隆帯を貼り付け、その間に連続刺突文を充填している。この隆帯の上下には沈線によって波状文が施されている。体部は縦位の沈線文を施し、その後波状沈線と隆帯を施文している。この土器は曾利式の前半期と考えられる。

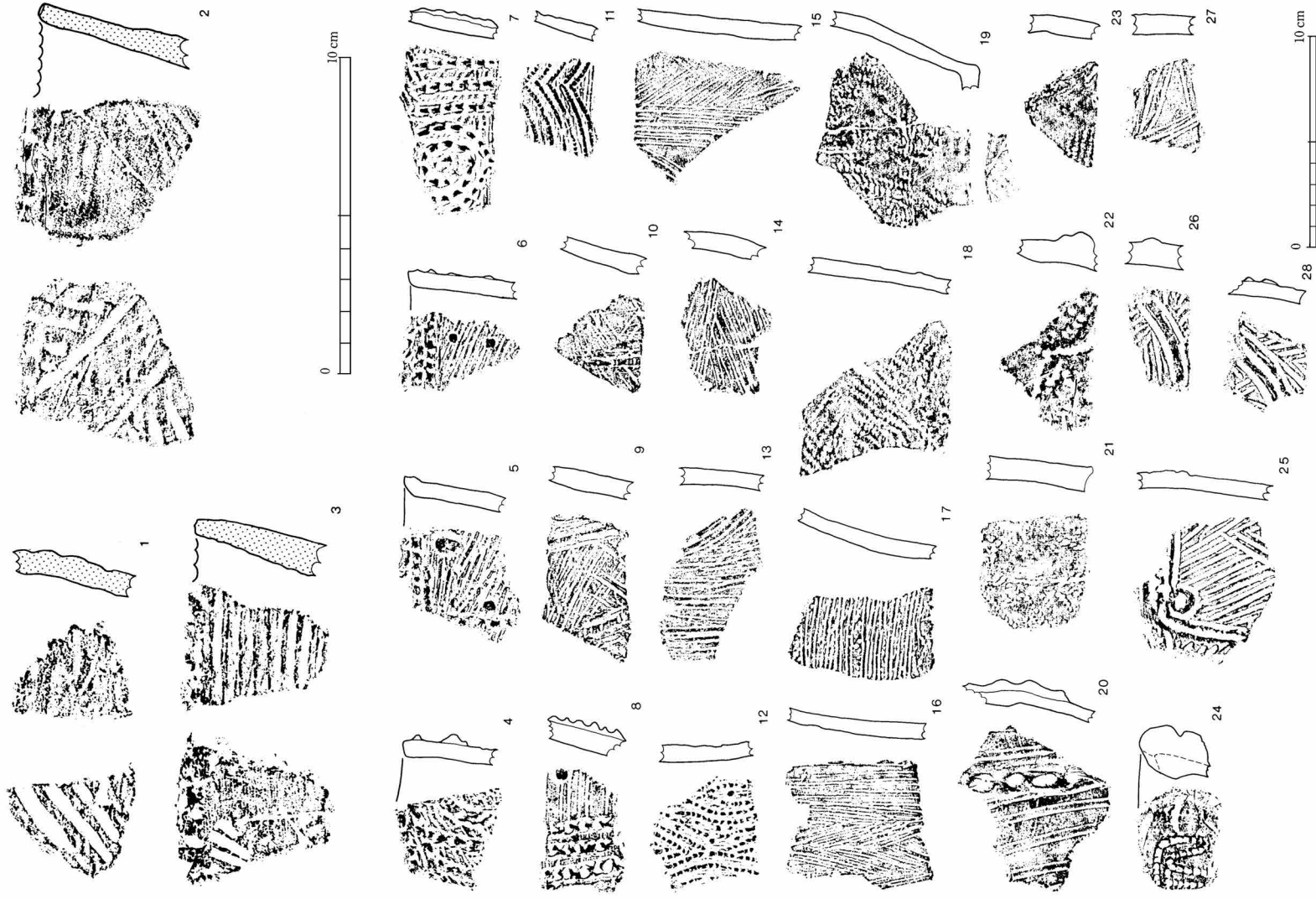
第26図は縄文時代中期後半のものである。1は口縁部の把手部分である。把手の周辺に沈線を巡らせ、把手上にもS字状の沈線文を施している。2は口縁部である。隆帯による隋凹区画の中に縦位の沈線を施してあり、加曾利E式系と思われる。胎土はやや粗く、焼きも良好とはいえない。3・5～8は唐草文系の土器である。3は口縁部の破片で隆帯により渦巻状に施文し、その後に縦位の沈線文・波状文を施している。5～7は口縁部下半であり、5は2本の横位隆帯の間に波状沈線を充填し、隆帯下部には刺突文を施している。6・7は横位隆帯を付し、上部に刺突文を施文している。8は体部の上



第25図 第4号住居址出土埋甕実測図



第26図 第4号住居址出土土器拓影図(1)



第27图 第4号居址出土器拓影图(2)

部の破片である。斜位の沈線を一面に施している。4・9～11は曾利式土器である。4は口縁部下半で2条の隆帯の間には交互刺突文が充填される。9は体部で、縦方向の沈線を施文したのち、隆帯を貼り付けている。10・11は同一個体である。共に体部下部であり、縦位沈線文の施文後に縦位の波状沈線文を施している。

第27図の2・3は共に口縁部破片であり、口唇部には竹管状工具を用いて押圧して施文した細かい波状口縁を呈している。2の外面は竹管文による襷状のモチーフを施文した中の交差する部分である。内面には横位・斜位の貝殻条痕文が残されている。3は外面に斜位の竹管文を施し、内面は横位に貝殻条痕文が施されている。1は体部の破片である。外面は斜位の竹管文、内面は横位に条痕文が残されている。1～3は鶴ヶ島台式である。4～17は縄文時代前期末葉の土器である。4～6は波状口縁をなす口縁部である。4は粘土紐を渦巻状に貼り、その上から半裁竹管状工具で押し引いた結節浮線文を羽状の沈線文を地文とした上に施している。また、口縁上端部に沿って1条の結節浮線文が施文されている。5・6は羽状の沈線文を地文とし、口縁上端部に沿って2条の結節浮線文を施している。口縁下部にはボタン状貼付文が貼付されている。7・8は口縁部下部の破片である。共に結節浮線文を施している。9・10は半裁竹管状工具により沈線を施したのち、粘土紐を貼り付け、ヘラ状工具で切って刻みをつけたもので、口縁部下部の破片である。11・12は沈線を地文とし、外面全体に結節浮線文が施されている。半裁竹管状工具も4～8のものよりやや小さいものを使用している。13～17は沈線を主文として構成された土器である。14は羽状に沈線を施した口縁部下半の破片である。15・16は体部の破片であり、縦位の沈線文を区画文とし、その間に縦位の羽状沈線文を施している。17は頸部であり、横位の沈線文を施している。18・19は縄文を施文した土器である。18は体部上半部と考えられ、羽状縄文が施されている。19は底部付近で、縦位に近い縄文が施されている。底面には木葉痕が残されている。20～28は縄文時代中期初頭から中葉の土器である。20はいわゆる平出遺跡出土の第Ⅲ類Aに相当する土器である。半裁竹管状工具により縦位に沈線を施した後、縦位方向に隆帯を指頭圧痕により施文した押圧隆帯が貼付されている。21は梨久保式の体部の土器である。22～24は猪沢式土器であり、22は口縁部下部で横位の隆帯の上部に角押文を2条施文している。23は横位に四条の角押文を施している。24は口縁部の破片で、隆帯をはさんで三角押文が施されている。三角押文の横には縦位の隆帯を貼り付け、刻みを入れている。25～28は縄文時代中期後葉の土器である。25は横L字状の隆帯を施し、横位の部分は交互刺突文を行ない、この隆帯を区画文とし、斜位の沈線を密に施文している。27は斜位の沈線文を施文している。

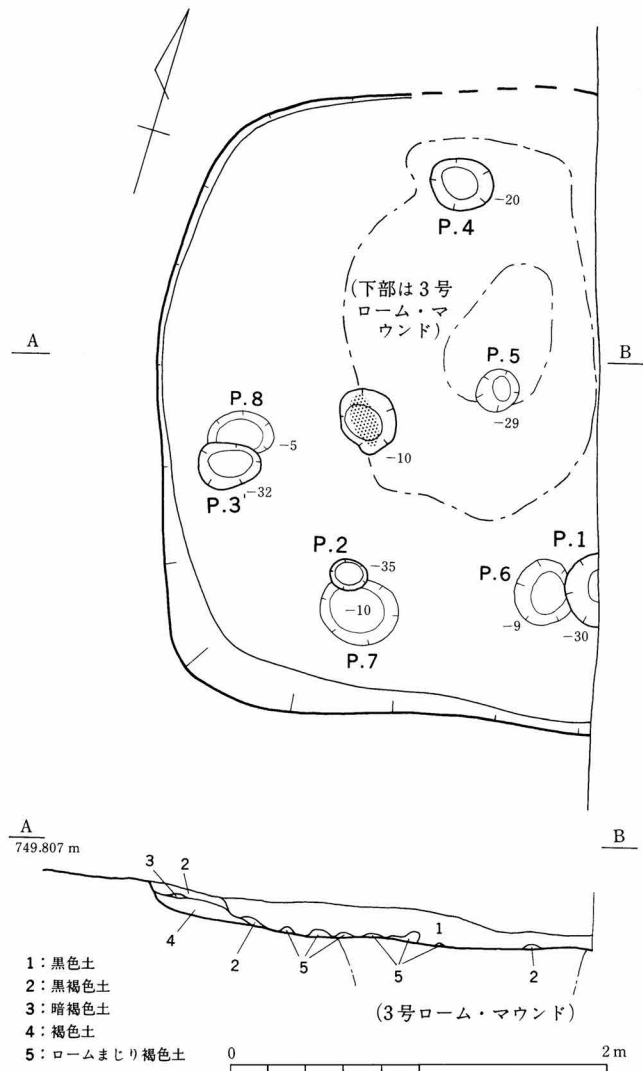
3. 第5号住居址

本住居址は調査区の東壁に接して検出された。調査区外の東半部分はカルバート埋設に伴う掘削により破壊されている。現存している壁も高さ約10 cm とわずかに残っているのみである。覆土も全体的に黒色土が多く、一時期に埋没した可能性がある。柱穴はP1~P4の4本で、住居址全体としては5本柱の構造と考えられる。またP6~P8は柱穴と重なっており、一度建て直されている。周溝は全く確認されなかった。また住居址中央やや西寄りの部分には地床炉が設けられており、炉の底部には焼土が一面に広がっていた。

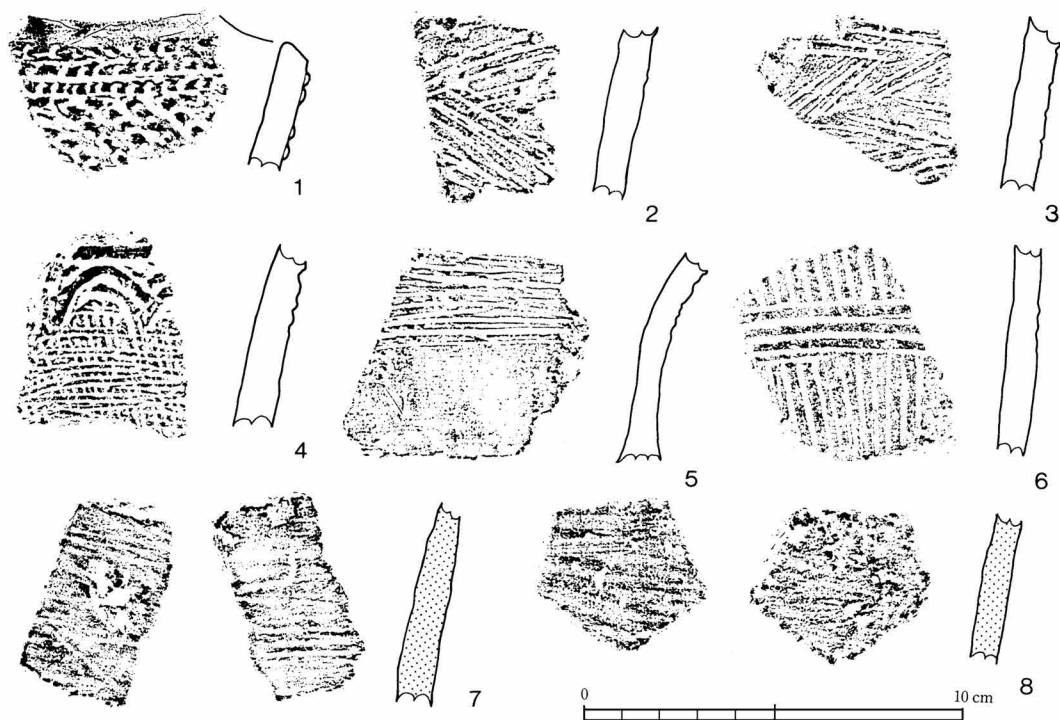
この住居址は第3号ローム・マウンドを掘り込んで作られており、ロームマウンドを掘り込んだ部分には貼り床がされ、非常に固くしまっていた。しかしそれ以外の部分については比較的しまっていたが、あまり良好な状態とはいえないなかった。

なおこの住居址の床面付近よりの遺物出土がほとんどなかったがおそらく縄文時代前期末葉であると考えられる。

遺物 第29図の1~3は縄文時代前期末葉の諸磯C式土器である。1は波状口縁の破片で、波状口縁でも大きな波状を呈するものである。口縁端部に沿って2条の結節浮線文があり、その下部には渦巻状の結節浮線文を施している。地文には斜位の平行沈線が施されている。2・3は口縁部から体部上部の破片である。いずれも羽状沈線文を半裁竹管状工具で施文している。2は3よりも羽状の角度が大きくなっている。4~6は縄文時代中期初頭、梨久保式に相当するものであり、4は口縁部であり、上



第28図 第5号住居址実測図



第 29 図 第 5 号住居址出土土器拓影図

部は横位に半裁竹管状工具により隆帯を施文し、その下部に沈線で細かく格子目状に施文している。その後半隆起線文を 2 本平行して山形に連続して施文している。5 は体部上部であり、破片上部には横位の沈線を数条施している。下半部は無文である。6 は体部の破片であり、沈線文系の土器群に相当する。文様はまず縦位の沈線を密に施文したのち、3~4 条横位の沈線を施文している。7・8 は縄文時代早期末葉の土器である。両者共に横位の条痕文を施したものである。7 は外面は斜位に条痕文を施した後で、横位に密に施してある。内面は横位の条痕文である。8 は外面は上部に横位の条痕文を施文し、下部には斜位の条痕文が施されている。内面は横位の条痕文が施されている。

4. 第 3 号 集 石

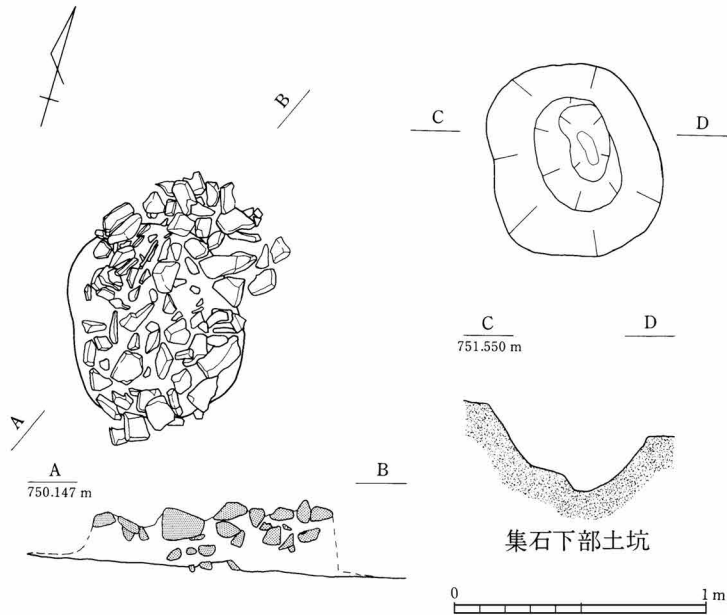
調査区の西側、X・Y-37 で検出され、東西 0.7 m、南北 1.1 m の階円に広がる集石である。使われている石は直径約 10 cm のものから 20 cm のものが多い。石は下に何重にも重なっている様子はなく、表面に一面に広がっているのみである。

この集石の直下には、集石に伴なうと考えられる土坑が検出されている。この土坑は現存しているプランで南北約 87 cm、東西約 73 cm の南北にやや長い階円形である。集石の広がる階円とはややずれて掘り込まれているようである。また覆土は褐色系の土であり、掘り上がった断面は

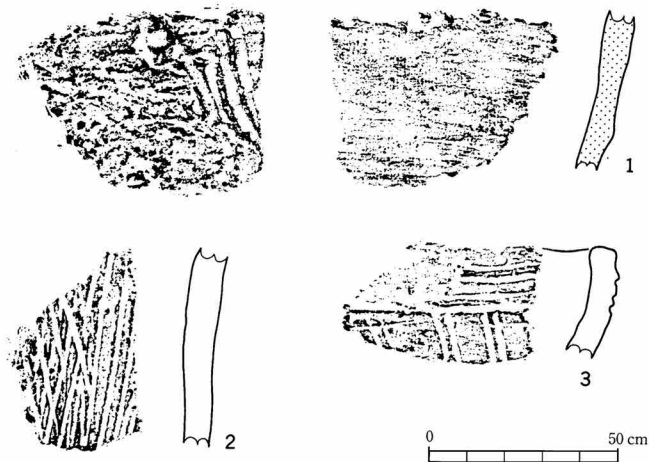
播鉢状を呈している。

遺物 この集石に伴なうと考えられる遺物ははっきりとした形で出土してはいないが、集石の検出作業中に第31図の1~3のような土器が出土したのでここに掲載しておく。

1は鵜ヶ島台式に相当するものであり、外面は斜位の細い沈線で区画状文を施文し、その区画内に太い沈線を充填している。屈曲した部分には横位のナデ調整の痕跡が残されている。内面には横位の貝殻条痕文を施した痕跡を留めている。3は縄文時代中期の土器の口縁部である。口唇部は平面に仕上げ、やや内弯しながら立ち上がっており、外面は口縁上部に数条の半裁竹管状工



第30図 第3号集石実測図



第31図 第3号集石出土土器拓影図

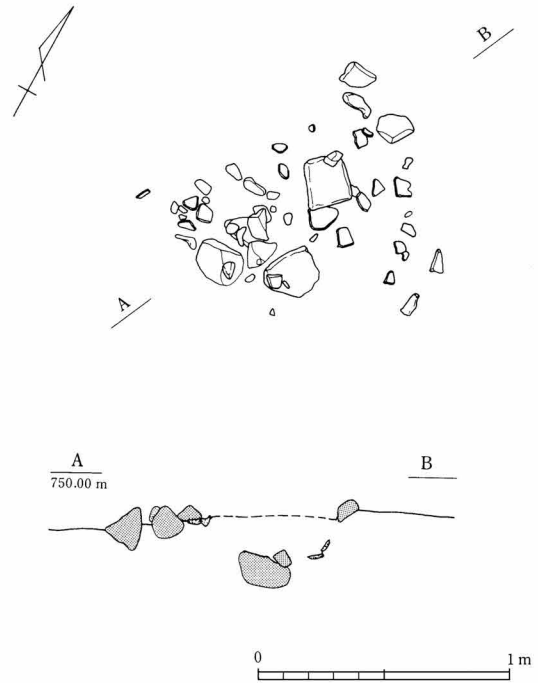
具による平行沈線を施し、その下部は縦位の平行沈線文が間隔をおいて施文をされている。2は縄文時代前期末葉の土器である。縦位の沈線文に区画された内側には斜位の沈線文が施文されている。

このように出土遺物が多種のために、集石の時期を決定することができない。

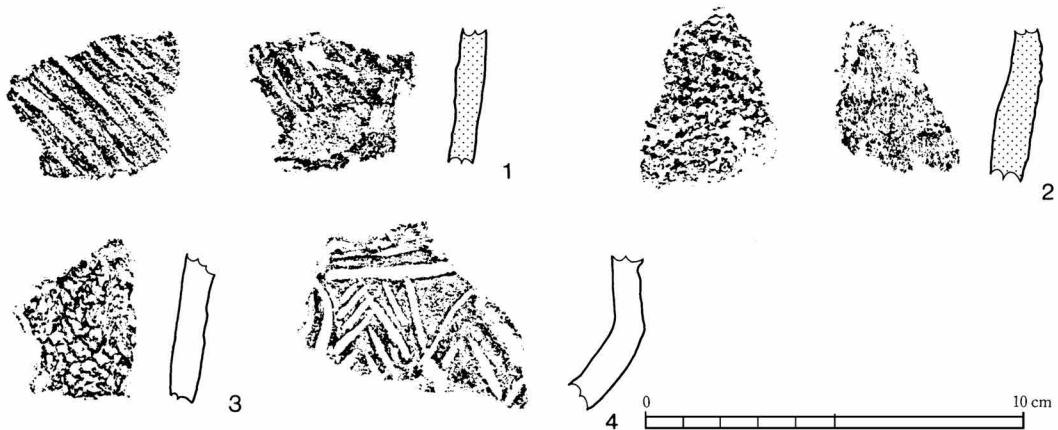
5. 第 4 号 集 石

この集石はU-36グリットより検出されている。石は直径約20 cmのものが数個と、10 cm程度のものが集まって形成されている。この集石の下には土坑は検出されなかった。

遺物 集石に伴うと思われるものを明確にはし得ないが4点出土している。1~2は縄文時代早期の土器である。1は外面に斜位の条痕文を施文し、内面は斜位の条痕文の痕跡を残している。2は外面に縄文を施文し、内面はナデ調整を行なっているものである。3は、斜位の縄文を施文しているものである。4は縄文時代中期であり、上面には横位の沈線文を施し、その下は縦位の羽状沈線文を施文している。



第 32 図 第 4 号集石実測図

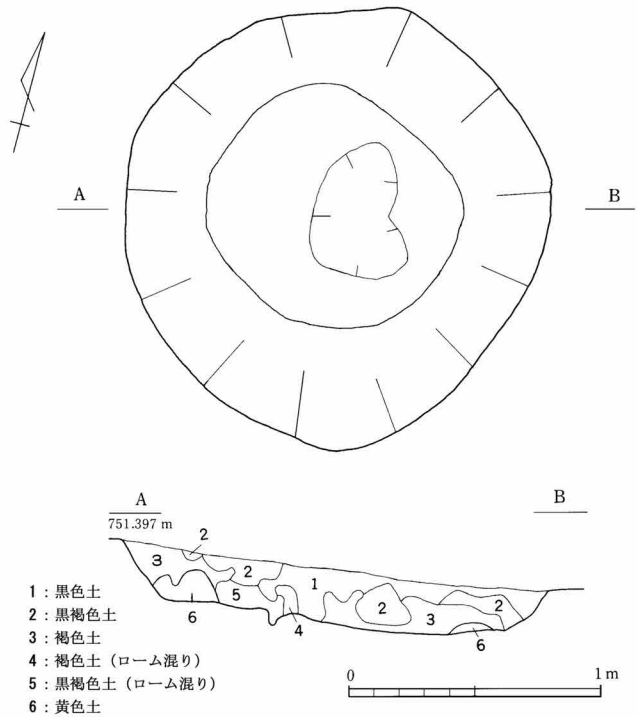


第 33 図 第 4 号集石出土土器拓影図

6. 第 14 号 土 坑

この土坑は X-41、42 地点より検出された土坑であり、上部は削られてしまい、残されている深さは約 30 cm 程度である。プランは東西約 1.7 m、南北約 1.8 m の円形である。土坑底部の中央部付近には更に 1 段低く掘られている部分がある。底部は水平ではなく、付近の地形の斜面にあわせるように同じ程度の斜きをもって作られており、底部のしまり具合をみてもあまりしっかりとしまっているのではなく、覆土と比較してややしまっていると感じる程度である。

遺物 遺物は何も出土しなかった。



第 34 図 第 14 号土坑実測図

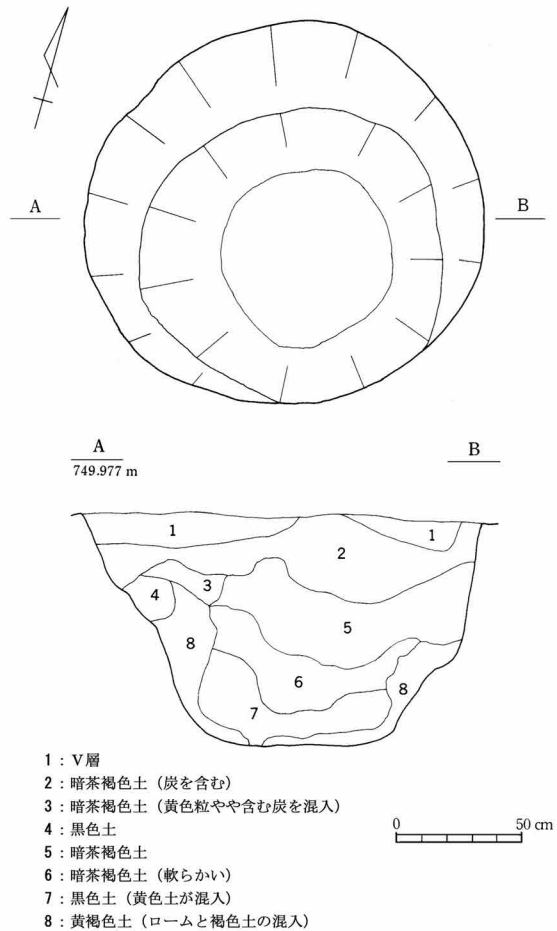
7. 第 15 号 土 坑

この土坑は第 4 号住居址の東側、S-43 地点より検出された東西約 1.6 m、南北約 1.5 m の円形を呈している。覆土は全体的に黒色を帯びた土で占められていた。遺存状態も比較的良く、土坑の深さは約 90 cm であった。土坑の壁の中段には 1 段の段を設けている。この土坑は出土遺物より縄文時代前期末葉に比定される。

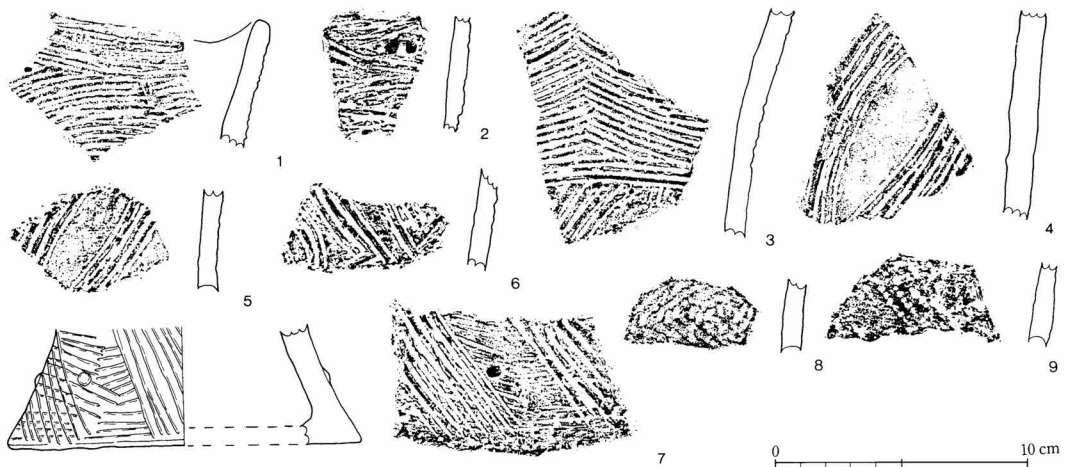
遺物 第 14 号土坑からは縄文時代前期末葉の土器が出土している。(第 36 図)

1 は口縁部であり、大きな波状を呈している。口唇部は丸く作り、口縁部の上端部には口縁に沿って数条の沈線を施している。更にその下部では全面に横位の半裁竹管状工具による平行沈線文が施され、波頂部付近では横位のレンズ状文を施している。このレンズ状文は下部の施文後に上部の沈線を施文して作り出している。2 は口縁部の破片である、上端部は欠損しており、口縁部の形体は不明である。破片の上部には横位に 2 個 1 組のボタン状貼付文が貼付されている。これは横位の半裁竹管状工具による沈線文を全面に施文した後に貼り付けたものである。3 も口縁部下半部の破片である。1 と同様に大きな波状口縁を呈するものであり、波頂部との間と思われる。中心付近は波頂部付近に施文されたレンズ状文の境界部分である。体部の境には横位の平行沈線文を施している。体部には斜位のレンズ状文を施文している。施文は体部のレンズ状文を施した後に横位の平行沈線を施文しており、これが一番最後に施文されている。4 は体部で斜位に

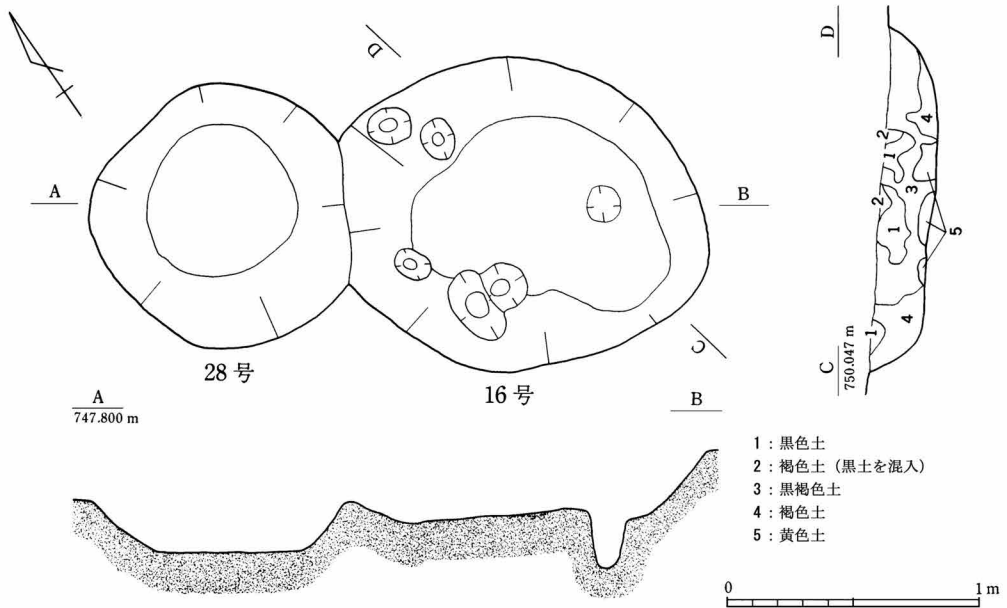
施文されたレンズ状文である。5も同じく斜位のレンズ状文を施文している。6は体部である。平行沈線によりX字状に施文しているものである。7は底部である。底からやや内傾して立ちあがり、体部中部にくびれがあるものと考えられる。文様は半裁竹管状工具により横位に施文した後に斜位の平行沈線文を一部施文をしない空間部分を意識的に作り、文様を比較的密に施している。またその施文をしない部分には2個1組のボタン状貼付文を貼り付けている。以上の土器は内面にはミガキを加えてあった。8・9は体部の破片であり、外面に縄文を施してあるものである。8はあまり明瞭ではないが、破片の中心部分が縄の中心となった横位の羽状縄文を施している。9は斜位にRLの縄文を施した土器である。



第35図 第15号土坑実測図



第36図 第15号土坑出土土器拓影図



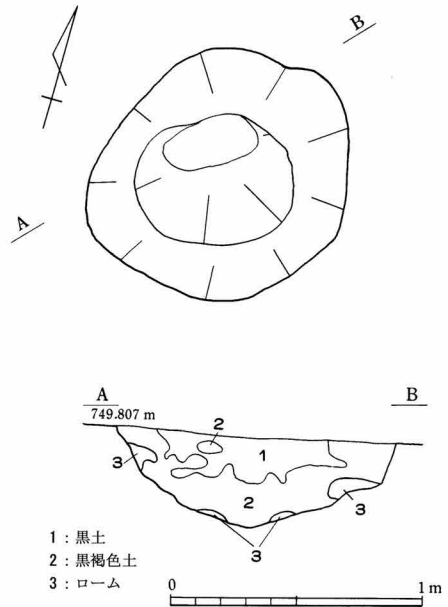
第 37 図 第 16・28 号土坑実測図

9. 第 16・28 号土坑

R・S-42 地点で検出された遺構である。第 16 号土坑の北西側には第 28 号土坑が接して検出されている。第 16 号土坑は東西約 1.3 m、南北約 1.4 m の隋円形であり、6 個のピットが土坑内に確認されている。覆土は褐色系のものが中心である。第 28 号土坑は東西約 1 m、南北約 1 m の円形のプランである。

両者の底部のレベルを比較してみると、第 28 号土坑のほうが、約 12 cm ほど深く掘り込んでいる。前後関係は不明である。

遺物 両土坑ともに遺物の出土はなかった。



第 38 図 第 17 号土坑実測図

10. 第 17 号土坑

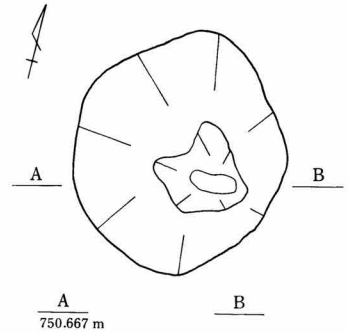
この土坑は S-40 地点で検出されている。プランは東西約 1.1 m、南北約 1 m の不整形円形を呈している。覆土はあまり明瞭に区分することができなかったが、全体的に黒色系の土であり、上

に黒色土、その下層に褐色味のかかった土が堆積している。断面は擗り鉢状を呈している。
遺物 遺物の出土はなかった。

10. 第 19 号 土 坑

東西約0.8m、南北約0.8mの円形プランをもつV-39地点より検出された土坑である。この土坑は東側寄りが深く掘られている。深く掘られた部分の底部の直径は約18cmである。掘り込まれた土坑内で深い部分と浅い部分とでは約30cmの差がある。

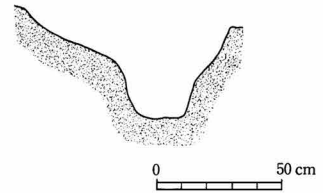
遺物 この土坑からも遺物は出土しなかった。



11. 第 20 号 土 坑

東西約0.8m・南北約0.8mの円形プランをもつV-39地点より検出された土坑である。深さは現存高で約30cmを測る。この土坑も第19号土坑と同様に西寄りが深く掘り込まれ、断面でも非常に似た土坑となっている。

遺物 遺物の出土はなかった。

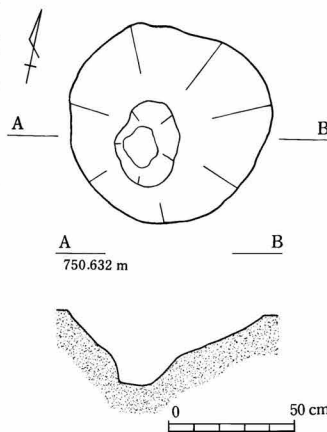


第 39 図 第 19 号土坑実測図

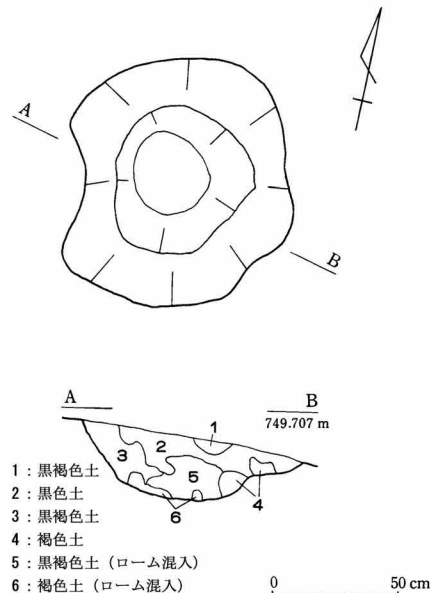
12. 第 21 号 土 坑

S-38地点で検出されている東西約0.9m・南北1mの不整形円形プランである。覆土は黒色系のものを中心に堆積している。断面では擗鉢状の形を呈している。

遺物 第42図は第21号土坑より出土したものである。

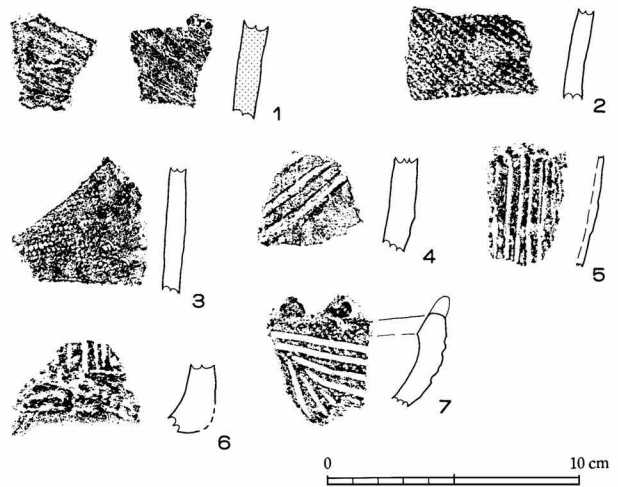


第 40 図 第 20 号土坑実測図



第 41 図 第 21 号土坑実測図

1は縄文時代早期末葉の土器である。外面には斜位の条痕文が施されている。内面は斜位の条痕文の痕跡を残している。2は外面に縄文を施した土器である。3も2と同様に縄文を施した土器である。4は体部で、半隆起線文が斜位に施文されている。5は体部であり、内面は剥落して薄くなっている。外面は縦位の半隆起線文を密に施文している。6は底部であり、外面の底の一部が欠損している。文様は縦位の沈線を密に施している。7は口縁部である。口縁上部には2個の突起が貼り付けられており、その下部の外面は沈線文が施されている。口縁に沿って2条横位に施文し、その下部は横位と斜位の沈線を組み合わせて施文している。この土坑は出土遺物より縄文時代中期のものと考えられる。



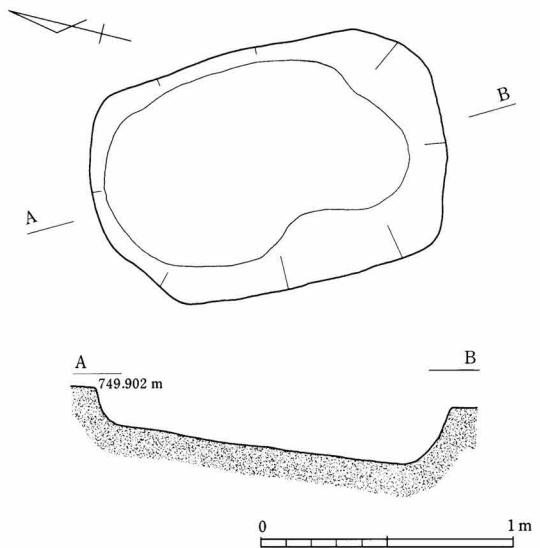
第42図 第21号土坑出土土器拓影図

13. 第22号土坑

調査区の東側部分、T-37地点より検出された土坑である。長軸は南北で約1.5m、短軸は東西で約1mの隋円形プランである。断面は皿状を呈し、現存している深さは最も深い部分で約23cmである。

この土坑は第16・28号土坑と同じく表面の傾斜と平行するように底部も南に向かって低くなっている。

遺物 本土坑より遺物は何も出土しなかった。

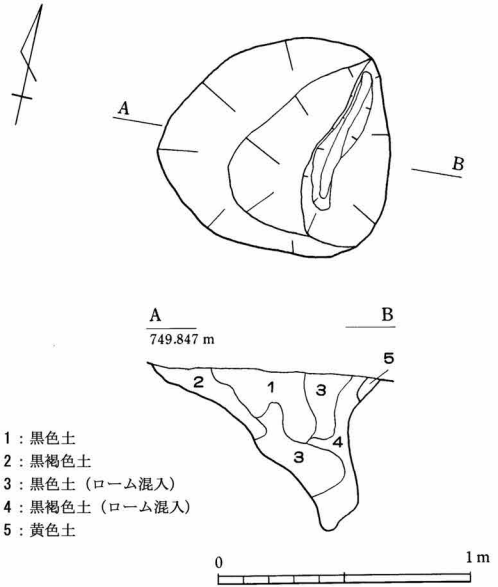


第43図 第22号土坑実測図

14. 第 23 号 土 坑

第 22 号土坑の南側、T-37 地点より検出東
西約 1m、南北約 1m の不整形のプランをも
つ土坑である。覆土は主として褐色系の土が堆
積しており、堆積の状態から西側より土砂の流
入のあった事が伺える。断面図が示すようにこ
の土坑は底部が非常に細長いものであり、底部
までの間に 2 段ほどの段を有する非常に複雑な
形をしている。

遺物 この土坑からも遺物は出土しなかった。



第 44 図 第 23 号土坑実測図

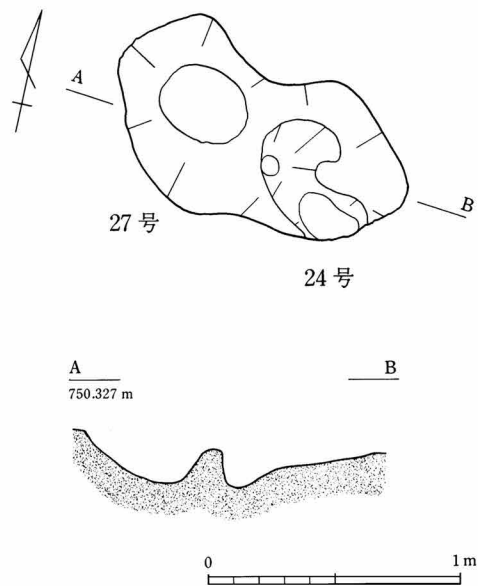
15. 第 24・27 号土坑

調査区の中央付近、V-37 に検出された重複
して掘られている土坑である。第 24 号土坑は
南側の壁際に最も深い部分をもつ不整形な土坑
である。底面との間にはもう 1 段の段を有して
いるが、この段の稜線も不整形である。

第 27 号土坑は南北に長い隅丸方形を呈する
もので、東西約 80 cm、南北約 60 cm のプラン
である。底部は南北にやや長い隋円形を呈して
いる。断面図に示されるように両者の底部のレ
ベルはそれほど差はない。

両土坑の前後関係は明確に確認することが、
できなかった。

遺物 両土坑共に遺物は出土しなかった。



第 45 図 第 24・27 号土坑実測図

16. 第 25・32 号土坑

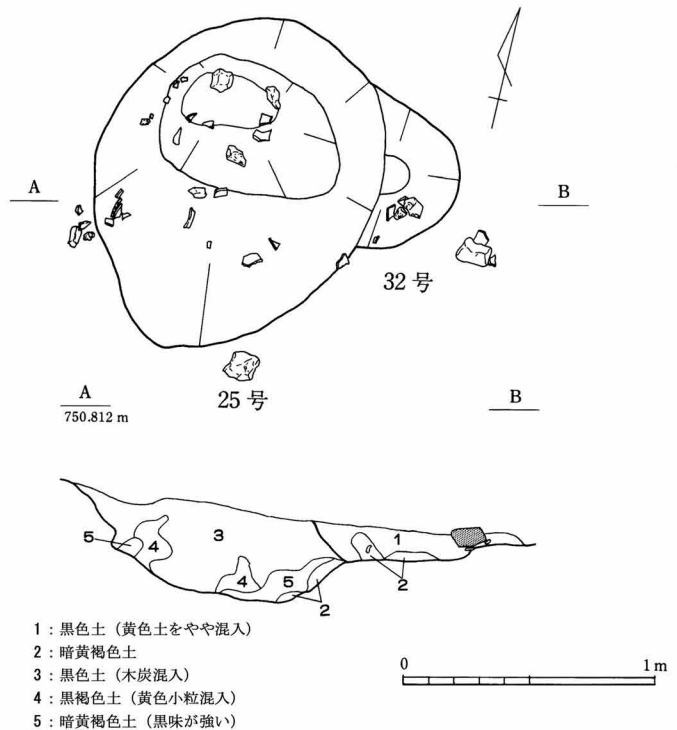
この土坑は V・W-38 地点にロームマウンド
を一部掘り込んで作られている。

この土坑は第 25 号土坑と第 32 号土坑が重複して作られている。第 25 号土坑は東西約 1.2 m、
南北約 1.5 m の隋円形のプランである。覆土は黒色系の土が主に堆積している。遺物は 3 層の下
部を中心にして出土している。

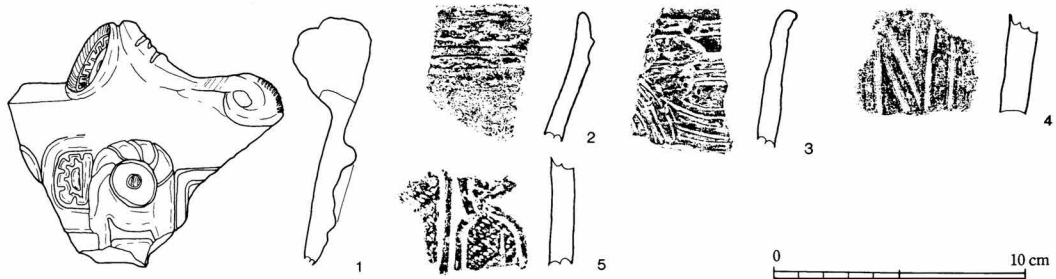
第32号土坑は、第25号土坑を掘り込んで作られていることから第25号土坑より新しいことがわかる。レベルは第25号土坑よりも約18cm浅く、プランも直径約60cmの円形である。

遺物 第25号土坑より出土した土器は縄文時代中期初頭のものである。

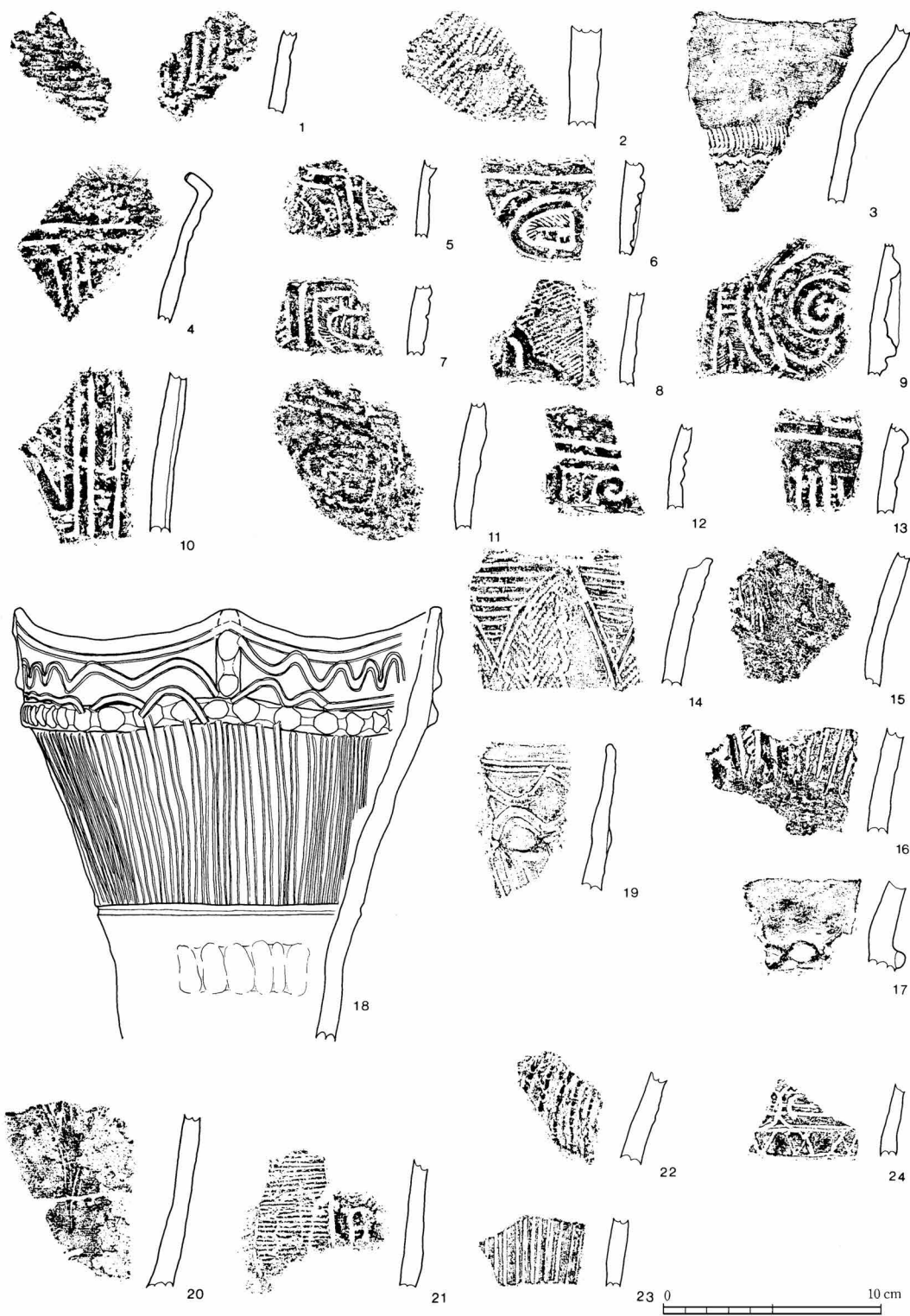
第48図の1は外面に横位の条痕文を施し、内面には斜位の羽状文を施文している。2はLRの縄文が施文された土器で、体部の破片と考えられる。3は口縁付近のものであり、口縁部下部には横位の連続爪形文がつけられ、その下には沈線で波状文を施文している。4~12は同一個体と思われる。4は口縁部破片で、口縁は内側にくの字に屈曲している。外面は摩耗が著しいが隆帯で区画文を施している。内面には多量の炭化物が付着していた。5は区画文の中に半隆起線を充填し、その上に刻みを施している。6・7・11は上部に横位の隆帯を施し、その下部に隋円形の区画をし、区画文に沿って半隆起線文を充填して斜位の沈線を施している。8は下部に区画文が施され、区画外の部分は斜位の沈線を施している。9は渦巻文を施し、その隆帯上に斜位の沈線を施文している。10は体部下半部の土器であり、縦位の隆帯を中心に施し、中心と思われる隆帯には矢羽根状の沈線が施文されている。12は口縁部付近のもので、横位の隆帯を二条施文し、その下部に渦巻文を施している。14は頸部であり、Y字状文を境として上部は横位の沈線文、下部は縦位の波状文と、羽状縄文を施文している。15・16は体部下下部で共に縦位の沈線



第46図 第25・32号土坑実測図



第47図 第32号土坑出土土器拓影图(1)



第 48 图 第 25 号土坑出土土器拓影图 (2)

文が施されている。17は口縁部であり、下部は横位の押圧隆帯が施文されている。18・19は同一個体である。口縁は4単位と考えられる波状を呈し、屈曲部の横位押圧隆帯との間には半隆起線による波状文が充填される。体部は下部の横位沈線まで半裁竹管状工具による平行沈線文が施されている。体部下半の外面には指頭圧痕の調整が残されている。20は体部の土器であり、Y字状文を沈線で施文している。21も体部で、縦位の沈線文で区画された内側を横位の沈線で充填している。22は渦巻状に結節浮線文を施している。23は縦位の沈線文を施文している。24は沈線により横長の隋円文を施し、その下の隆帯には山形文を沈線で施文している。

第47図は第32号土坑より出土した土器である。1は口縁部であり、口縁には突起が貼り付けられている。突起の側面には沈線により円を中心とした文様を施文している。外面は円形の隆帯を貼り付けそこから下部に隆帯を垂下させている。2は口縁部であり、やや内彎ぎみに立ち上がっている。文様は口縁に沿って数条の沈線が施文されている。3も口縁部であり、口唇部は平面に作られている。文様は横位と斜位の平行沈線文である。口縁部上部は口縁に沿って沈線を施文している。4は比較的厚い土器であり、外面には縦位・斜位の沈線文が浅く施文されている。5は縦位や曲線の沈線で区画文を作っている。この区画文の中には縄文が施文されている。施文行程は縄文を施した後に沈線文を施文している。

17. 第26号土坑

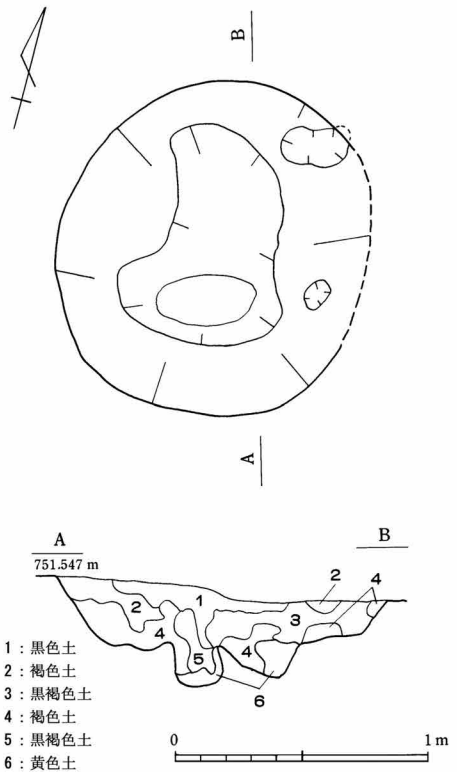
第6号小竪穴の北隣より検出されたもので、東側の1部は削平されてしまっているが、直径約1.5mの円形プランである。覆土は褐色系の土が多く堆積している。断面図が示すように土坑の底部はかなりの凹凸がある。

遺物 遺物は何も出土していない。

18. 第29号土坑

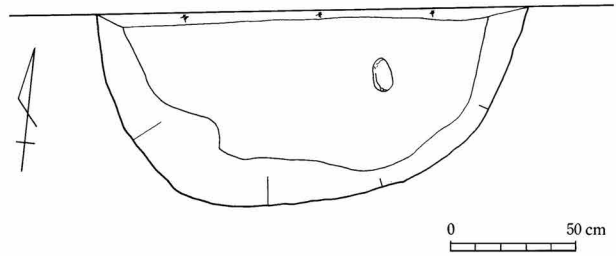
この土坑は調査区の北端、T-44より検出された南半分だけであるが、北半分は攪乱により破壊されている。この土坑は直径約2mの円形のプランであり、底部も平面な土坑である。現存している壁高は約25cmとあまり残りは良くない。

遺物 この土坑よりの出土はなかったが、付近より土偶の下半部が出土している。この土偶は腰部より上半が欠損しており、正面は非常に立体的であり、



第49図 第26号土坑実測図

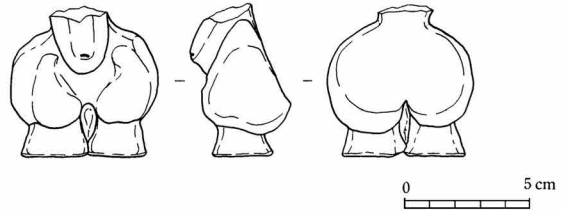
腹部、足の付け根などはふくらみをもたせて作られているのに対し、背面は偏平で、下部がややふくらみがあるのみで、比較的簡素である。



19. 第18・30号土坑

この土坑はS・T-38・39より検出されている。

第18号土坑は直径約1.2mの円形プランである。底部は比較的平らであるが、北表面の傾斜に合わせて南東側に少し傾いている。現存高は約30cmである。



第50図 第29号土坑実測図及び付近出土土偶実測図

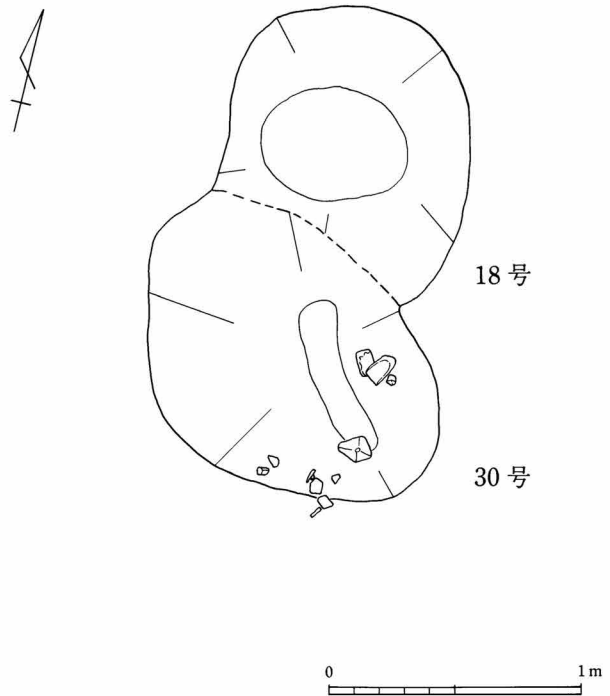
第30号土坑は東西約1.5m、南北約1mの隋円形の土坑であり、この土坑の上部には約10cm程度の石が含まれていた。量的にはそれほど多くはないものの、土坑のプランの中に納まっていた。石は1段のみで重なった状態ではなかった。

土坑の底部は細長い隋円形をしており、第18号土坑と同じく地表面の傾斜に合わせて底部は南東側に傾いている。

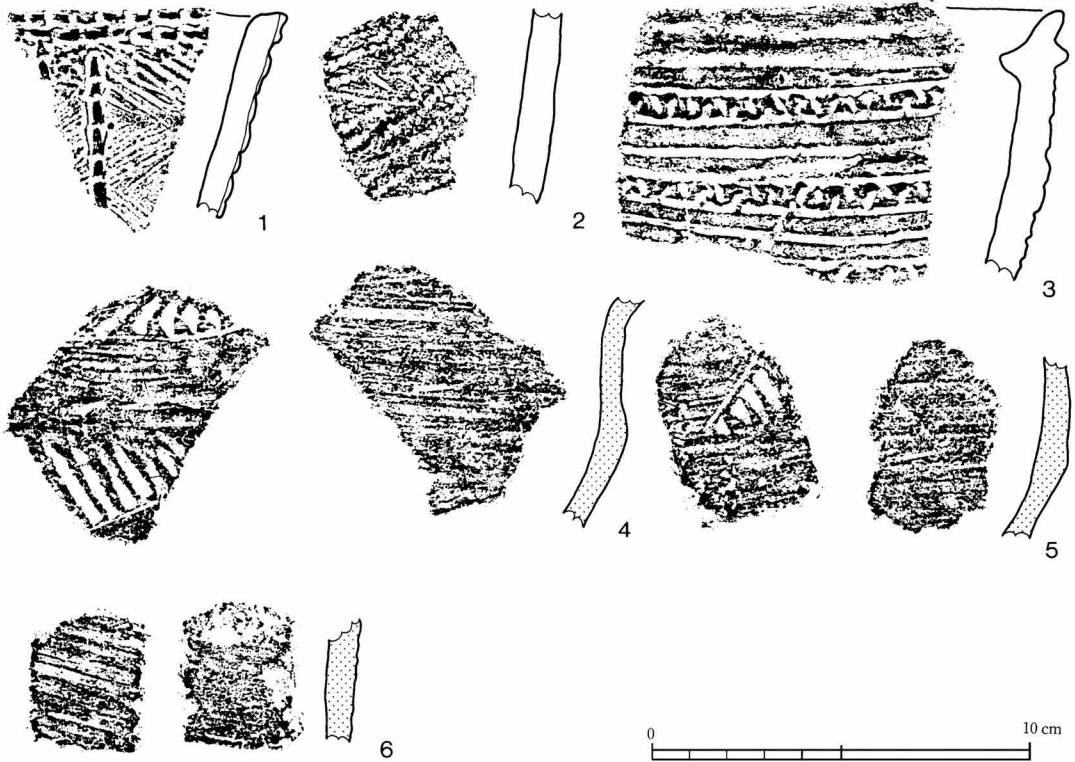
両者の掘り込んだ深さはあまり変わらず、どちらが深いとはいえない。またこの2つの土坑の前後関係は不明である。

遺物 第30号土坑より第52図・53図の土器が出土している。

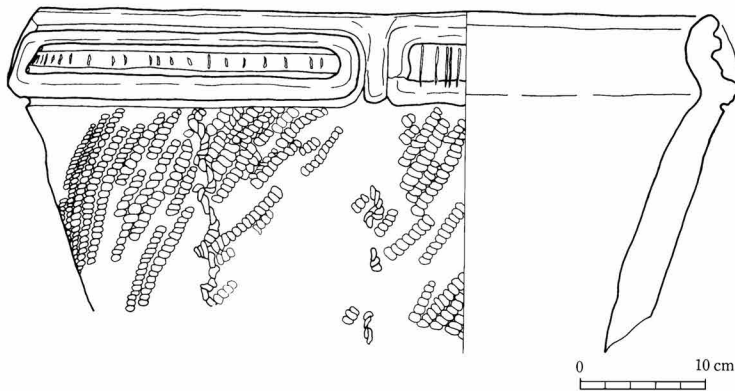
第52図の1は口縁部の破片である。口唇部を平面に仕上げ、口縁に沿って2条の結節浮線文が施されている。またその下部には数条の縦位の結節浮線文が施文されている地文には平行沈線による羽状沈線文が施文されている。2は体部で斜位の縄文が施文されている。3は口縁部であり、横位の沈線文を密に施文し、沈線3本を間



第51図 第18号・30号土坑実測図



第52図 第30号土坑出土土器拓影図



第53図 第30号土坑出土土器実測図

隔として波状沈線文を施文している。4~6は縄文時代早期末葉の土器である。4は横位の細い沈線による区画状文を施文した後に斜位に太い沈線を充填している。無文部分はいくびれの部分であり、横方向のナデ調整が施されている。内面は横位の貝殻条痕文が施文されている。5はやはりくびれの部分であるが、やはりくびれ部分の無文帯は横方向のナデが施され、区画文には細い沈線を用い、充填文には太い沈線を使用している。4・5は鶴ヶ島台式に相当するものである。6は条痕文系の土器であり、外面は横位の条痕文を施し、内面は横位の条痕文の痕跡を残している。

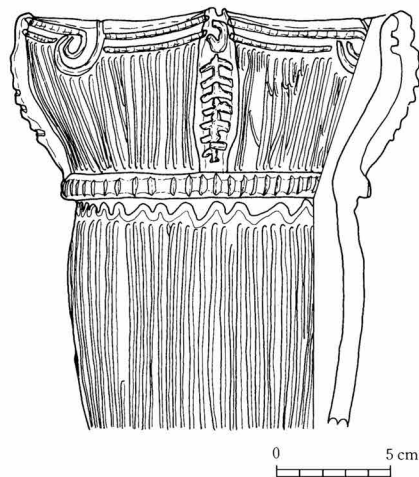
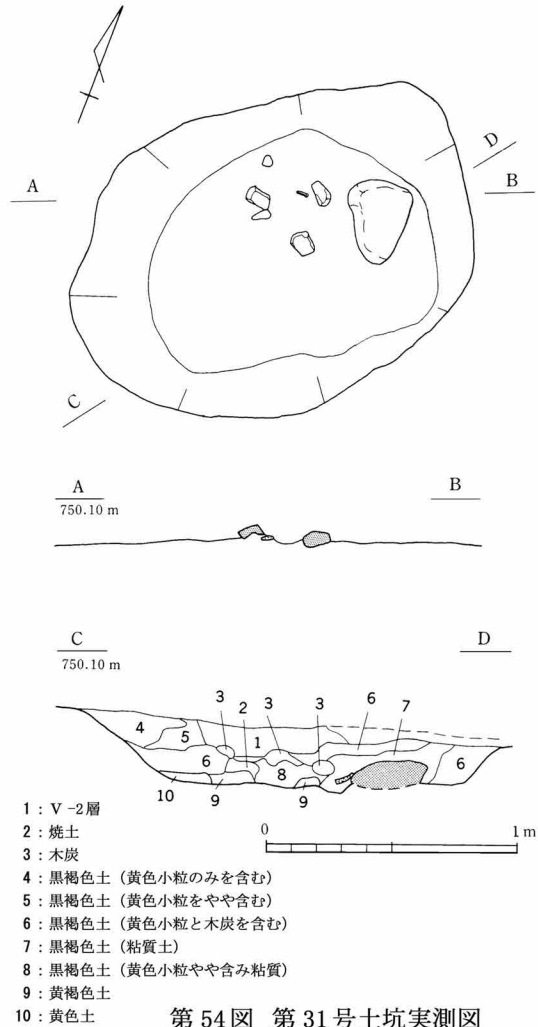
第53図は半完形の土器であり、上半部のみ残されていた。口縁部は内側に屈曲しており、隆帯によって階円状に区画され、区画内はへら状工具によって縦位の刻みが施されている。区画文との間には縦位に隆帯が貼り付けられている。体部は結節縄文を縦位に施文している。

20. 第31号土坑

調査区の東寄りであるT-38地点より検出されたのがこの第31号土坑である。

この土坑の直上には直径約20cmのものが数個と、約10cm程度のものが集まっている。石はまばらに散在している。また、この直下の層にも石は確認されていない。まばらに存在する石の中心付近からは後述する第55図のような土器が出土した。

遺物 第55図は第31号土坑より出土した土器である。口径は約16cmを計り、口縁は浅い波状口縁を呈しており、この口縁に沿って押し引き沈線文を施文し、波頂部との間にはやはり沈線で渦巻文を施している。波頂部からは口縁部に縦位の隆帯を貼り付け、その上に沈線で施文している。頸部には横位の隆帯が貼り付けられ、隆帯上にはへら状工具により刻みが加えられている。この隆帯の直下には沈線で波状文が施文されている。以上の他の部分は縦位の沈線文を密接に施文している。

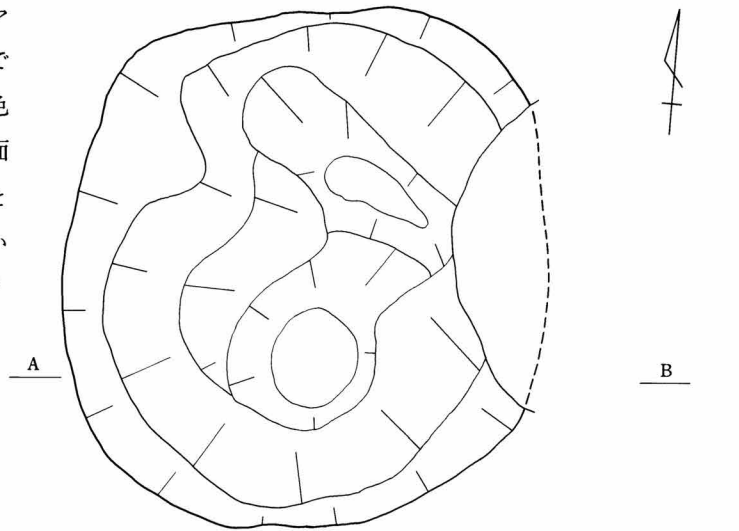


21. 第2号ロームマウンド

第2号ロームマウンドは第25号土坑の西側、WX-38地点より検出されている。プランは東西約2m、南北約2.1mのほぼ円形であり、第25号土坑に東側を一部掘り込まれている。マウンド部分は表面より約30cm程盛り上がっていた。ロームを中心として周囲には褐色系の土が存在している掘り型は断面では擂鉢状を呈しており、平面的には最も低い部分が南北に2ヶ所存在している。

22. 第3号ロームマウンド

第5号住居址下に検出された。上部は住居址を掘り込む際に削平されている。プランは東西約1m、南北約1.5mの南北に細長い階円形をしている。マウンド部分はハードロームで構成されており、周囲は褐色系の土が推積していた。断面形は第2号ロームマウンドと同じように擂鉢状を呈している。
(福島)



A
751.031 m

B

- 1: 黄褐色土
- 2: 暗褐色土
- 3: 暗黄褐色土
- 4: 暗褐色土 (黄色粒が混入やや粘質)
- 5: 黒色土 (黄色土をやや混入)
- 6: 黒色土
- 7: 黒色土 (黄色土との混合土)
- 8: 黄色土 (褐色土を含む)
- 9: 褐色土
- 10: 黄色土 (ローム)
- 11: 黒色土 (木炭混入)
- 12: 暗黄褐色土

0 1 m

第56図 第2号ローム・マウンド実測図

第2節 遺構外出土の遺物

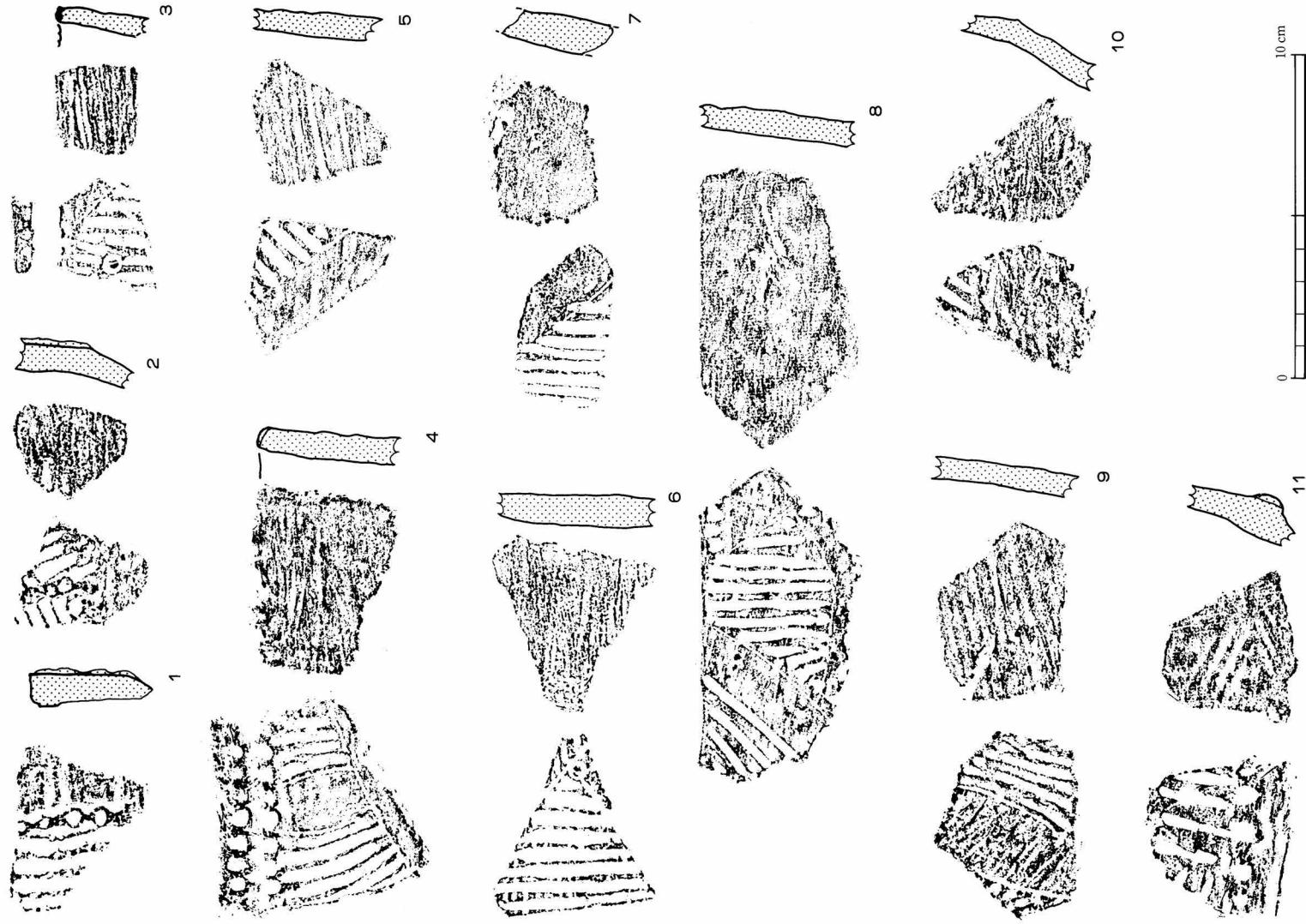
1. 縄文時代早期の土器

第57図～第59図は鶴ヶ島台式の土器である。

第57図の1は縦位の太い沈線文を施文した後に、隆帯を貼り付けている。隆帯上には押圧を加えている。2も縦位の羽状沈線の施文後に縦位の隆帯を貼り付けている。両者とも破片下部は、くびれの部分である。3は口縁部で、口唇部を竹管状工具によって押圧して施文された波状口縁を呈する。文様は斜位の細い沈線を区画状文として区画内は太い縦位の沈線を充填している。その後竹管状工具による刺突を行なっている。内面は横位の貝殻沈線文が施されている。4も口縁部で、やはり波状口縁である。細い沈線による区画状文の中に縦位でやや弧を描いている太い沈線を施文している。5は体部上部で、斜位の細い沈線による区画状文の中に太い斜位の沈線を充填している。区画の外側部分には横位の条痕文の痕跡を留めている。6は細い沈線による区画状文の中に、縦位の太い沈線を施し、区画状文の交差部分には竹管状工具による刺突文が施されている。7も体部上部である。外面は斜位の細い沈線による区画の中に縦位の太い沈線を充填している。内面には条痕の痕跡を残している。8は体部上部で、外面は斜位の細い沈線で区画された中に縦位の太い沈線を充填し、その横には斜位の太い沈線が区画されずに施文されている。内面は横位の条痕文の痕跡を留めている。9は斜位の細い沈線で区画をした後に太い沈線で斜位に施文している。内面は横位の条痕文を施している。10はくびれの部分であり、上部には斜位の太い沈線文を施し、下半は斜位の条痕文を留めている。内面は斜位の条痕文が痕跡程度に残っている。11は10と同じく、くびれ部分であり、屈曲部には横位の隆帯をめぐらし、その上部は縦位の沈線を施し、隆帯上には半裁竹管状工具による押圧を施している。内面は斜位の貝殻条痕文が、羽状の形に施文されている。

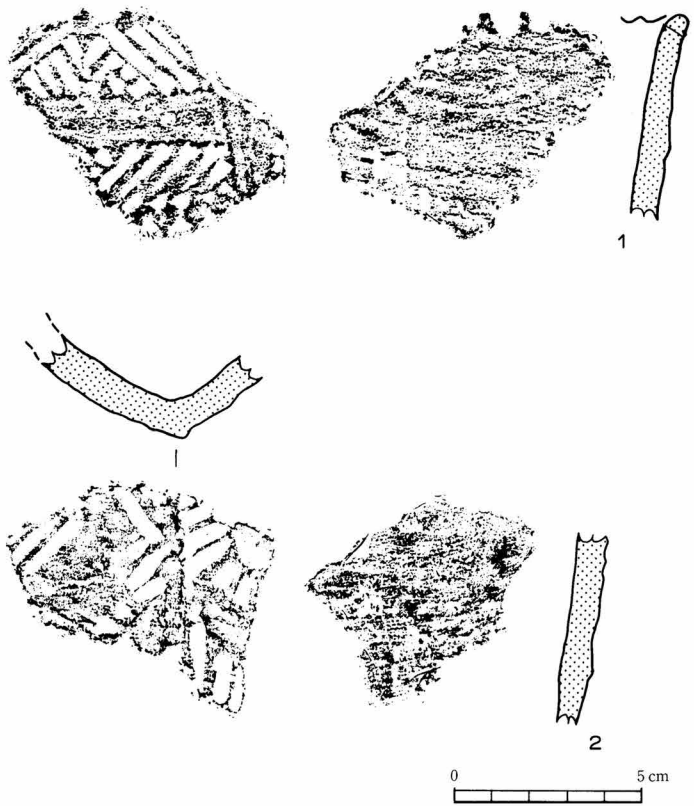
第58図の1は口縁部であり、口唇部には竹管状工具により施文された波状口縁を呈している。外面は細隆起線文によって区画された内側に斜位の太い沈線を施文している。内面は横位の条痕文の痕跡を残している。2はやはり細隆起線文を区画文として、その両側に斜位の太い沈線文を施文している。内面は条痕文を留めている。

第59図の1は横位と斜位の太い沈線による区画状文が交差する部分である。区画状文を施文した後に斜位の太い沈線文を充填している。内面は横位の条痕文が残されているが、あまり明瞭とはいえない。2もやはり1と同じく横位と斜位の区画状文の接する部分である。区画状文の中には、斜位の太い沈線が施文されている。内面には明瞭に斜位の条痕文が施されている。3は縦位の太い沈線を上下二段に分けて施文している。内面は斜位の貝殻条痕文である。4は屈曲部で外面に横位の太い沈線を施文し、内面は横位の条痕文の痕跡を留めている。5は上部に逆八字形に細い沈線で区画し、区画内に縦位に沈線が施されている。6は区画外の無文部分であり、区画



第 57 图 縄文時代早期土器拓影图 (3)

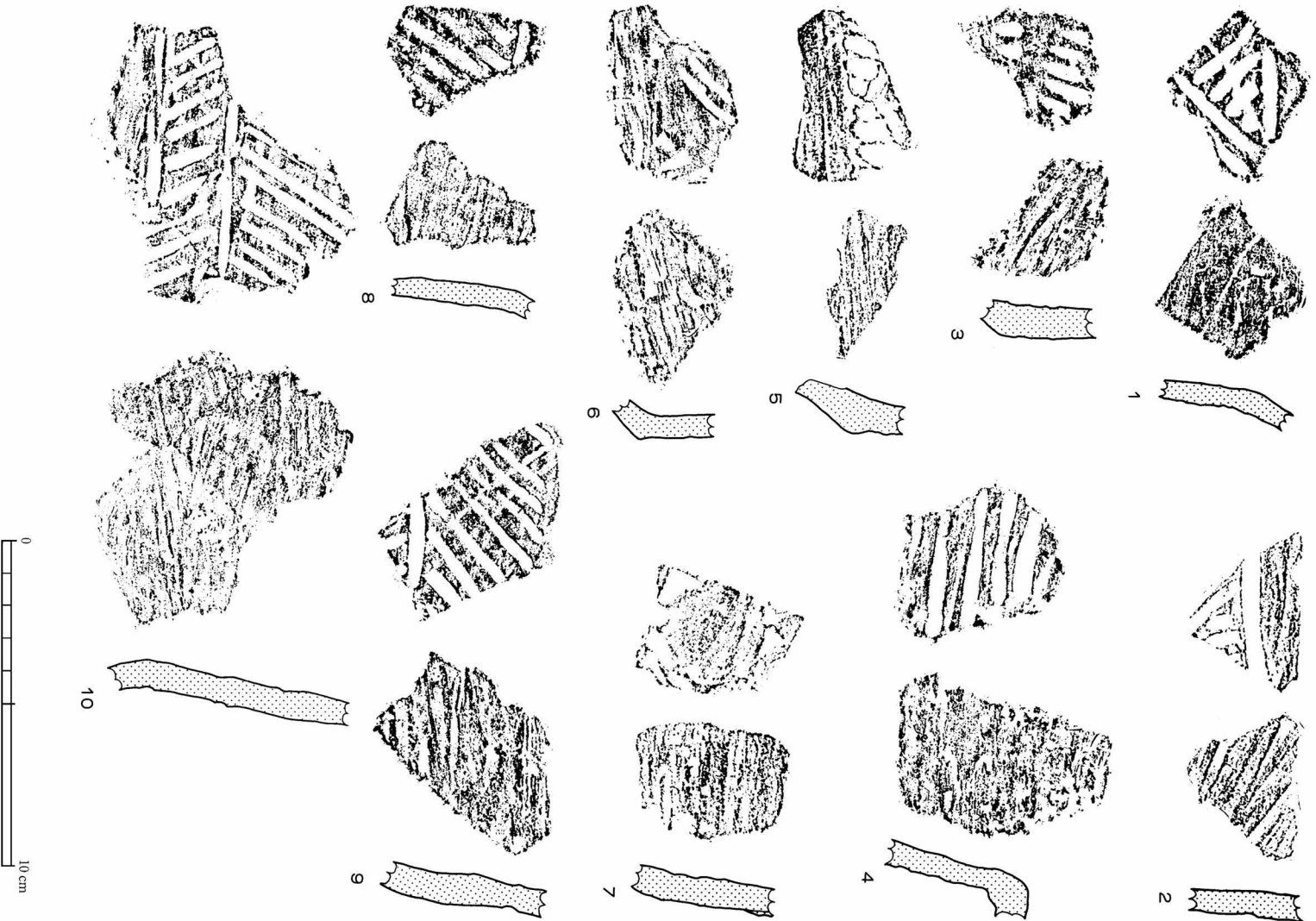
内の部分には斜位の太い沈線を施している。内面は横位の条痕文を施文している。7は屈曲部であり、上部に斜位の太い沈線を施文している。屈曲部下部は横位にナデを加えている。内面には横位の条痕文を留めている。8は上部に太い沈線で区画状文を施し、その下部の区画内には斜位の沈線文を充填している。9も8と同じく横位の太い沈線によって区画された上下に、横位の羽状になるように斜位に太い沈線を施文している。10は横位の区画状文を施し、区画内に斜位の沈線を施しているものであり、下部の区画状文の下は無文部となっている。内面は縦位の条痕文である。



第58図 縄文時代早期土器拓影図(4)

第60図1~9は表裏共に明瞭な横位の条痕文を施した土器である。1は口縁部である。口唇部はつまんで形を整えており、外面に屈曲している。外面は口縁部上端部付近まで条痕文が施され内面は横位の条痕文であり、上端部は磨り消されている。2もやはり口縁部であり、口唇部は面取りがされており、外面は口唇部まで横位の条痕文が極めて明瞭に施されている。内面も同じように口唇部まで横位の条痕文が施されている。3~9は全面に横位の条痕文が残されているものである。このうち3・4・7は横位に条痕文が残っているだけであるが、6は横位の条痕文を施したのちに外面にやや斜めに条痕文が施されている。内面は横位の条痕文である。8は内面の上半部は横位であるが、下半部は斜位の条痕文が残されている。9は外面に斜位の条痕文が施されている。施文順序は斜位ののち縦位の条痕文を施文している。なお、下部は接合部より破損しており、接合痕を明瞭に残している。10~14は外面に横位・内面は横位に条痕が施文されているものである。10は外面に横位の条痕を施文した後に斜位の条痕を一部施文し、内面には斜位の条痕文を留めている。12は口縁部であり、外面は横位の条痕文であるが、内面は数回に分けて斜位の条痕文を施文している。14はあまり深くは施文されていないが、外面は横位の条痕が施され、内面は斜位に施文されている。

第61図1~9は内・外面共に斜位の条痕文が施されているものである。1は外面は一定方向の斜位の条痕文が施文されるが、内面は2方向にむかって施文されている。2・3は外面は急な傾



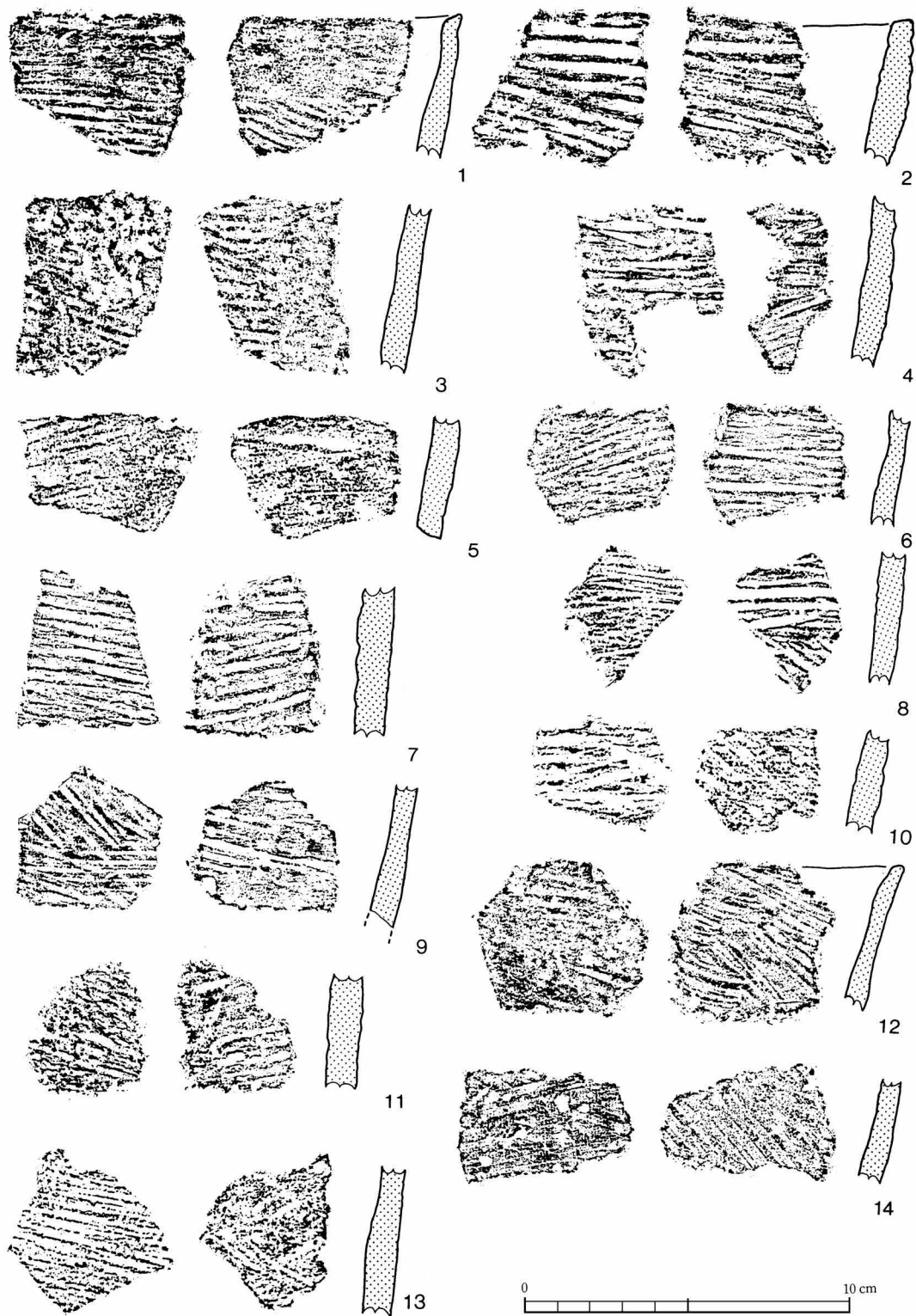
第 59 图 縄文時代早期土器拓影图 (5)

きで斜位に施文され、内面は外面よりややゆるやかな傾きで施文されている。4・5は外面にやや粗い斜位の条痕文が施されている。内面は条痕文の施文後ナデ調整によって磨り消されている。6・8は外面に横位・内面に方向の異なる斜位の条痕文を施文している。7は土器底部である。外面は縦横に条痕文が施文されているが、内面は一方方向に施文されている。9は外面は一定方向に条痕文が施されていない。内面は横位の条痕文が残されている。10は口縁部である。内・外面共に横位の条痕文を施している。11は体部であり、やはり内・外面共に横位の条痕文が残されている。12は口縁部であり、口唇部は竹管状工具により押圧施文され、波状口縁を作っている。外面は口唇部まで条痕文を留めているが、内面は口縁部よりやや下方まで条痕文を留めているのみである。13は外面は横位、内面は左下に向かう斜位の条痕文を施文している。14は外・内面共に横位の条痕文を施している。15は外面は横位、内面は上半は斜位、下半は横位に条痕文を施文している。

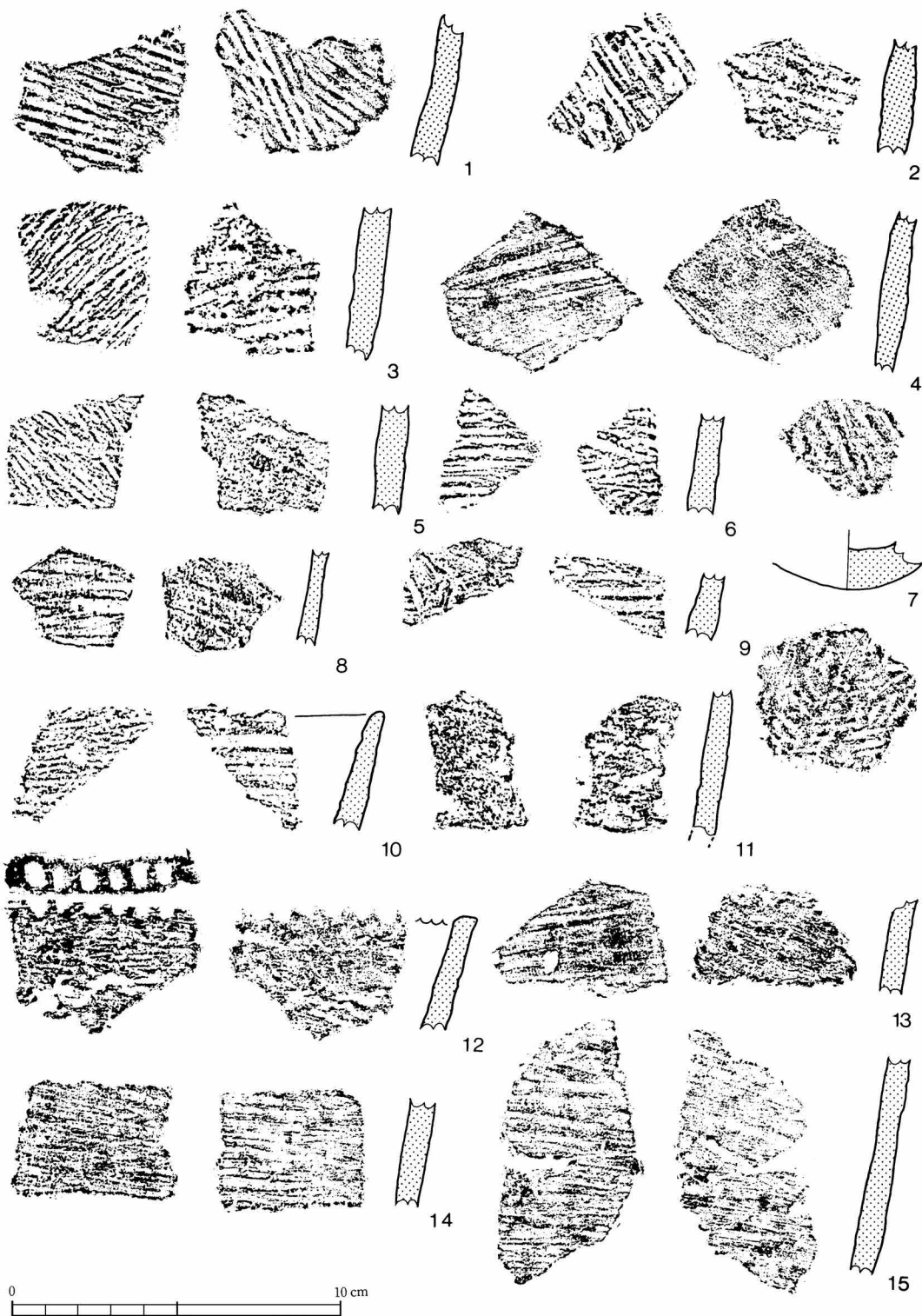
第62図の1は口縁部の破片である。口唇部には絡条体圧痕文が施され、外・内面共横位に条痕文を施している。2は内・外面共に横位の条痕が施文されている。3は外面は不規則に条痕文が施され、内面も横位と斜位に条痕を施文している。4は外面は横位の条痕文を施文し、内面は縦位に条痕文を施している。5は外面上部は横位、その下からは斜位に条痕文を施文し、内面も上半は横位、下半は斜位に条痕文を施している。6は底部である。外面は縦横に条痕文が施され、内面は良好な状態で残ってはいない。7は外面は横位、内面は斜位に条痕文を施している。9・11は外面に縦位、内面は横位の条痕文を施している。8は米粒状の圧痕文を持つものである。10は棒状工具をこすりつけて施文しているようである。

第63図は外面に縄文を施しているものである。1は外面LRの縄文を施文し、内面は横位の条痕文を施文している。2～4は外面にRLの縄文を施文し、内面は横位の条痕文を施している。中でも4は口縁部であり、口唇部には竹管状工具によって押圧して作られた波状口縁を有している。内面は横位の擦痕が残されている。6は内面はまばらに条痕の痕跡を留めている。7はやや粗い条痕文である。5・11は外面はRLの縄文であり、内面は縦位の条痕を施文している。8は粗いRLの縄文が施されている。内面は斜位の擦痕が残されている。10は外面はRLの縄文を施し、内面は擦痕を留めている。9・12はRLの縄文を施文し、内面は横位の条痕文を残している。12は縄文の施文前に条痕文を施文している。

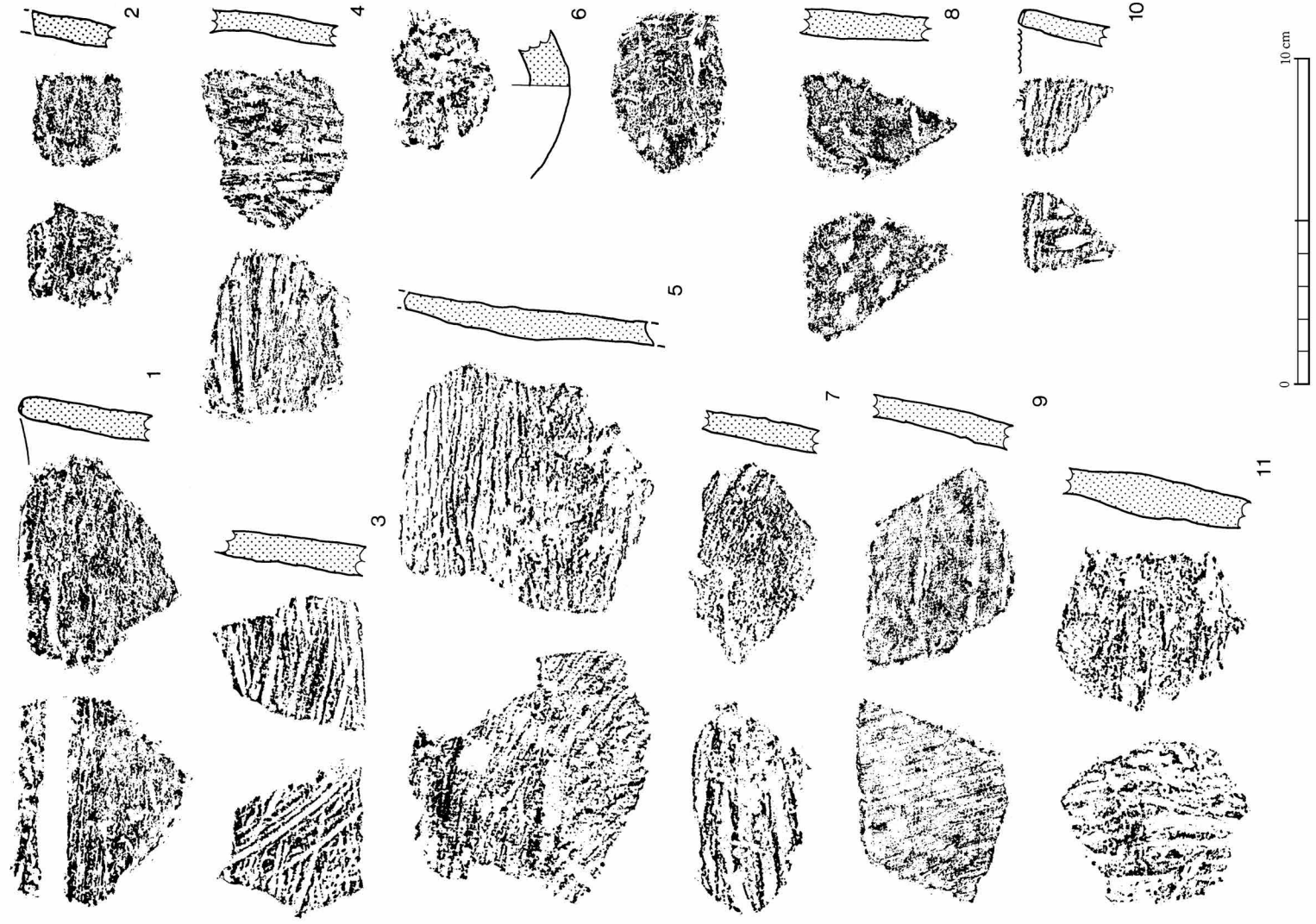
第64図は貝殻腹縁文を有する土器である。1は外面に横位又はやや斜め方向に条痕文を施し、その後縦位に貝殻腹縁文を施文している。内面は横位の条痕文である。2は内・外面共に条痕文をナデ調整によって磨り消し、その後外面には縦位に貝殻腹縁文を施文している。3は1と同じように、外面は横位の条痕文を施文した後、縦位の貝殻腹縁文を施している。内面はナデ調整により条痕文は磨り消されている。4は外面は縦位の貝殻腹縁文を施文し、内面には横位の条痕文が施文されている。



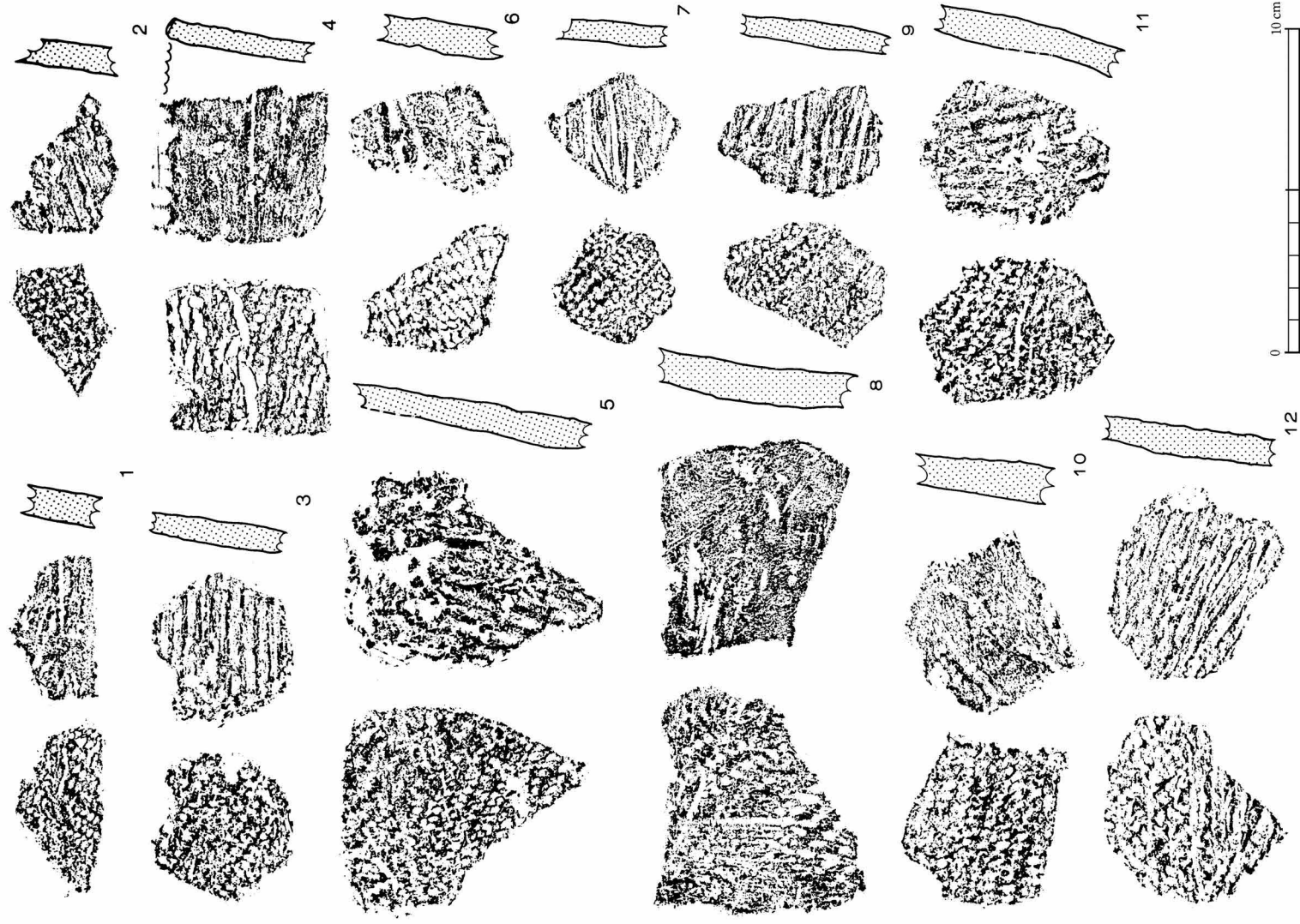
第 60 図 縄文時代早期土器拓影図 (6)



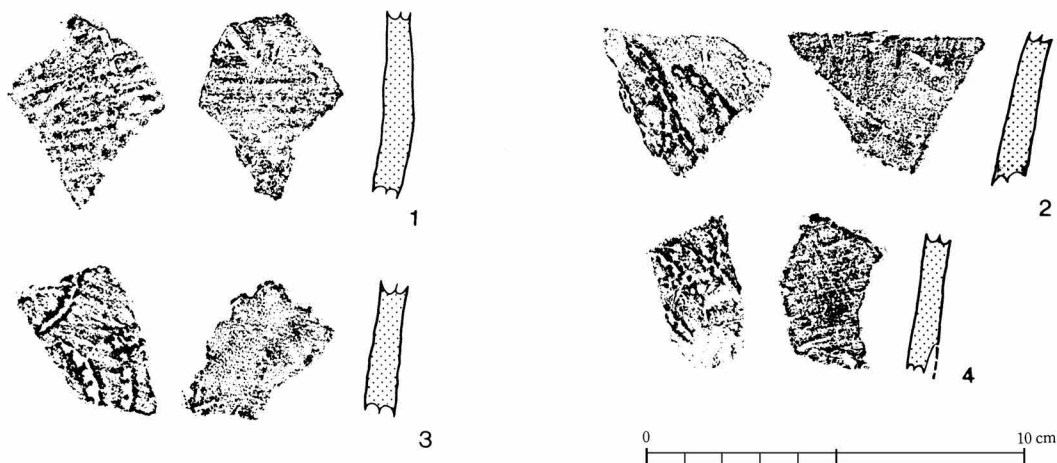
第 61 図 縄文時代早期土器拓影図 (7)



第 62 図 縄文時代早期土器拓影図 (8)



第63図 縄文時代早期土器拓影図(9)



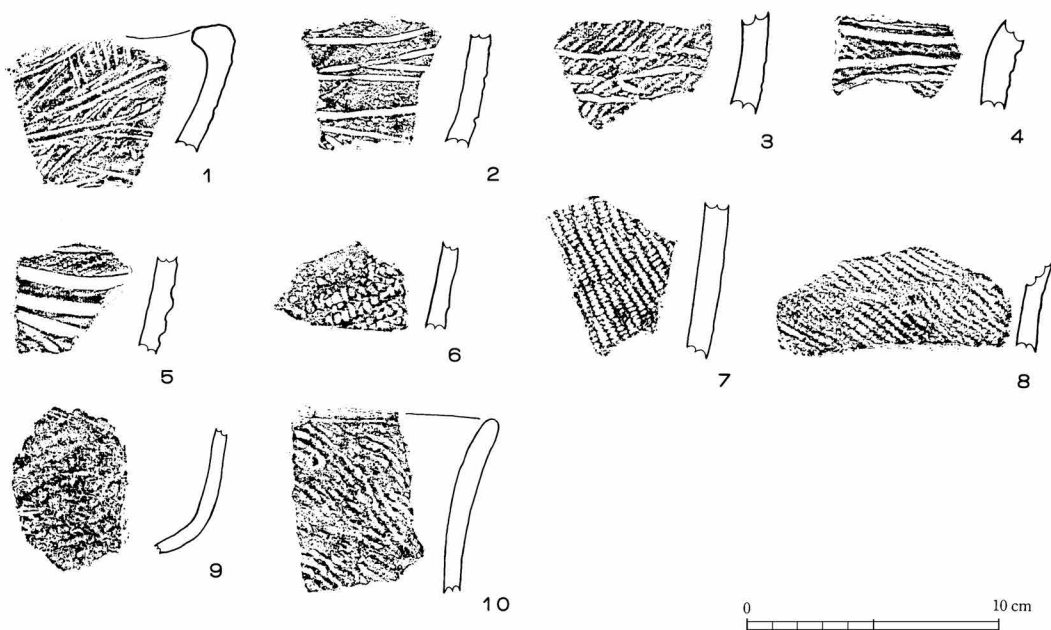
第 64 図 縄文時代早期土器拓影図 (10)

2. 縄文時代前期の土器

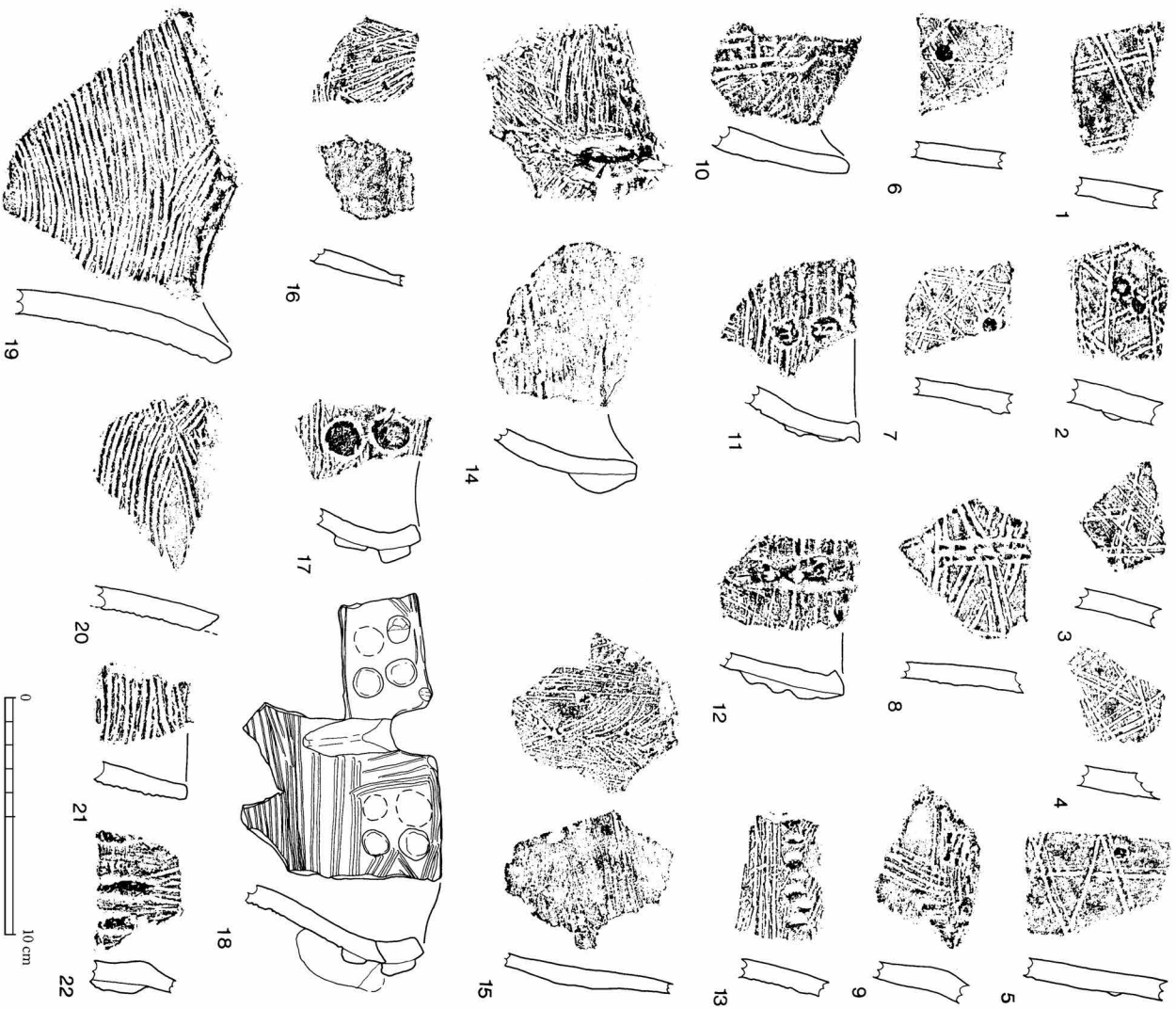
第 65 図 1～5 は諸磯 b 式の土器である。1 は口縁部で大きな波状口縁を内側に折り曲げている。縄文を地文として半裁竹管状工具による平行沈線を斜位に施文している。2～4 は縄文を地文としてへら状工具により、横位に沈線を施文している。5 は太い沈線を横位に施文している。6～10 は縄文を施文しているものである。9 は底部である。10 は口縁部であり、やや外反している。

第 66 図の 1～8 は半裁竹管状工具により格子目状に粗く平行沈線文を施し、2 個 1 組のボタン状貼付文を施文している。8 は半裁竹管状工具による平行沈線文の施文後縦位の結節浮線文を施している。9 は羽状に平行沈線文を施している。10 は口縁部であり、平行沈線文が縦横に施文された波状口縁である。11 は口縁端部を面取りしており、やや内弯している。外面は横位の平行沈線を施文し、大きなボタン状貼付文を貼り付けてその上を半裁竹管状工具の先端で刺突している。12 も口縁端部を面取りし、口唇部を平面に仕上げている。外面は縦位の結節浮線文を施文している。13 は体部の土器である。外面上部は棒状工具により左斜めより刺突され、その下は横位の平行沈線文が施文されている。14～16 は同一個体である。14 は口縁部で、波状口縁を呈しており、突起を上部に貼り付けている。外面の地文は横位の沈線である。15・16 は体部である。14 と同じく沈線文を施文している。17・18 は同一個体であり、口唇部は面取りをして平面に仕上げ、4 つのボタン状貼付文を 1 単位としている。18 はボタン状貼付文の間の口縁部を抉り、凹状に成形しその下部に突起を貼り付けている。地文は横位を中心とした半裁竹管状工具による平行沈線文である。19～21 は沈線を施文した土器である。19 は波状口縁を呈しており、全面に半裁竹管状工具により横位の沈線文を施している。20 は口縁部中部であり、接合痕が認められる。文様は上部に横位のレンズ状文を施し、下部は横位の沈線文を施文している。21 は口縁部であり平行沈線文が施されている。22 は上部に縦位の沈線を施し、下部には隆状突起を貼り付けている。

第67図・第68図は諸磯C式の土器である。第67図は地文に半裁竹管状工具による平行沈線文を施し、口唇部付近に口縁にそって結節浮線文を施文した後にその下部から縦位の結節浮線文を貼り付けているものである。1は口唇部を面取りし、やや外反している波状口縁の土器である。縦位の沈線を地文とし、口縁にそって2条の結節浮線文を施し、その下には縦位に数条の結節浮線文が施文されている。2は1と同じく波状口縁で、口縁にそって2条の結節浮線文を施し、その下には3条の縦位の結節沈線文を施文している。地文は斜位の沈線文である。また、縦位の結節沈線文の横には2個1組のボタン状貼付文が貼付されている。3は波状口縁の波頂部であり、やや内弯している。やはり口縁に沿って2条の結節浮線文が施文されている。地文は斜位の沈線文である。4は口縁に沿って1条の結節浮線文を施文し、その下は数条の結節沈線文を施文している。地文は羽状の沈線文である。5は口縁にそって3条の結節浮線文が施されているもので、地文は斜位の沈線である。6は3と同じく波頂部の破片である。口縁に沿って3条の結節沈線文を施しその下に3条の縦位の結節浮線文を施し、その下に3条の縦位の結節浮線文を施文している。地文は上半部は斜位・下半は縦位の沈線文である。7は口縁部であり、半裁竹管状工具による沈線を地文として口縁にそって3条の結節浮線文を施している。8は波頂部付近のもので斜位の沈線を地文とし、縦位の2条の結節浮線文を施文し、その後口縁にそって3条の結節浮線文を施している。9は口縁端部を鋭角に面取りしており、口縁にそって2条の結節浮線文を施文し、その下部には3条と思われる縦位の結節浮線文を施している。地文は半裁竹管状工具により沈線を施文している。10はゆるやかな波状口縁であり、口唇部は面取りされている。口縁にそっては2条の結節浮線文を施文し、その下には2個1組のボタン状貼付文を貼り付け、縦位の結節浮線



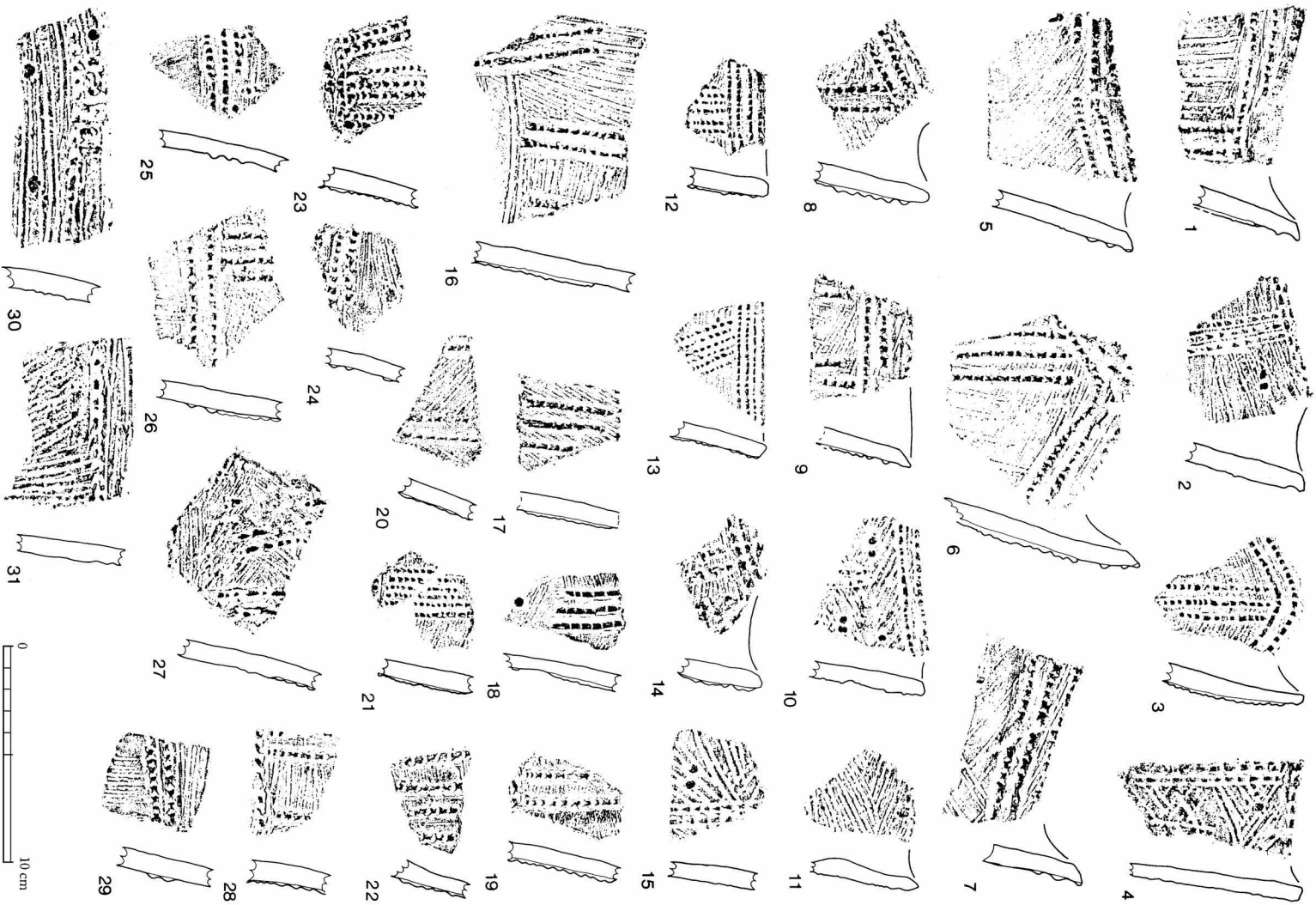
第65図 縄文時代前期土器拓影図(1)



第 66 図 縄文時代前期土器拓影図 (2)

文を施文している。地文は羽状の沈線文である。11は口縁部であり、羽状の沈線文を施している。口縁に沿って1条の結節浮線文を施文している。12は口唇部を面取りした平口縁で、口縁に沿って3条の結節浮線文を施し、その下部に6条の縦位の結節浮線文を施文している。地文は横位の沈線である。13は12と同じように口縁に沿って3条の結節浮線文を施文し、その下部に斜位の結節浮線文を6条施している。地文は横位の沈線文である。14は波状口縁で、口縁に沿って2条の結節浮線文を施し、地文には横位の沈線を施している。15～29は口縁部下半である。縦位の結節浮線文の下に、横位の沈線文又は結節浮線文が施文されている。15は半裁竹管状工具による斜位の沈線を地文とし、縦位の結節浮線文、2個1組のボタン状貼付文を貼り付けている。16は縦位と横位の沈線文を地文として2条1単位の結節浮線文が施されている。17は接合痕がみられるが、斜位の沈線文を地文とし、3条1単位の結節浮線文を施文している。18は羽状の沈線文を地文とし3条1単位の結節浮線文を施し、下部にはボタン状貼付文もみられる。19・20も同様、羽状の沈線文を地文とし、2条と考えられる結節浮線文を施している。21は横位の沈線を地文とし、6条の結節浮線文を施している。22は横位の沈線の地文と、縦位の結節浮線文をもっている。23は縦位の沈線の地文と、3条1単位の縦位の結節浮線文が施されている。24は体部と口縁部の境に横位の結節浮線文が施されている。25も同じく体部と口縁部の境であり、3条1単位の横位の結節浮線文で区画されている。26は2条の結節浮線文である。その上は3条1単位の縦位の結節浮線文である。27はあまり良好な資料ではないが、羽状の沈線文を地文とし、頸部には横位の沈線文が区画文として施文されている。28は横位の沈線文を地文とし、縦位の結節浮線文を施文したのち、横位の結節浮線文が区画文として施文されている。29は頸部で、横位に2条1単位の結節浮線文を施し、区画文としている。区画文より上部では横位の沈線、下部では縦位の沈線を施文している。30は区画文であり、横位の沈線文を施し、その上部に1条の横位の結節浮線文を施している。31は区画文の下部に横位の結節浮線文を施し、その下は縦位の平行沈線を施文している。

第68図は渦巻状に結節浮線文を施しているものである。1～4は同一個体である。口縁部の破片であり、渦巻状に結節浮線文を施し、渦巻の中心部には横位の2つのボタン状貼付文を貼り付けている。4は口縁下部に横位の結節浮線文を施し、体部との区画文を構成している。5は口縁の破片である。口縁に沿って3条の結節浮線文を施し、斜位と上向きのコ状の結節浮線文を組み合わせで施文している。5と9は同一個体である。6は口唇部を面取りし、口縁に沿って4条の結節浮線文を施文し、その下は渦巻状の結節浮線文を施している。7は波状口縁である。口縁まで渦巻状の結節浮線文を施文している。8は平口縁の口唇部に面取りをした土器である。口縁にそって4条の結節浮線文が施され、その下は渦巻状の結節浮線文が施文されている。10・11も渦巻状の結節浮線文を施した土器である。12は格子目状の沈線を地文として、渦巻状の結節浮線文を施文している。13～21は渦巻状の結節浮線文を施した土器である。13は渦巻状の文様が互いに接し合う部分で結節浮線文が接触している。14は渦巻状の文様の中心部分であり、渦巻は上下にやや細長く施文されている。15も渦巻状の文様の中心部であるが、14と異なりほぼ円形に施文されている。16は間隔の広い渦巻状の結節浮線文を施文している。7・18は渦巻状の文様の外側の

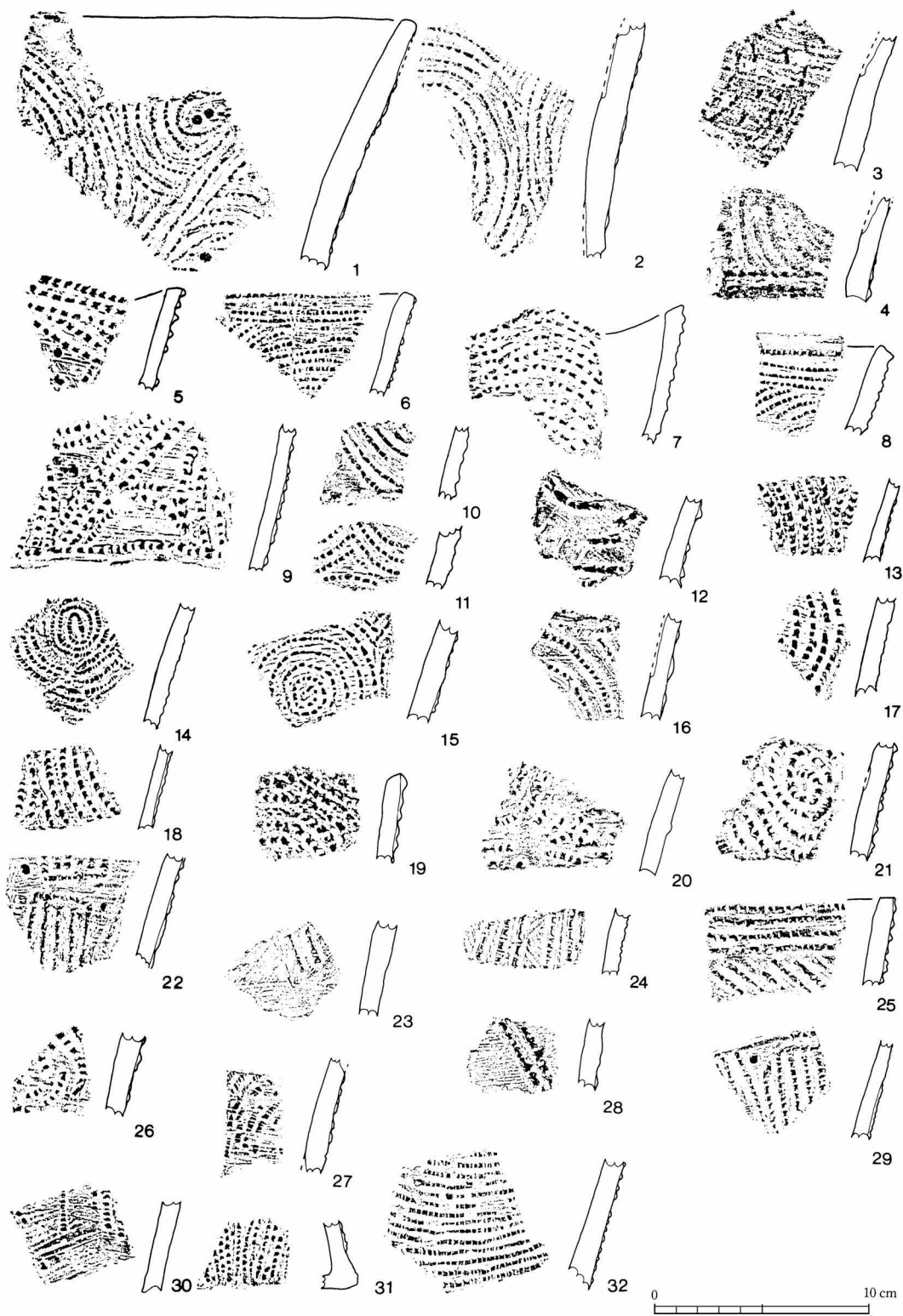


第 67 図 縄文時代前期土器拓影図 (3)

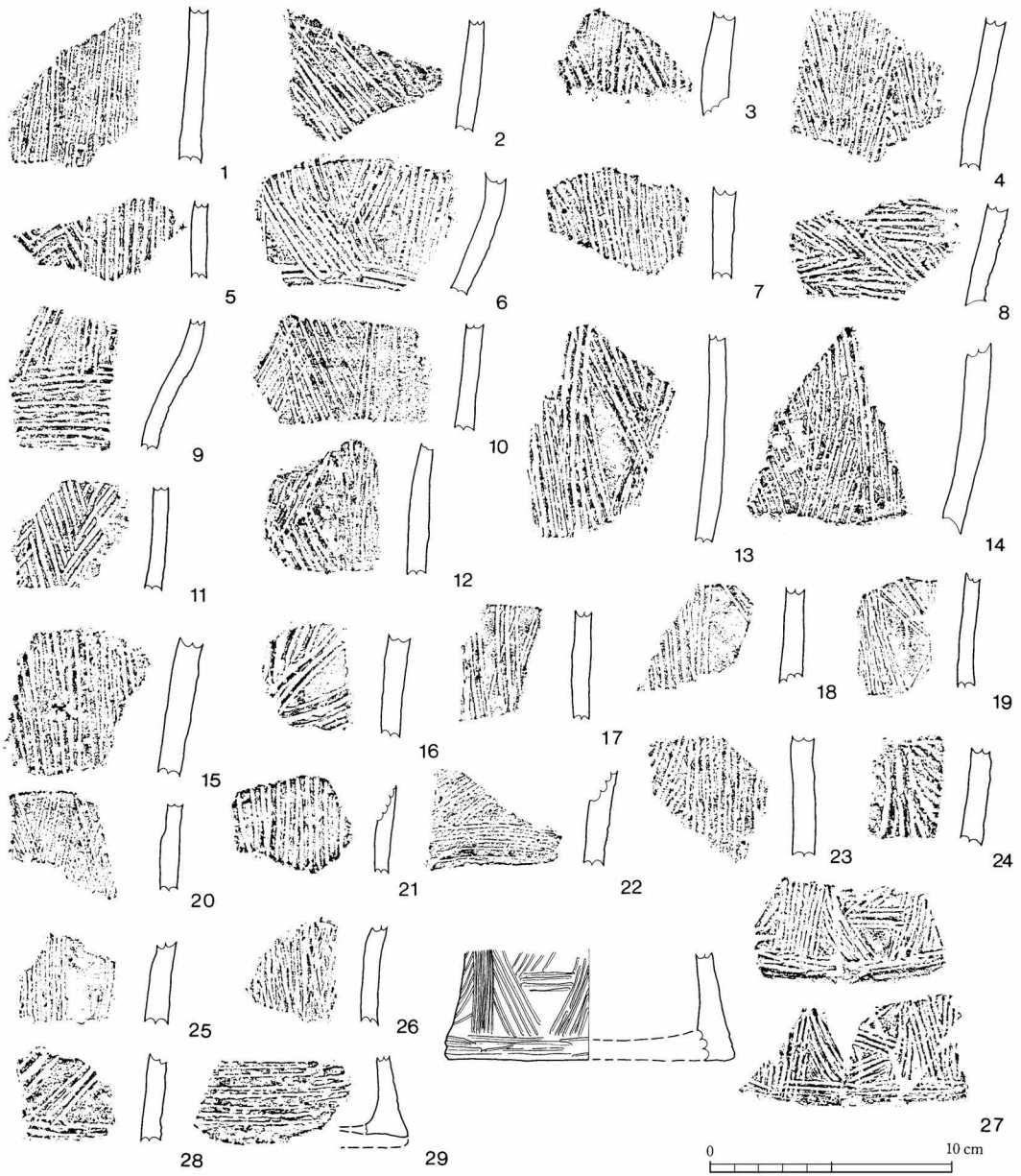
部分である。19は口縁部であり、上部は接合部分より破損している。20も剥落が著しいものの、渦巻状の文様の下部である。21は渦巻状の文様の中心部分で、上下にやや長く施文している。以上の土器はいずれも地文は横位の沈線である。22は縦位の5条の結節浮線文を横位の結節浮線文でつなぎ、一単位としている。各単位の隅にはボタン状貼付文が貼り付けられている。23～30・32はヘラ切りにより結節浮線文と同じような効果をあげているものである。23は体部上部であり、下部には横位の沈線文により区画をし、上部は斜位の沈線文を施した後に粘土紐を貼り付け、ヘラ切りを行なっている。29は口縁部であり、地文に沈線文を施し、その後に粘土紐を貼り付けてヘラ切りを行ない、ボタン状貼付文を貼り付けている。30は平行沈線を山形になるように連続して施文している。沈線の施文後に縦位に粘土紐を貼り付け、ヘラ切りを行なっている。32は口縁部であり、渦巻状に粘土紐を貼り付け、それにヘラ切りを行なっている。31は底部である。縦位の結節浮線文を密に底部下端まで施文している。

第69図は沈線によって文様を施している土器である。1は縦位に沈線を施しているもので、体部中部のものである。2は斜位に沈線を施文している。3・4は体部の破片であり、縦位に引かれた沈線による区画内の部分である。両者とも沈線で山形文が施されている。5も体部であり、縦位の区画文の中に山形文が施されている。6は下部に横位の沈線文を施文した後に、その上部に斜位に沈線文を施文している。7は縦位の沈線文が施文された体部上部の破片である。8は口縁部下部である。斜位の沈線文で羽状文を施文している。9は頸部であり、口縁部より施文されている縦位の沈線文の下部に横位の沈線文が施文されている。10は体部であり、縦位の沈線文による区画の内側に縦位の羽状文が施文されている。11は3～5と同様の山形文が施文された体部の土器片である。12～14は縦位の沈線によって区画された内側にX字状に沈線を施したものである。15・17～19・21・23・25・26は縦位に沈線を区画文として施文したもので、18・19は区画内にX字状文を施文している。16は斜位の沈線文を施している。20は区画された内側の部分であり、山形文が施文されている。22は頸部で、横位の沈線によって口縁部と体部を区画し、この区画の上部は羽状の沈線文を施している。24は縦位の沈線による区画の中にX字状文の沈線を施文している。27は底部である。体部下部に横位の平行沈線文を施文した後、斜位の沈線を施し、縦位の沈線文を施文するという順である。そして最後に底部の横位の沈線文を施文している。28は体部であり、斜位の沈線文を施文している。29も27と同様底部の土器であるが、こちらは底部まで総て横位の沈線が施文されている。

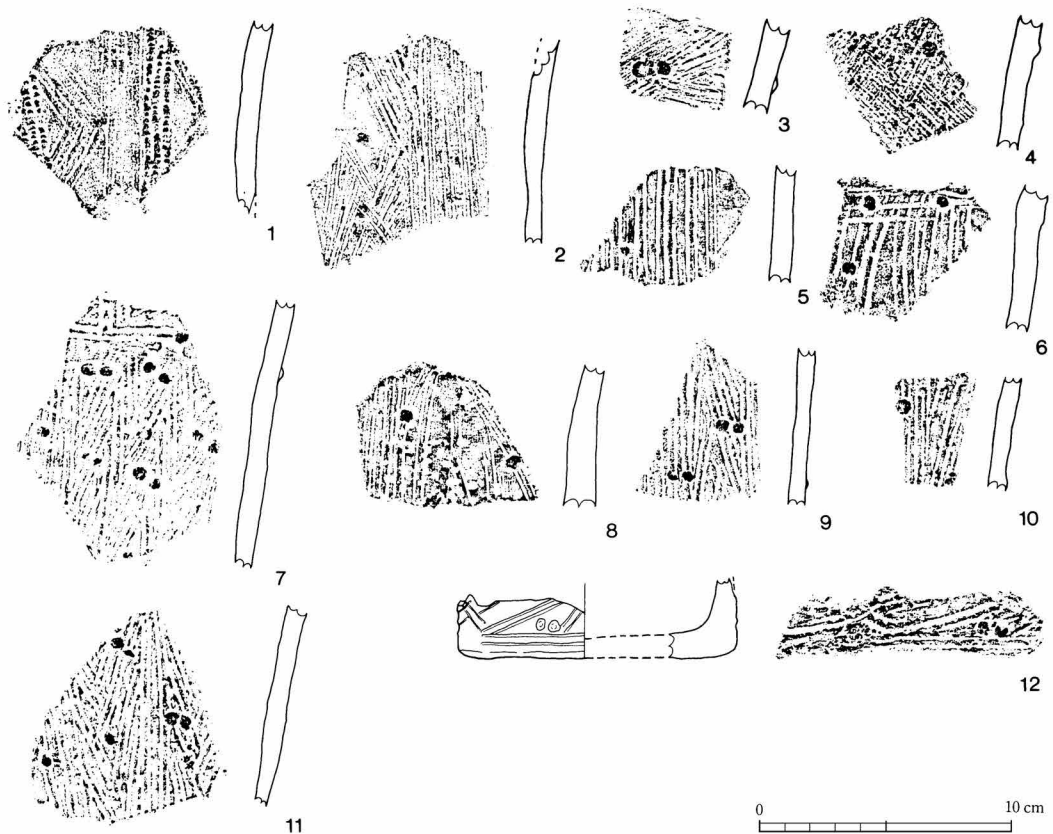
第70図は主に沈線文を中心として施文され、ボタン状貼付文を貼り付けているものである。1は縦位の沈線を区画文とし、その内側に縦位の山形文を施文している。その後3条1単位とした縦位の結節浮線文を縦位沈線文の右側に施文している。2は体部の上部であり、やや外反ぎみに立ち上がる。縦位の沈線によって区画された内側にX字状文を縦に何段も重ねたモチーフの沈線文を施している。3は口縁部下部であり、横位の羽状沈線文を施文した後に横に並べて2個1組のボタン状貼付文を貼り付けている。4も3と同じく羽状沈線文を施文した後にボタン状貼付文を貼り付けている。5は体部で縦位の区画沈線文が施文されているものである。6も同じく体部



第 68 図 縄文時代前期土器拓影図 (4)



第 69 図 縄文時代前期土器拓影図 (5)



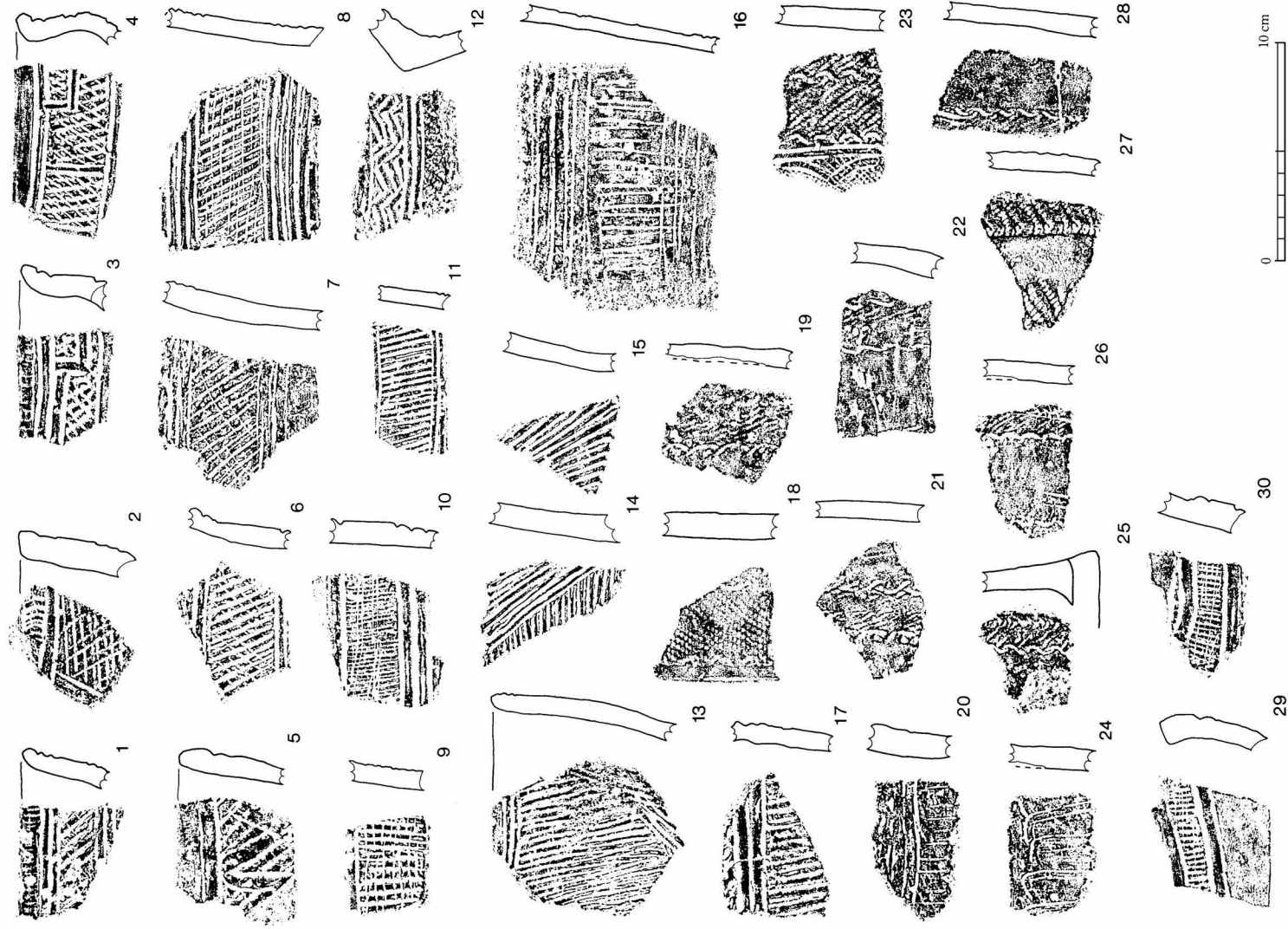
第70図 縄文時代前期土器拓影図(6)

の土器で縦位の沈線文を施文している。その後にボタン状貼付文を貼り付けている。7は体部の土器で、斜位の沈線文を施文し、その後に3条1組の縦位の結節浮線文が施されている。ボタン状貼付文は横に2個1組として貼り付けられている。頸部は横位の結節浮線文により区画され、更に口縁部の縦位の結節浮線文と接している。8は体部であり、縦位の沈線文を施文して区画文とし、区画文の中には斜位の沈線がみられる。ボタン状貼付文は沈線施文後に貼り付けられている。9も体部である。縦位の区画状文の沈線の内側に斜位の沈線を施している。ボタン状貼付文は2個1組で横に並んで貼り付けられている。10は体部であり、縦位の沈線を施文している。沈線の上にボタン状貼付文を貼り付けている。11も体部であるが、これまでのものと比べて縦位の区画するための沈線が狭いものである。区画のための沈線の幅より広い区画文の中にV字状の文様を縦に連続して施文している。沈線の施文後にボタン状貼付文を横に2個1組として貼り付けている。12は底部である。斜位の平行沈線を間隔をおいて施文し、その後に底部の横位の平行沈線を施文している。2個1組の横位に貼り付けたボタン状貼付文はこれらの沈線を施文した後に貼り付けている。

3. 縄文時代中期の土器

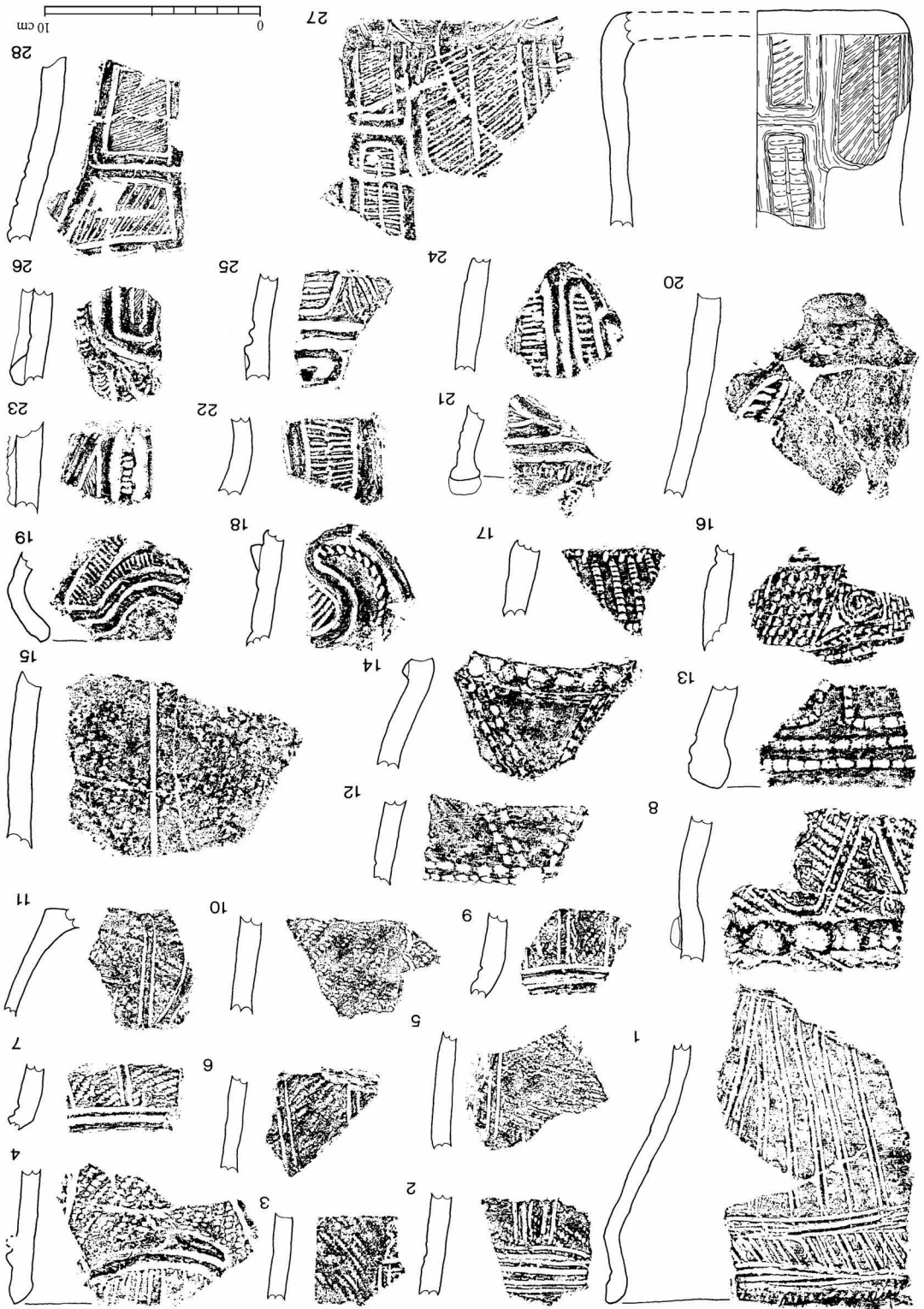
第71図は縄文時代中期初頭梨久保式の土器である。1～5は口縁部であり、口唇部付近を連続爪形文(1～3)やナデ(4・5)を施し、その下部の文様帯には沈線による斜位(1)又は格子目状(2～5)の文様を構成する。格子目状の文様には更に半裁竹管状工具による半隆起線によってL字状・縦位・斜位に施文されている。口唇部は丸くおさめているもの(1・5)、面取りをして平らにしているもの(2)、くの字状に屈曲させているもの(3・4)がある。6～12は口縁部である。口縁上端部の文様帯で格子目(7・9・10)、斜位(11)、山形(12)の文様を施しているものや、口縁部下の数条の横位の沈線文によって区画された内側に格子目を施文しているもの(7・8)がある。13～15は沈線のみ施されているものである。13は口縁部であり、口縁上端部には横位の沈線を施文し、その下は縦位の沈線文を施し、その後斜位の沈線文を施文している。14は横位の沈線を施文した後に斜位の沈線を施している。15は斜位の沈線文である。16・17は沈線文系の土器である。横位の沈線によって区画された中に縦位に沈線を施文している。17の区画文は半隆起線である。18・19・21～23・25～28は縄文系土器の体部である。いずれも結節のある縄文を施文している。この縄文は単に縦位に区画したもの(19・21・22・25・26・28)ばかりでなく、区画された縦位の縄文の横に沈線が施文されたり(18)、結節のある縄文を地文とし、沈線によって文様を施文しているもの(23)などがある。20・24は半裁竹管状工具により、浅い沈線を施文したものである。29・30は波状口縁の口縁部であり、半裁竹管状工具を使つての半隆起線文により区画された約1.5cmの中に細かく格子目文を施文したものである。

第72図の1は、くの字に屈曲した口縁をもち、口縁部には斜位の半裁竹管状工具による平行沈線文を施文し、頸部には数条の横位平行沈線文を区画文としている。体部は粗く縦位の平行沈線文を施している。2・3・5～9・11は縄文を地文とし、半裁竹管状工具により平行沈線文を施しているものである。平行沈線文には横位に数条施し、その下に縦位に施文しているもの(2・7・9)や、逆L字状に平行沈線を施文しているもの(3)、体部中部に縦位の平行沈線を施しているもの(5・6)などがある。8は上部に押圧隆帯を貼り付け、その下部に半裁竹管状工具により、Y字文を施文している。12～14・16・17は角押文によって施文された土器である。上下の横位区画文の中に斜位の角押文を施文し、三角形を形成しているもの(12・14)や、上部に2条の角押文を施文し、その下部には方形になるように角押文を押すもの(13)がある。16は角押文による渦巻文を施文し、その両側は斜位の角押文を施文している。17は縦位の角押文である。18～28は縄文時代中期中葉の土器である。18は半円状に隆帯を貼り付けているものである。19は隆帯を半裁竹管状工具を用いて施文し、その中は沈線文を施している。20は底部であり、隆帯を縦位に貼り付け、その上に刻みを入れている。21は口縁部であり、口唇部に渦巻状の粘土紐を貼り付け、そこに刻みを施している。口縁下部は沈線を施文している。22～28は半隆起線文によって区画された内側を沈線で施文しているものであり、沈線も横位・斜位の方向にそれぞれ施文されている。27の沈線内の縦位に施文されている沈線は押し引きを行なっている。



第 71 図 縄文時代中期土器拓影図 (1)

第72图 縄文時代中期土器拓影图(2)



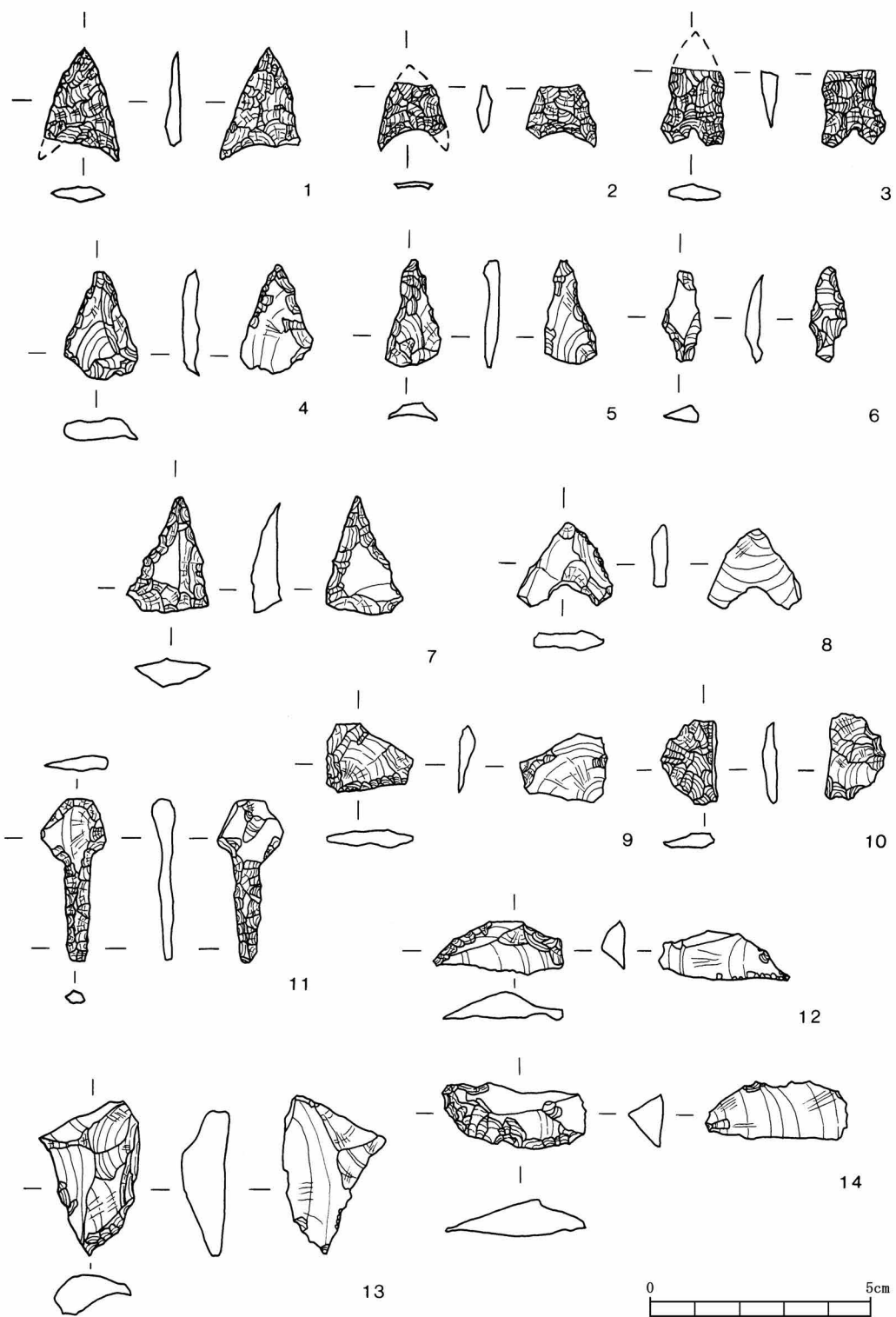


第 73 図 縄文時代中期土器拓影図 (3)

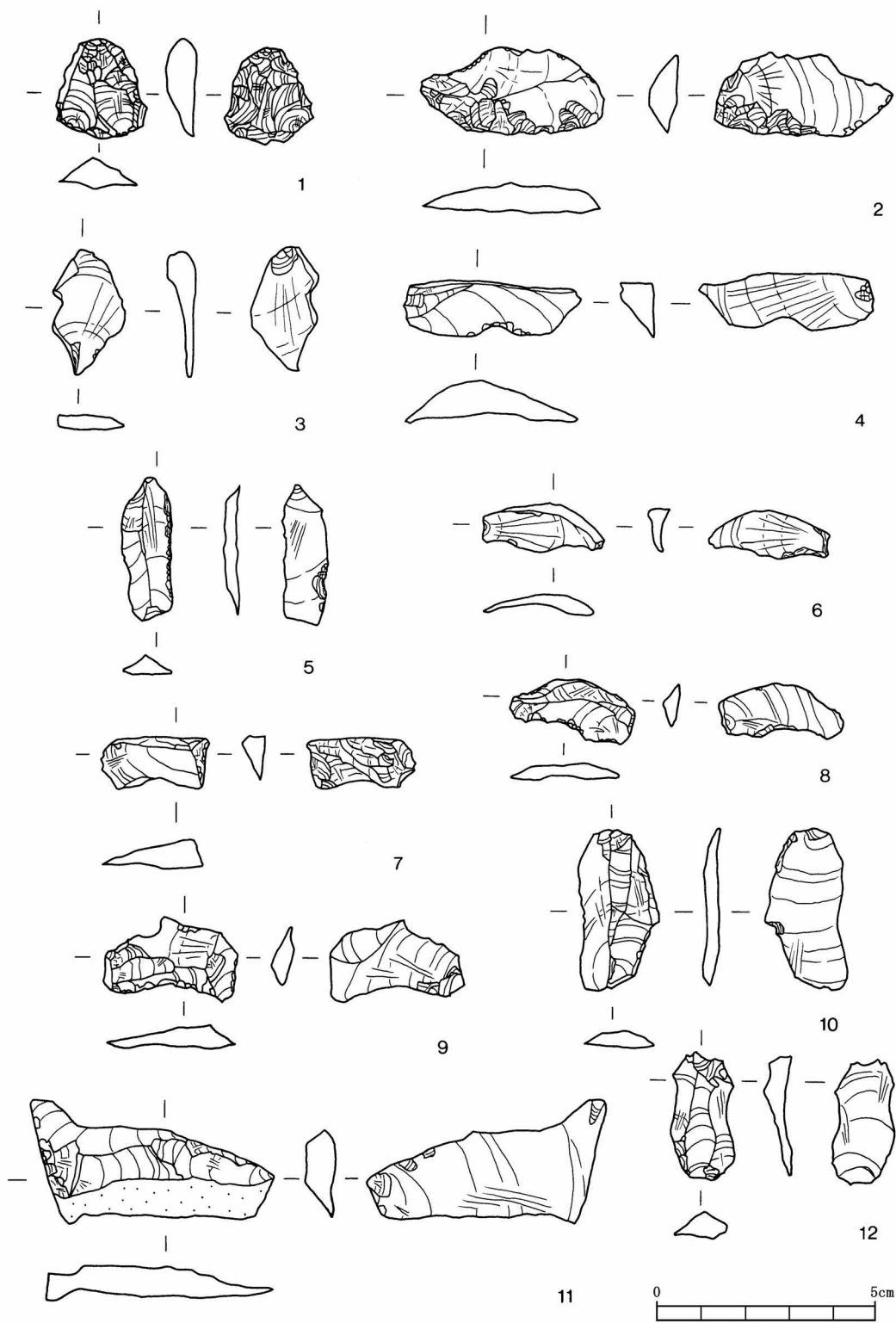
第73図の1～9は平出遺跡第Ⅲ類A群の土器である。1・2は同一個体の口縁部である。横に2条の波状文を施文し、4単位と思われる隆帯を伴う突起を貼り付けている。3・4は口縁部下部から体部上部にかけてのもので、口縁部と体部の境界に横位の押圧隆帯を貼り付け、その上下に縦位の半裁竹管状工具による平行沈線文を施文している。5・7・8は体部であり、半裁竹管状工具による平行沈線文を施している。6は上部に隆帯を貼り付け、隆帯の下は縦位の平行沈線文を施している。9は平行沈線により連続山形文を施文し、山形文の下には縦位の平行沈線文を施文している。10は隆帯によって区画された内側に縦位の沈線を施文している。11は縄文を地文としているものである。12～26は縄文時代中期後葉のものである。12は口縁部であり、内側にかえしを作っており、下部に横位の隆帯をめぐらせている。13・15・17～20は唐草文系の土器である。いずれも口縁部付近のものであり、13・17・19・20は唐草文を隆帯で貼り付け、施文している。14は口縁部であり、くの字に屈曲し、屈曲部に2条の沈線が施文されている。15は半隆起線文を施し、そこに交互刺突を行なっている。18は沈線により綾杉文を施文しているものである。16は口縁部に横位の隆帯を貼り付け、その後縦位に粘土紐をよって貼り付けている。21～26は曾利式に相当するものである。21・22は縦位の沈線を施文したのち、隆帯を2条貼り付けているものである。23は口縁部であり、隆帯で区画された内側に縦位の沈線を施文している。24～26は沈線が施文された体部である。

4. 縄文時代の石器

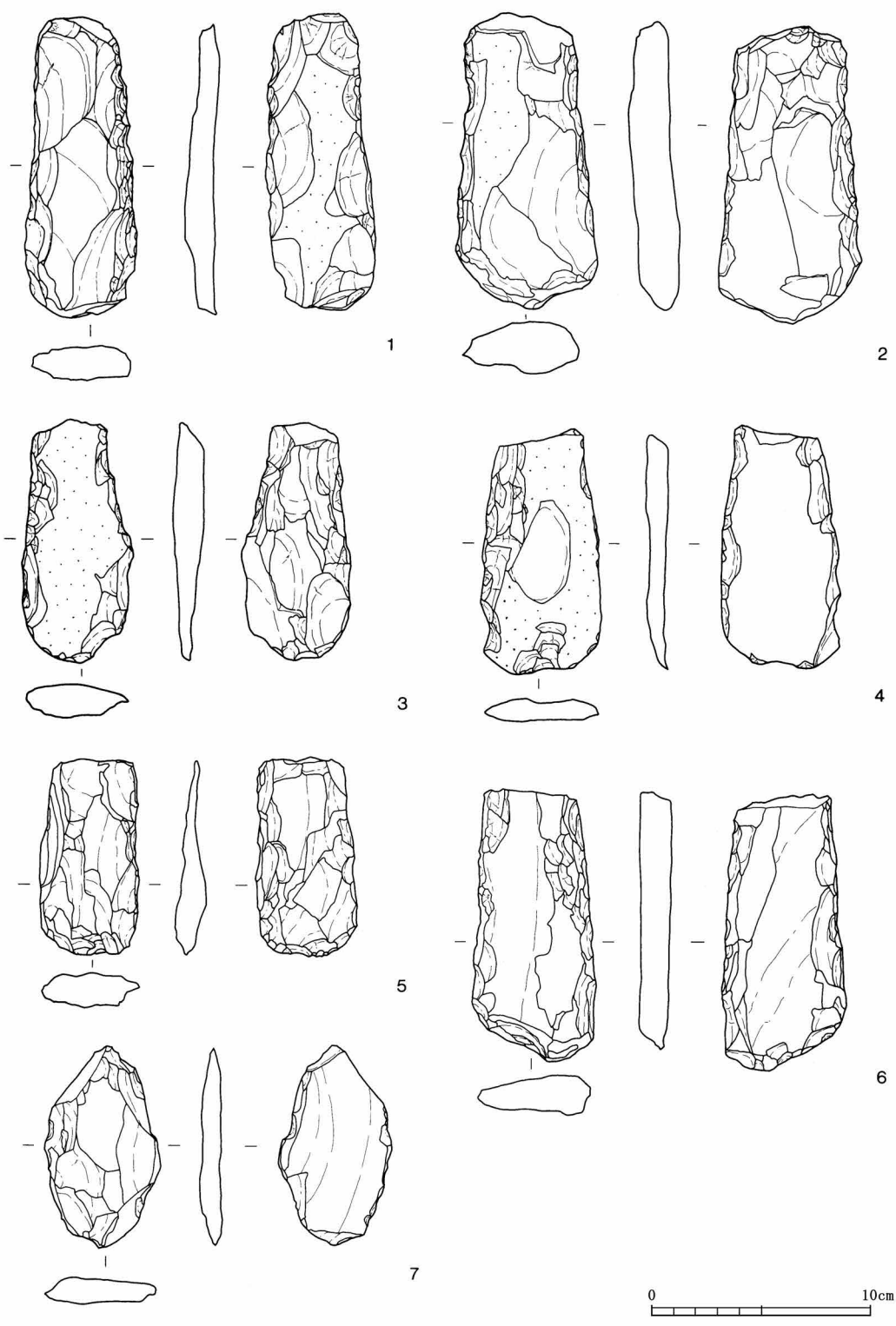
第74図～第77図は縄文時代の石器である。第74図の1～8は石鏃である。1～3は欠損品であり、いずれも凹基のものである。1・2は黒曜石製で3はチャート製である。4～8は未製品であり、4・6は有茎の石鏃を製作する途中であったようである。10は用途不明な石器の欠損品で表裏共に細かく加工している。11は石錐であり、錐部が長く、つまみ部分は円形に仕上げられている。9・12～14・第75図1～9・11は小剥離痕のある剥片である。10・12はピエス・エスキーユである。第76図・第77図1は打製石斧である。いずれも短冊形のものであり、3・4・6・第77図1は上部が欠損しており、7は未製品である。第77図の2・3・5・7は凹み石である。特に2は4面総てが使用されている。3はやや丸みのある石の両側を使用しており、一部敲打されたような痕跡を留める。5にも両面に凹みがある。7は上・下部が欠損しているが、両面に凹みがある。4は周囲を打ち欠いて円形に整形した表面に凹みがある。6は特殊磨石である。 (福島)



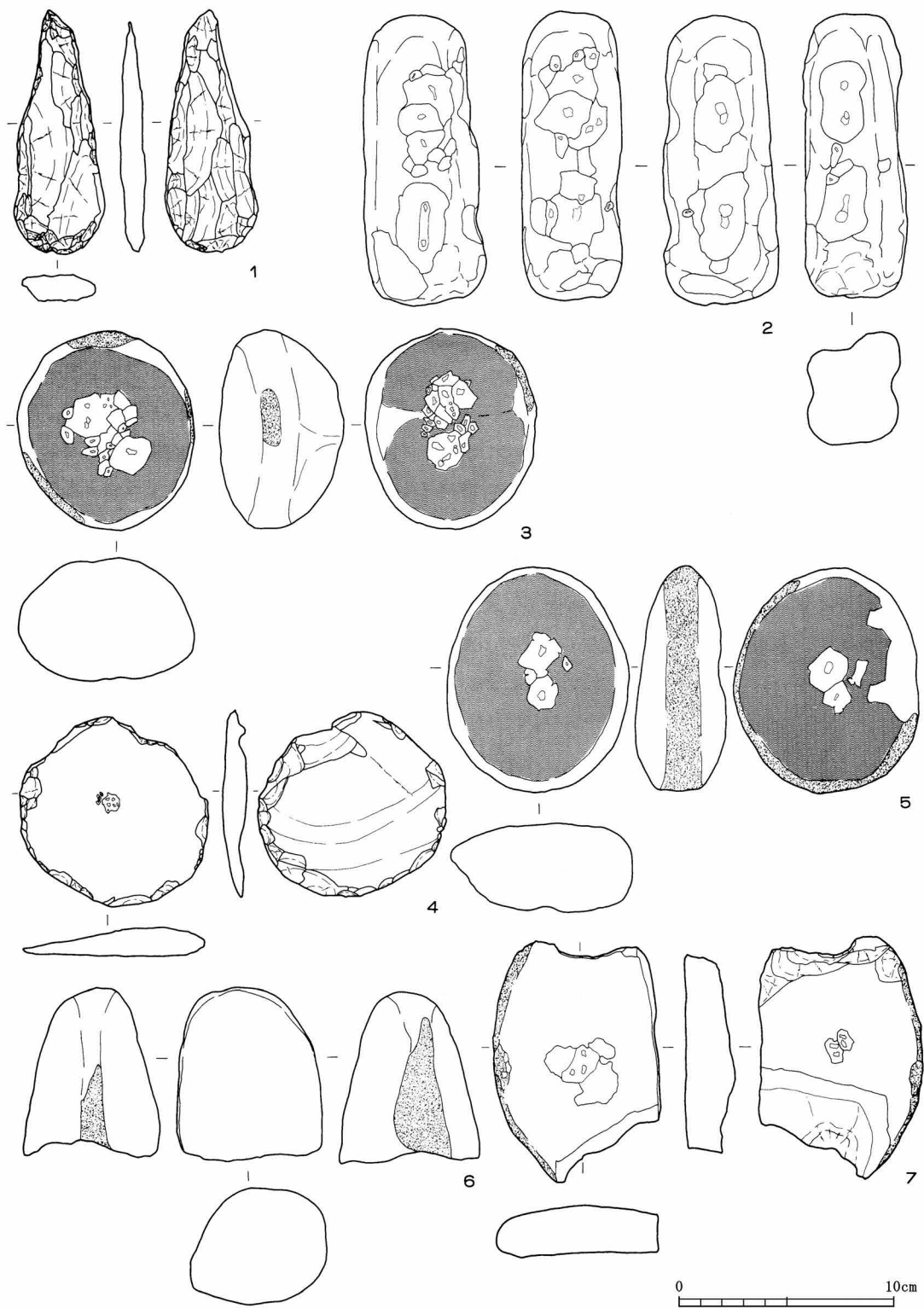
第74図 縄文時代石器実測図(4)



第 75 図 縄文時代石器実測図 (5)



第 76 図 縄文時代石器実測図 (6)



第 77 図 縄文時代石器実測図 (7)

第Ⅵ章 結 語

辰野高等学校の増改築事業に伴う今回の調査は昭和61年の調査に続き第2次、第3次となったが、隣接する滝洞遺跡がやはりテニスコートの造成により発掘調査されており、この遺跡をめぐる資料は徐々に増加してきた。反面遺跡の破壊はそれだけ進んできたわけだが、予想される縄文中期の集落や城館跡の中心部は今日まで開発行為からは免れている。以下、今回の調査の成果について若干の考察を加えまとめたい。

今回の調査では縄文時代早期の小竪穴6基が出土したが、内1基は前期の可能性のあるものの、この時期の遺構としてはまとまった資料となった。県下ではほぼ同じ時期の小竪穴が発掘された遺跡として駒ヶ根市舟山遺跡(註7)があり、最近の発掘では塩尻市堂の前遺跡(註8)、南佐久郡佐久町後平遺跡(註9)などが知られる。舟山遺跡では35基の小竪穴が3群に分布し、各群には「ねぐら」としての竪穴以外に、炉穴、貯蔵穴の機能をもった小竪穴1基ずつが含まれると考察されている。(註10)また、堂の前遺跡では36基の小竪穴が発見され、内5基が早期の土器を出土しているほか、早期後半～末の竪穴住居址5基と集石2基がある。後平遺跡では早期末～前期初頭の竪穴住居址2基とともに、早期後半の土坑35基が出土している。土坑の用途については、狩猟用落し穴、墓墳、それに貯蔵穴などが想定されているが、形態的には様々な形状のものが含まれている。その内いわゆるタライ状の土坑については、本遺跡の例に近似する小竪穴状のものである。

このように、今回この遺跡から出土した小竪穴は、これらの遺跡の例と類似する点はいくつかあるが、本遺跡の場合注目されるのは、小竪穴群に近接して2ヵ所の焼土があることである。焼土と言っても、焼土はわずかで、壁の焼けた掘り込みを伴うもので、炉址と考えられる遺構である。帰属する時期が判断可能な遺物が出土しなかったことから断定はできないが、早期後半の所産であることも十分考えられる。とすると、炉址(焼土)と小竪穴とが同時存在していた場合、小竪穴の機能は何であっただろうか。小竪穴は、壁はわずかに張り出すものの、ほぼ垂直に近く、床面はきわめて堅い。また3号、4号小竪穴では、壁際から中央部にかけて、わずかな高まりのある非常に堅い床面が発掘時に観察されており、小竪穴内の小穴も簡易な上屋を支える柱状のものとするならば、出入口が定まった構造を持つ住居であった可能性は考えられないだろうか。この場合の住居とは、調理、煮沸等の機能を竪穴内に持たないもので、屋外に炉を設けたものと考えておきたい。従って、この地域では小竪穴が早期後半の居住スタイルであった可能性があり、早期末の飯島町カゴ田遺跡の住居址、前期初頭の宮田村中越遺跡の集落へと変遷した流れをとらえられるのではなかろうか。

ところで、堂の前遺跡の集石遺構は、礫が火熱による赤色化であるか判断できないことから、集石炉という断定は難しいとしている。本遺跡においても、2次、3次調査では3ヵ所の集石が出土しているが、内1基には下部に土坑が伴っていたものの、土坑底部に石組みを持ち、土坑内

に礫が充満する集石炉の形状とは異なるものであった。3基ともその礫が焼けているか否かについて詳細に観察できなかつたため、2ヵ所の焼土（炉址）との関係は不明だが、第3号、第4号集石からは早期後半の土器も出土しており、小竪穴と同時期である可能性もある。なお、2ヵ所の焼土（炉址）内からは焼礫数個が出土している。

さて、早期後半のこれらの遺構の内、第2号小竪穴内からは器形復原可能な土器1個体が発掘されたほか、遺構外からもこの時期の土器多数が出土したが、それらの土器の編年的な位置については、鶺鴒ヶ島台式及び茅山下層式期が考えられる。細分については、第3号小竪穴と第4号小竪穴の重複関係から、第10図9が、同2～6の土器に先行するらしいという時間的な先後関係が単純に考えられそうであるが、いずれの土器も覆土内からの出土であることを考慮すれば判断はできない。しかし、早期後半の遺物としてはかなりまとまった量が出土しているわけで、鶺鴒ヶ島台式相当とした土器についても分類、細分ができそうで、編年上この時期の貴重な資料となった。早期末葉の土器群については、『神奈川考古』のシンポジウムにより、関東、中部、東海地方の編年が明らかにされてきた（註11）が、早期中葉以後の編年に関しても、最近共同研究やシンポジウムが行なわれている。（註12）また、県内でも早期後半～末葉にかけて、新たな資料による分類や編年試案が発表されてきている（註13）が、今回上の山遺跡で得られた早期の土器の分類、検討については、機会をあらためて行ないたいのでご了承いただきたい。なお、早期の遺物の内、図版32に示した貝殻腹縁文の土器は非常に類例が少ないと思われるもので、近くは駒ヶ根市舟山遺跡第10号竪穴址内から類似する大形破片が出土している。この土器は、波状口縁直下に平行して2列の貝殻腹縁文が施文され、地文に貝殻条痕が見られるものだが、舟山遺跡の報告では粕畑式類似土器として扱っている。また、後平遺跡でもJ3号住居址内から、貝殻条痕文の上に貝殻腹縁文が施文されている土器が出土しているが、押型文土器以降の早期土器が混じり合っており、明確な位置づけは困難である。今回の調査区内からは押型文土器や田戸系の土器は出土せず、また早期末の粕畑式土器も見られないことや、打越式とも異なる点があることから、出土している他の早期土器と並行する鶺鴒ヶ島台式～茅山下層式の時期内におさまりそうであるとしておきたい。今後検討を要する遺物で、またこの遺跡出土の早期土器編年のひとつの鍵ともなりそうである。

続いて縄文時代前期末葉については、多量の土器と不明瞭ながら1基の住居址が出土したわけだが、第1次調査でも炉と思われる焼土を伴った不整形な住居址が発見されており、遺跡内の近接する地点で2基の住居址が存在していたことになる。この住居址のほかは、土坑1基が出土しただけであるが、住居址と関連しそうな施設であろう。段丘崖に近いこうした傾斜地にこの時期の居住地が求められたのだが、上の山遺跡の北西方300mにある楡沢山麓遺跡もほぼ同時期の遺跡で、多量の遺物が採集されており、立地の類似したこのふたつの遺跡が与える課題は多そうである。なお、前期末の遺物が多かった割には遺構は少なく、調査開始時の表土除去作業が包含層内まで達したことも一因かと思われ、今後注意しなければならない点である。

さて、第1次調査に続き中期の住居址も1基出土し、合計3基となった。いずれも中期末の集落を構成するものだが、今回の第4号住居址は、この台地南寄りの位置に想定される集落の中心

部からは離れて傾斜地に立地しており、ほぼ同時期と思われる土偶が近くから出土している点も合わせて考えなければならない住居址と思われる。

最後に、城館跡の遺構として腰曲輪と考えられる施設の出土をみたわけだが、第1次調査発見の空堀と合わせ、「天白の城」を解明する有効な資料を得たことになる。しかし、空堀にくらべ今回は遺構内からの遺物の出土はきわめて少なく、年代を正確に決定することは困難である。前回の空堀内出土の内耳土器については16世紀のものと考えたわけだが、もともとこの天白の城には、台地北側の滝洞川から西方農免道路付近にまで達する空堀もあり、山麓には「要害」という地名がつく方形台状の土盛りもあって、相当な広がりを持つものであったと思われる。元来館と城の違いは、狭間など攻撃用の設備を持っているか否かによって区別される(註14)という。要害という地名がどの程度当時の姿を伝えるのか疑問だが、文字どおり平時居館に生活し、戦時に要害に籠もるとすれば、かなり施設を整備していたことになるが、はたしてこの天白の城は誰の居城、居館であったのだろうか。

『伊那温知集』によれば、矢島勘六、勘兵衛父子が天白の城に居を構えていたと伝えており、上の山遺跡の地が天白の城に相当すると考えてきたが、矢島父子が居たのは弘治～天正の頃というから、16世紀中ごろから末にかけての頃である。しかし、この天白の城を築いたのははたして矢島氏なのかどうか。矢島勘兵衛はいわゆる上伊那十三騎のひとりで、寛永13年(1636)高遠城主保科正之が出羽山形へ転封する際に従って行ってしまったのだが、この寛永13年まで天白の城に在城していたかどうか。さらに、その年まで在城していたとすれば、その後この天白の城はどうなったのかと次々と疑問が生じる。伊藤富雄氏によれば、天正3年(1575)の宮木諏訪神社再建棟札の裏の12名の造宮関係者の中にある春日河内守は宮所郷の代官であり、この春日氏の居城が天白の城で、天正10年の織田軍による高遠城落城の際に春日氏は戦死し、そのあとへ矢島父子が入ったと考えられるとしている。(註15)一方、寛永13年転封の際、やはり上伊那十三騎のひとり樋口七郎右衛門もこれに従って樋口の地を離れ、その屋敷へ矢島五兵衛が住んだとされている(註16)が、矢島勘兵衛とはどういう関係の人物であったのだろうか。いずれにしてもこの天白の城は、おそくとも寛永13年には廃城となった可能性が考えられはしないか。出土陶磁器片等の遺物によるそのあたりの年代的な裏づけがもうひとつはっきりできない点が今後の課題のひとつでもある。

おわりに、終始ご指導を賜った県教育委員会文化課の皆様をはじめ、辰野高校や松田建設、それに調査作業に直接従事された皆さんに厚く御礼申し上げます。また、報告書作成の過程で種々ご教示を賜った女屋和志雄、今井宏、関根慎二の各氏に心から感謝申し上げます。(赤羽)

註・参考文献

- 註1 竹瀨修二 1980(昭55) 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第1集
竹瀨修二 1981(昭56) 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第2集
竹瀨修二 1982(昭57) 「辰野における河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第3集
- 註2 竹瀨修二 1983(昭58) 「辰野における河岸段丘の面区分および発達史—地質構造を中心として—」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第4集
- 註3 春日琢美 1929(昭4) 「伊北地方及び付近の地形地質断片(三)」 『郷土』第3巻3号
- 註4 長野県教育委員会 1973(昭48) 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その1(昭和47年度)』
- 註5 伊藤富雄 「上伊那十三騎」 『伊藤富雄著作集』第4巻—戦国時代の諏訪— 1980(昭55)
- 註6 上伊那誌編纂会 1965(昭40) 『長野県上伊那誌』第2巻歴史篇
- 註7 駒ヶ根市教育委員会 1971(昭46) 『舟山遺跡緊急発掘調査報告—第I次および第II次調査』
" 1972(昭47) 『羽場下・舟山—緊急発掘調査報告書』
- 註8 塩尻市教育委員会 1985(昭60) 『堂の前・福沢・青木沢—塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』
- 註9 佐久町教育委員会ほか 1987(昭62) 『後平遺跡』
- 註10 林茂樹 1983(昭58) 「舟山遺跡」 『長野県史考古資料編』主要遺跡(中・南信)
- 註11 神奈川考古同人会 1983(昭58) 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」 『神奈川考古』第17号
- 註12 群馬県考古学研究所ほか 1988(昭63) 『第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題講演・発表要旨』
縄文文化検討会 1989(平1) 『第4回縄文文化検討会シンポジウム 東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』
- 註13 百瀬忠幸 1988(昭63) 「八窪遺跡—縄文時代早期後半～末葉の土器群について」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2—塩尻市内その1—
島田恵子 1987(昭62) 「遺物」註9所収
- 註14 村田修三ほか 1981(昭56) 『日本城郭大系』別巻II—城郭研究便覧—
- 註15 伊藤富雄 1960(昭35) 「庄園辰野・平出・宮所の研究」 『伊那路』第4巻5～6号
- 註16 註6に同じ



1. 第2次調査昇降口棟区全景



2. 第1号～4号小堅穴

图版 2



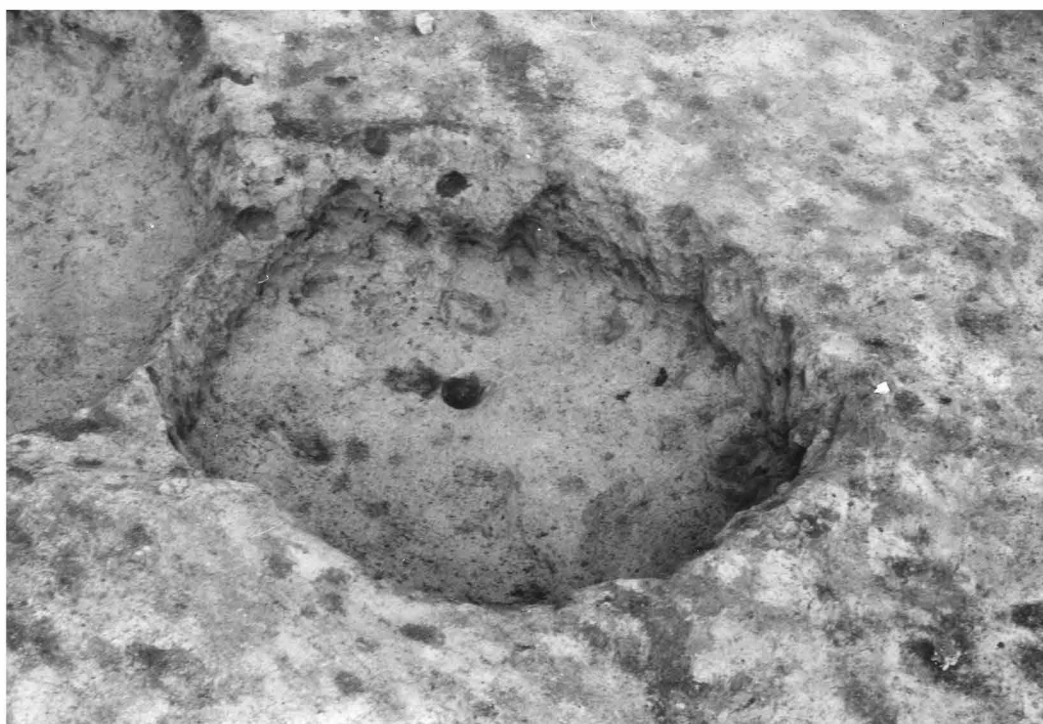
1. 第1号小竖穴



2. 第2号小竖穴



1. 第3号小竖穴

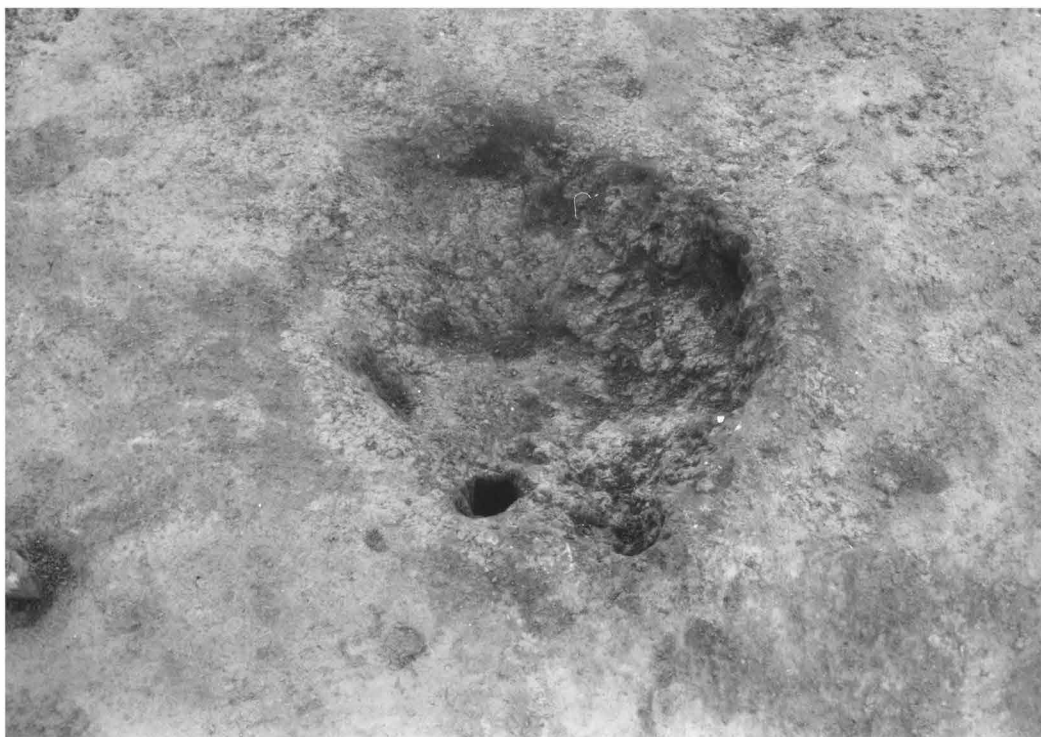


2. 第4号小竖穴

图版 4



1. 第5号小竖穴



2. 第1号烧土

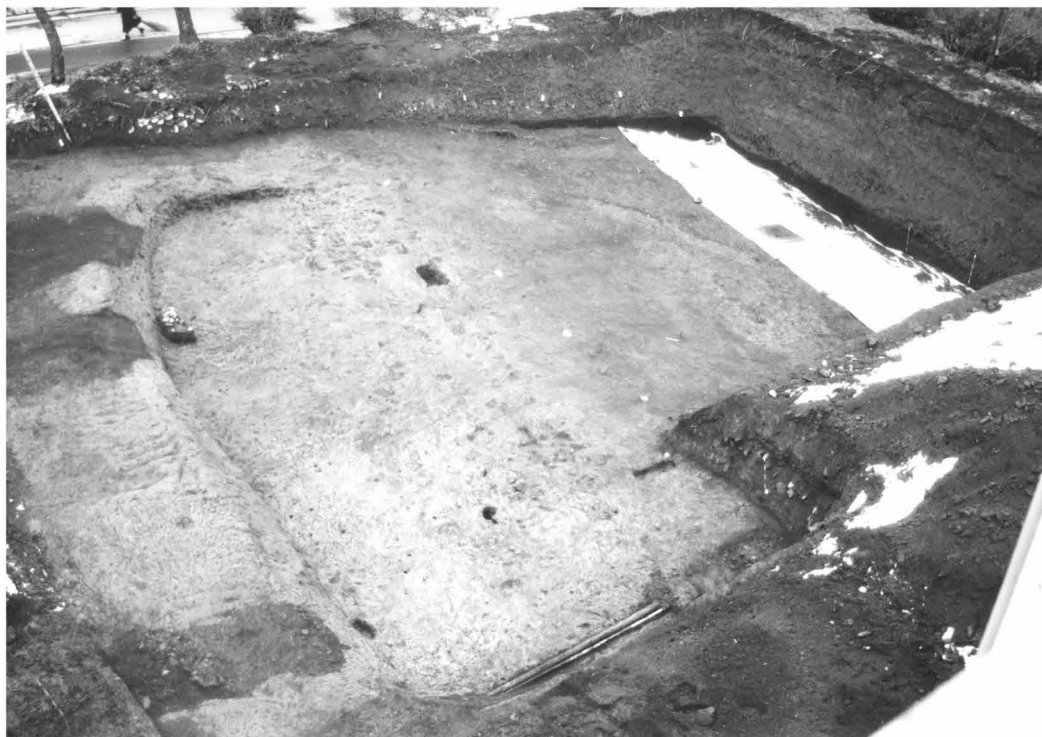


1. 小ピット群

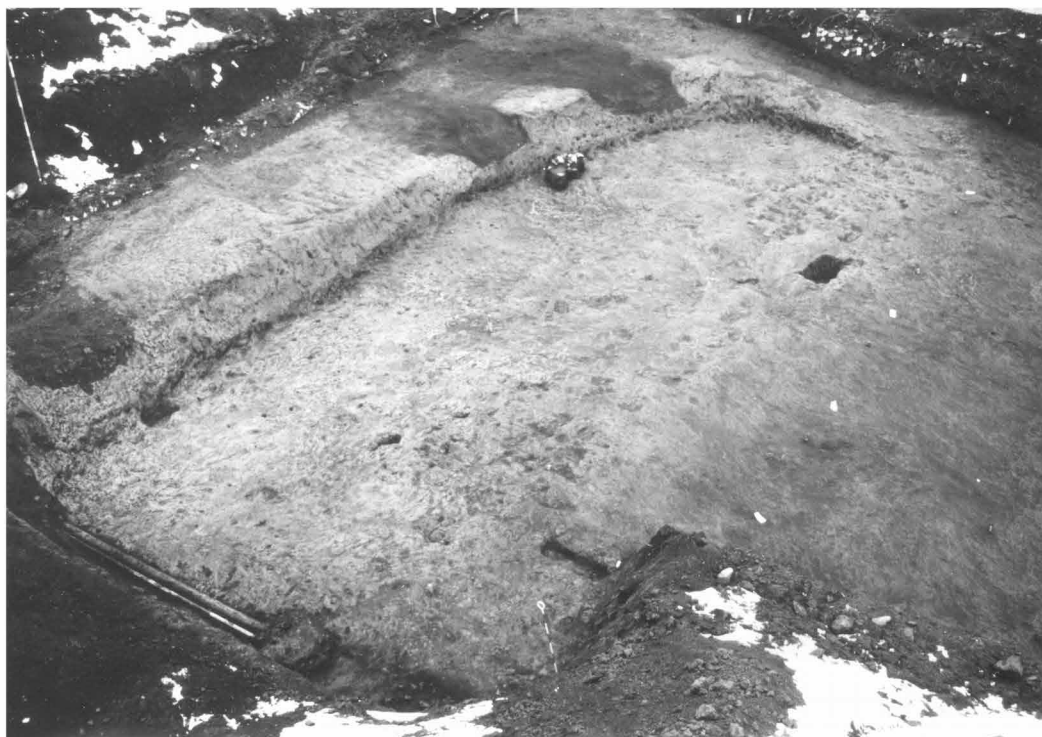


2. 第2号集石

図版 6



1. 第2次調査音楽棟区全景



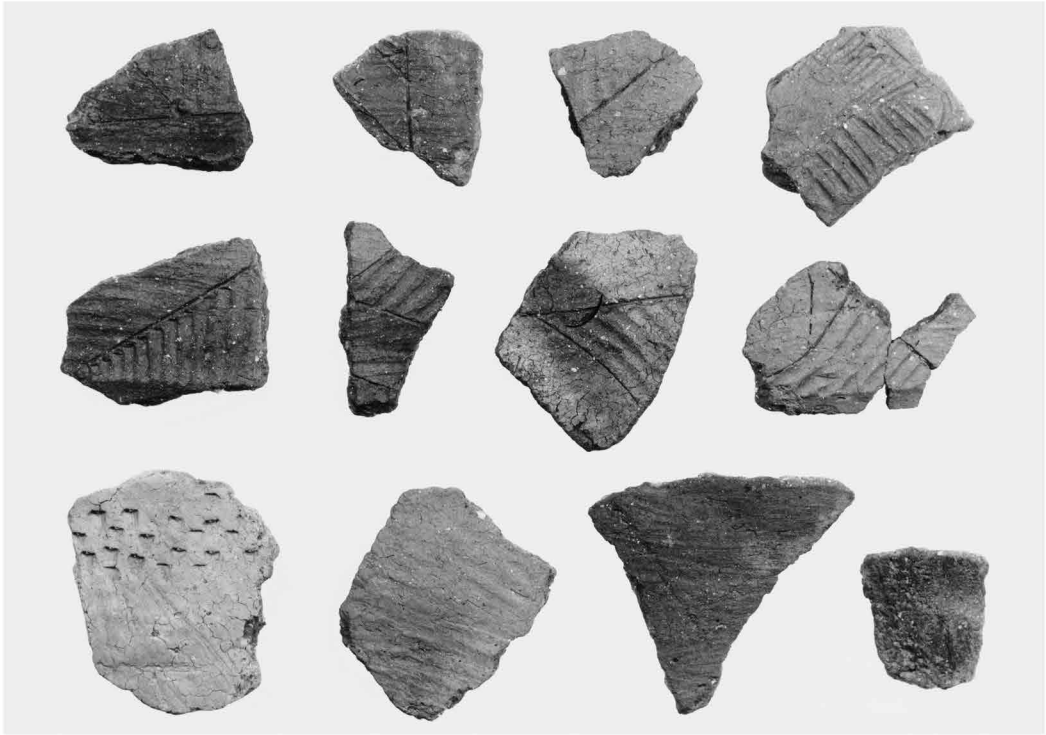
2. 第1号腰曲輪全景（東南から）



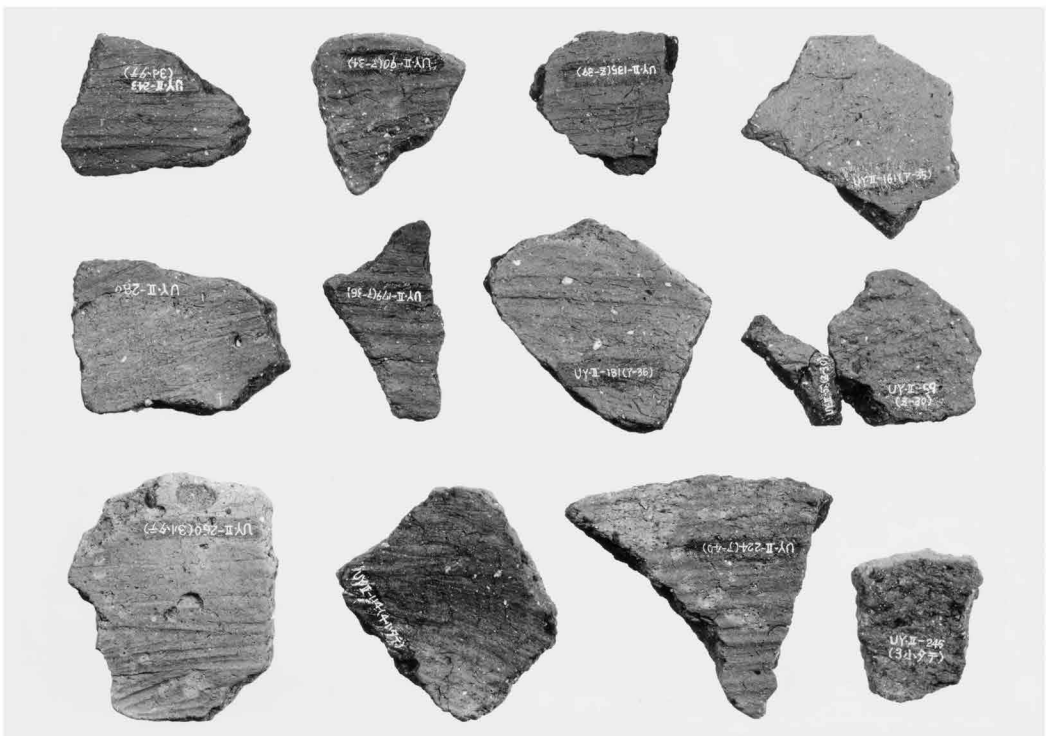
1. 第1号腰曲輪全景（北から）



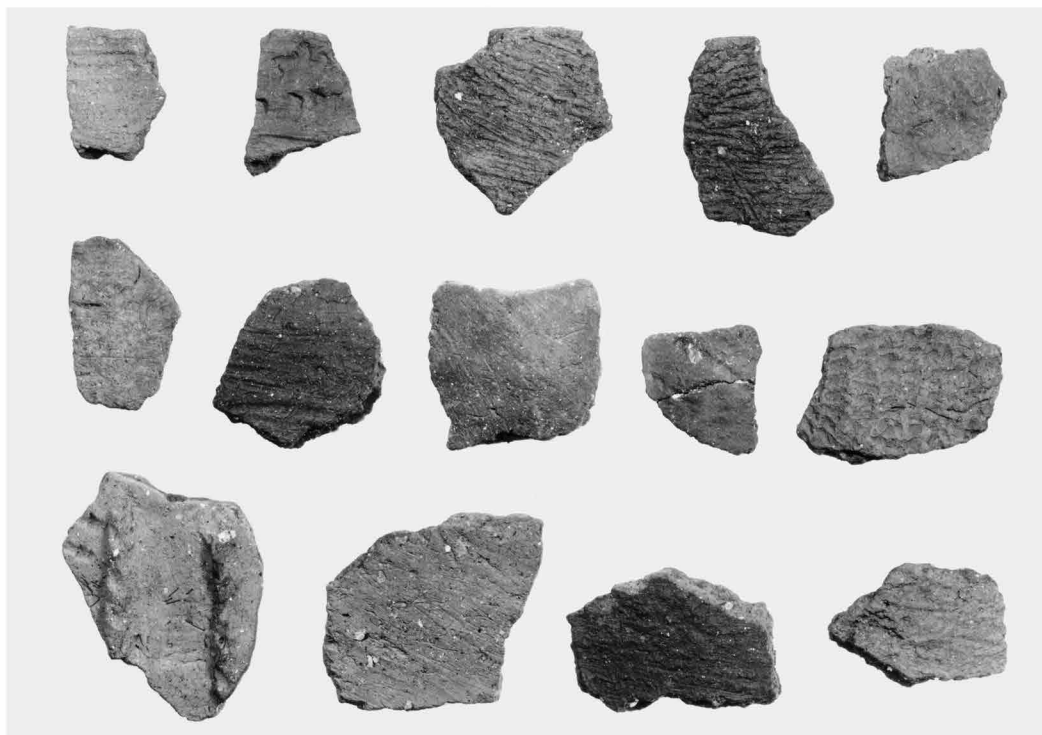
2. 第5号小堅穴と不整形ピットなど



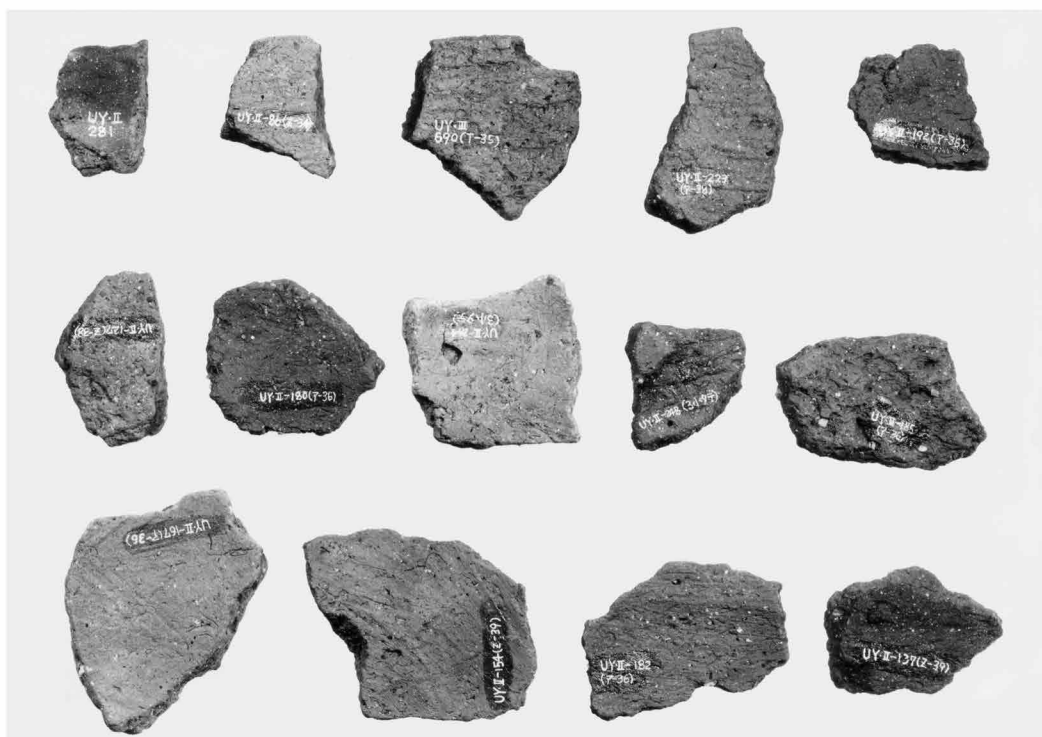
1. 縄文時代早期の土器 (1) 表



2. 縄文時代早期の土器 (1) 裏



1. 縄文時代早期の土器 (2) 表

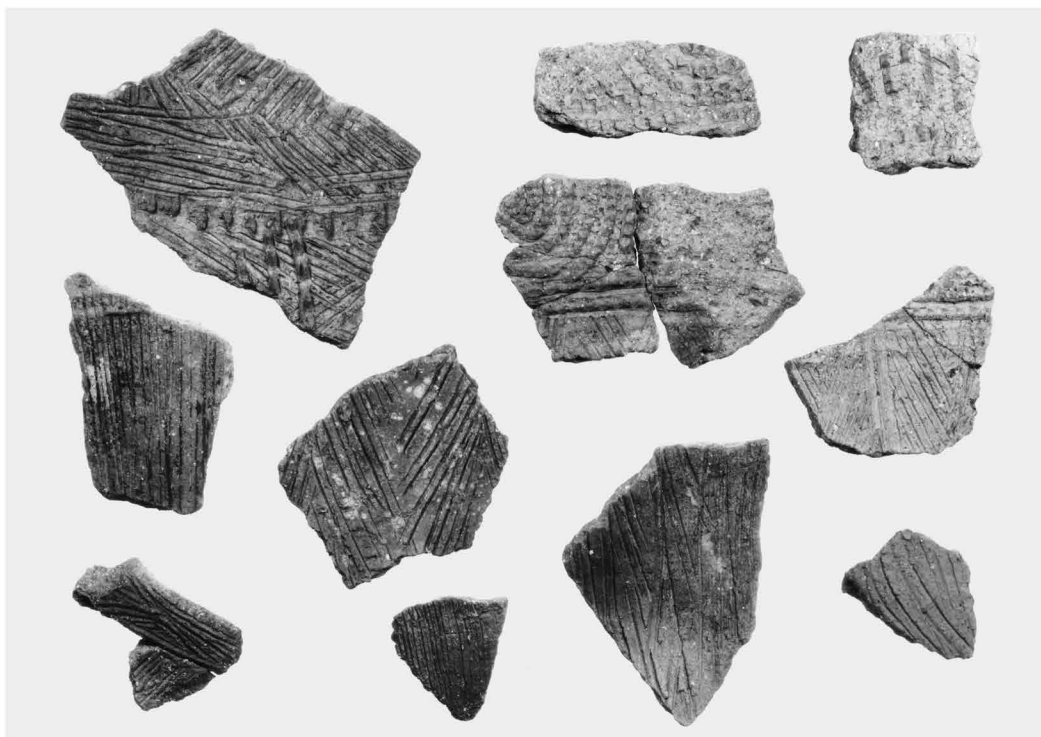


2. 縄文時代早期の土器 (2) 裏

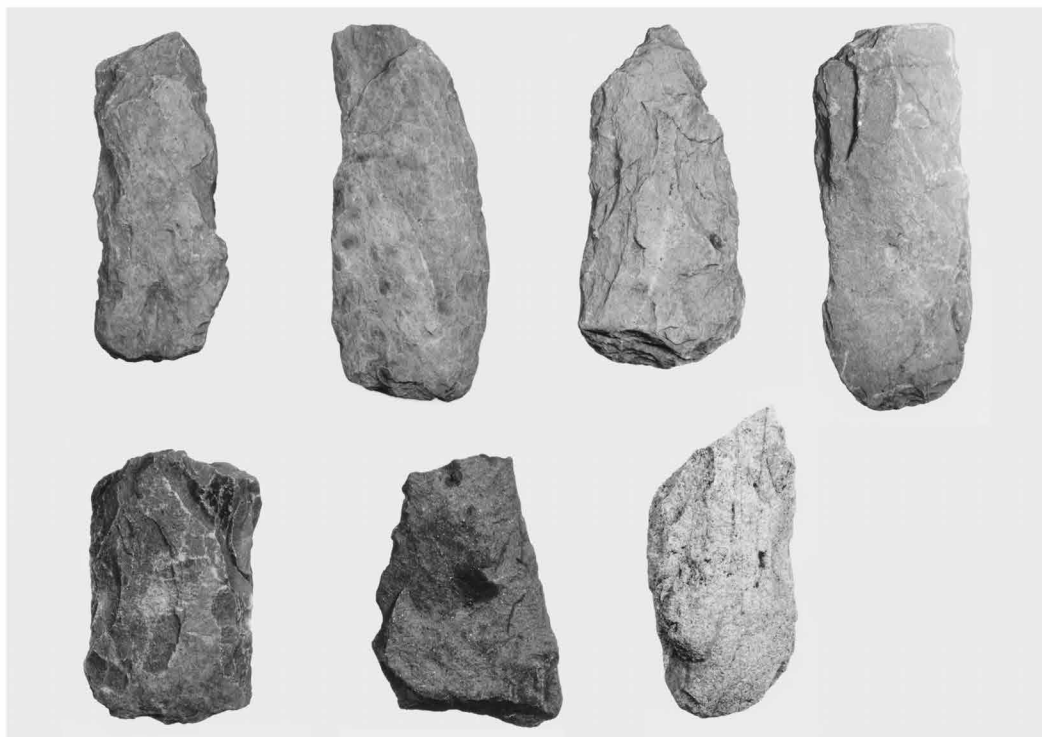
図版 10



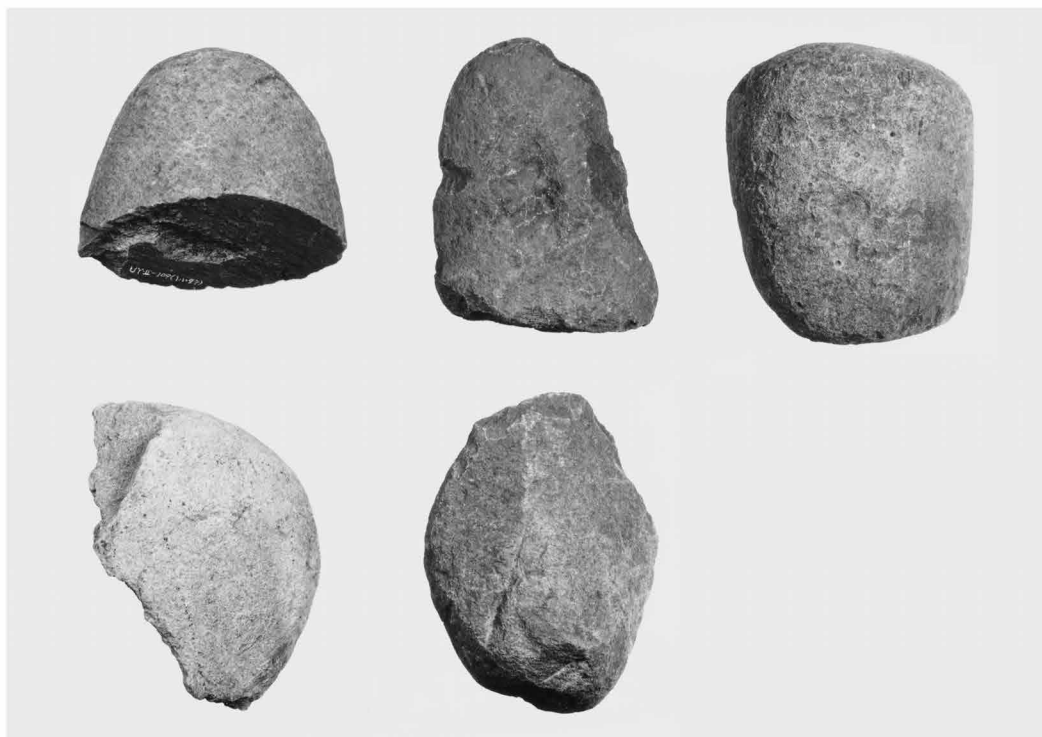
1. 縄文時代早期の土器（第2号小竪穴出土）



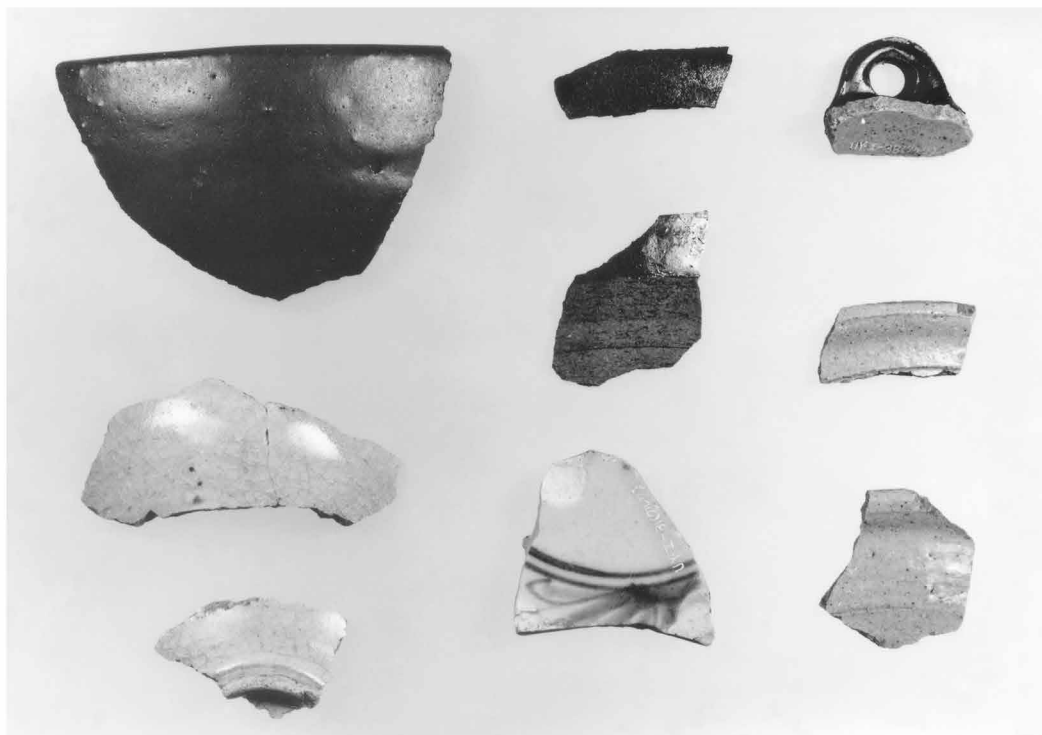
2. 縄文時代前期の土器（1）



1. 縄文時代の石器 (1)



2. 縄文時代の石器 (2)



1. 中世以降の陶器



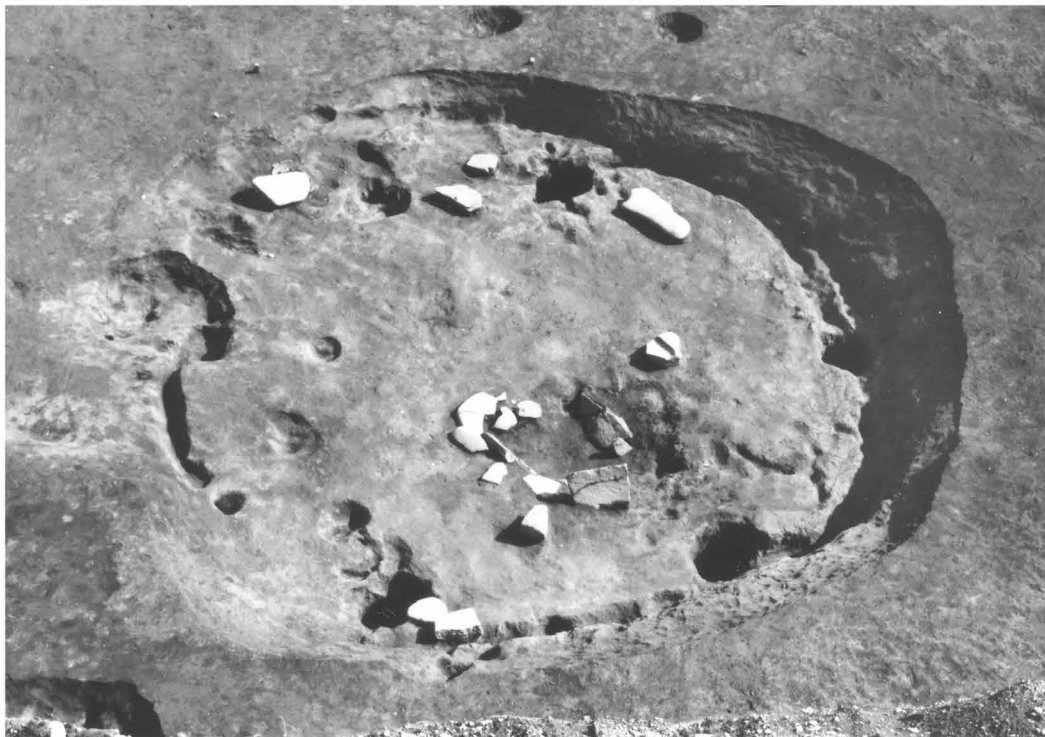
2. 発掘調査風景（腰曲輪の発掘）



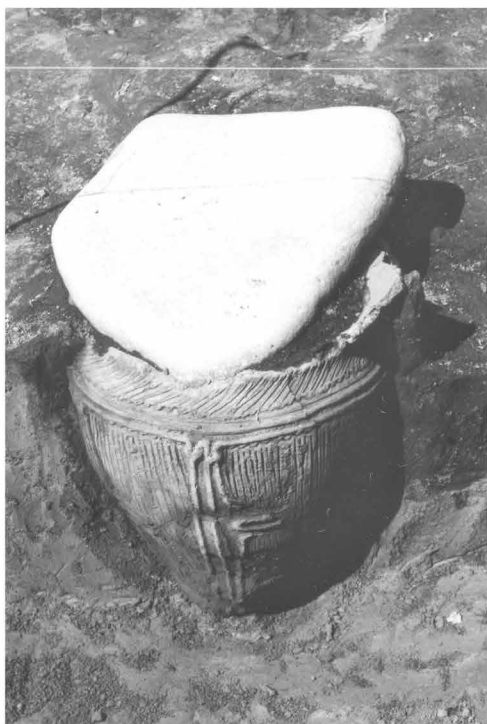
1. 第3次調査区全景（南から）



2. 第3次調査区全景（北から）



1. 第4号住居址



2. 同埋甕



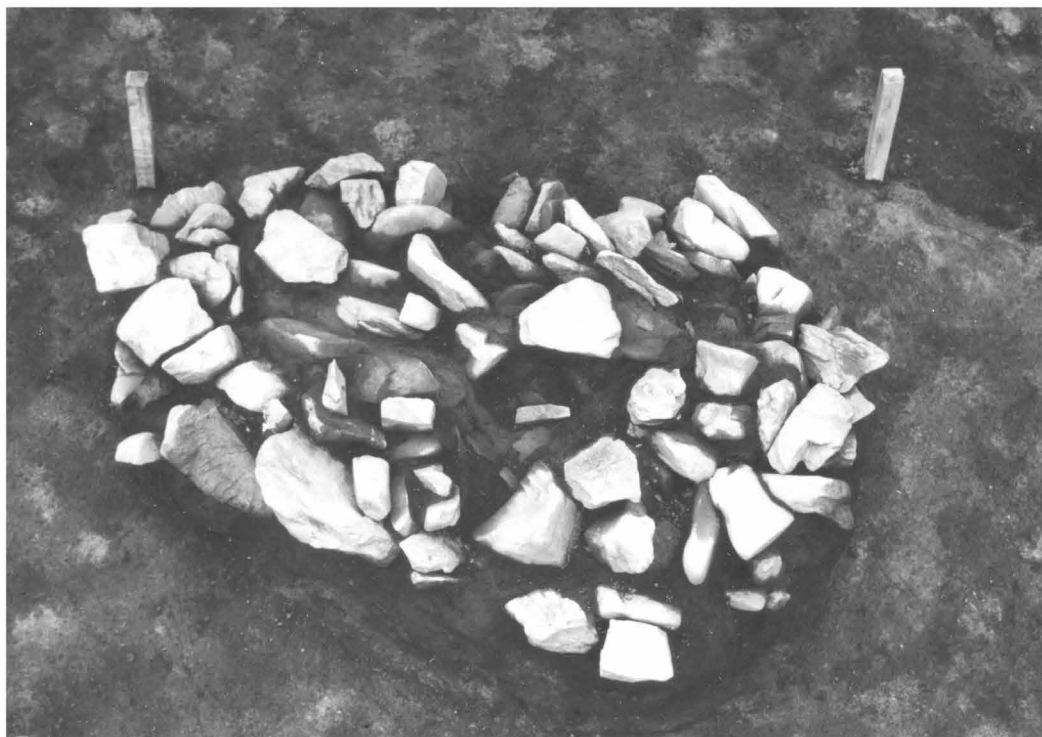
2. 同 炉



1. 第5号住居址



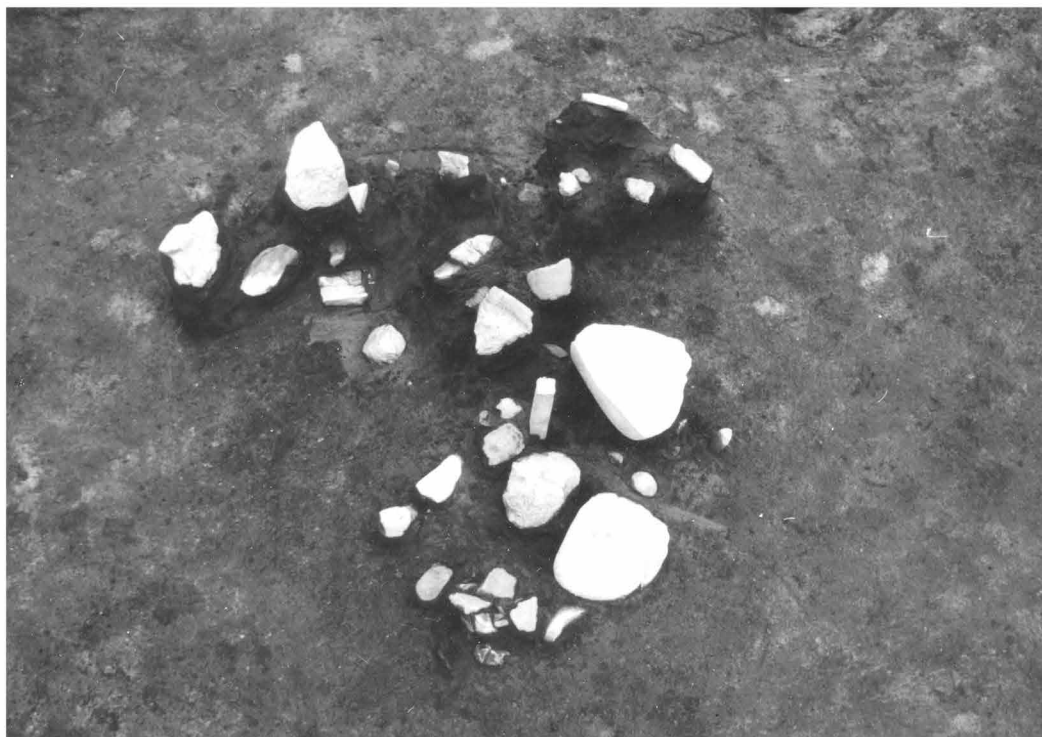
2. 第2号ローム・マウンド



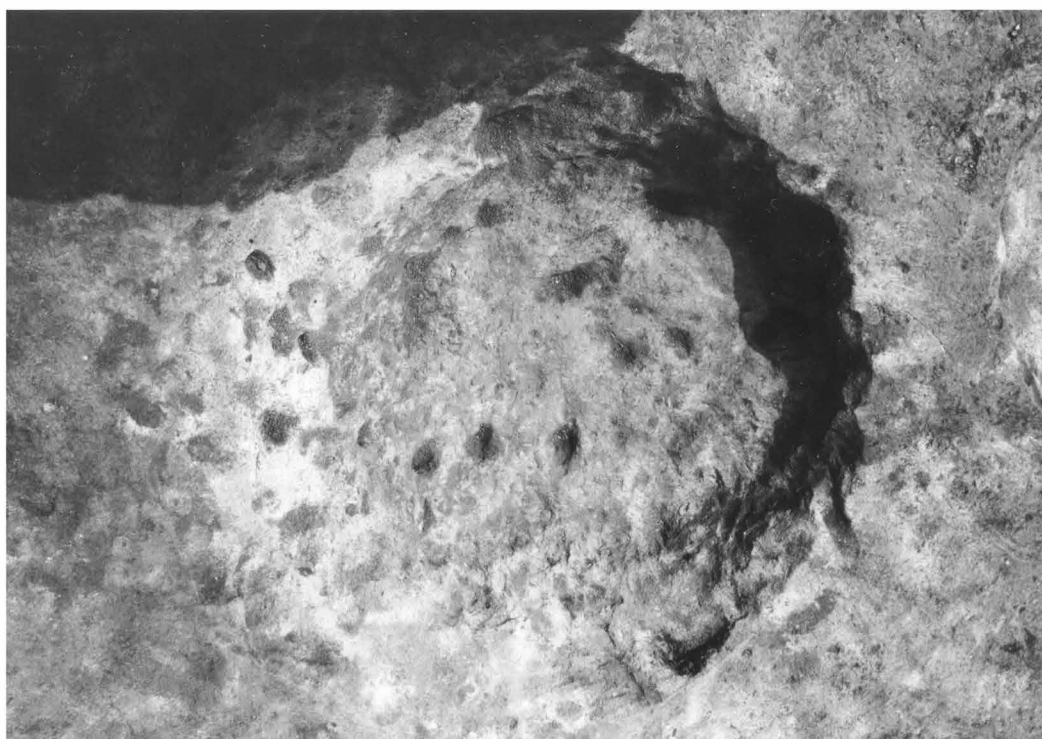
1. 第3号集石



2. 第3号集石下の土坑



1. 第4号集石



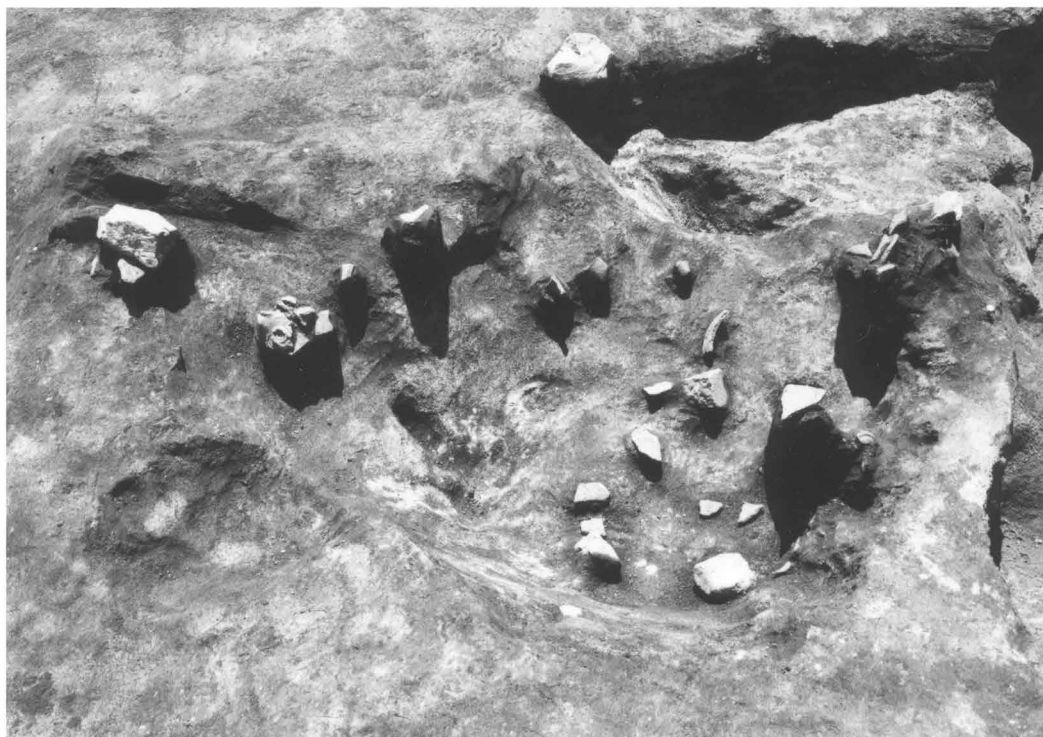
2. 第15号土坑



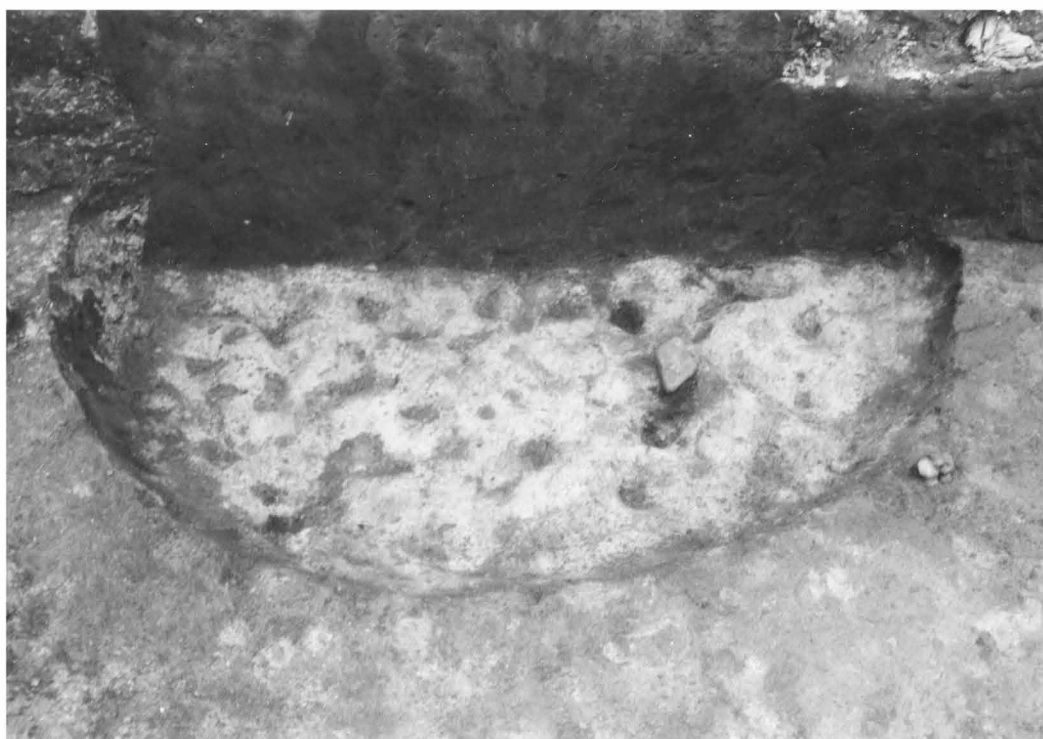
1. 第 17 号土坑



2. 第 23 号土坑



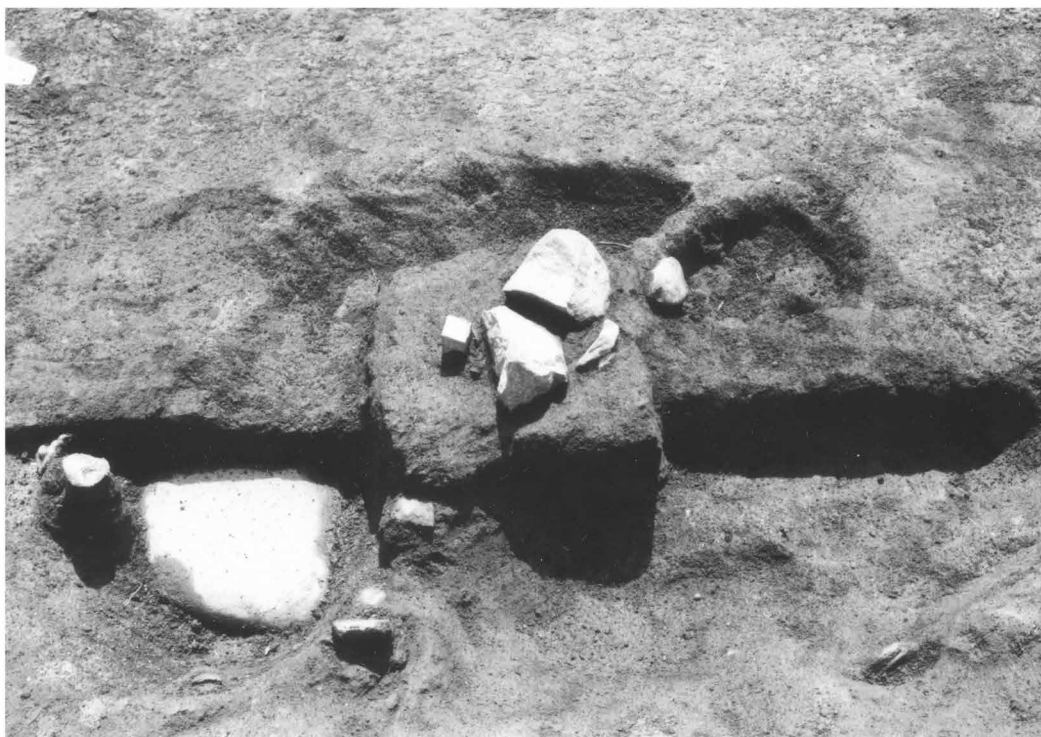
1. 第 25 号土坑



2. 第 29 号土坑



1. 第 30 号土坑上面の礫と土器



2. 第 31 号土坑覆土中の礫



1. 第4号住居址出土埋甕



2. 第4号住居址出土土器



1. 第4号集石出土土器



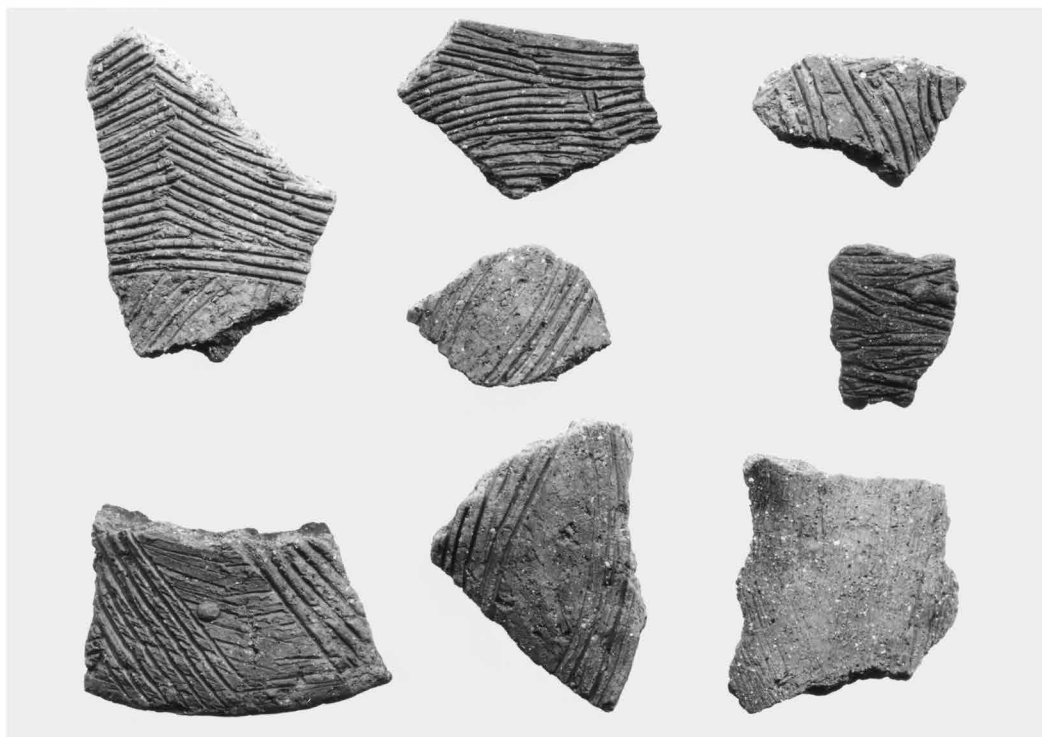
2. 第25号土坑出土土器



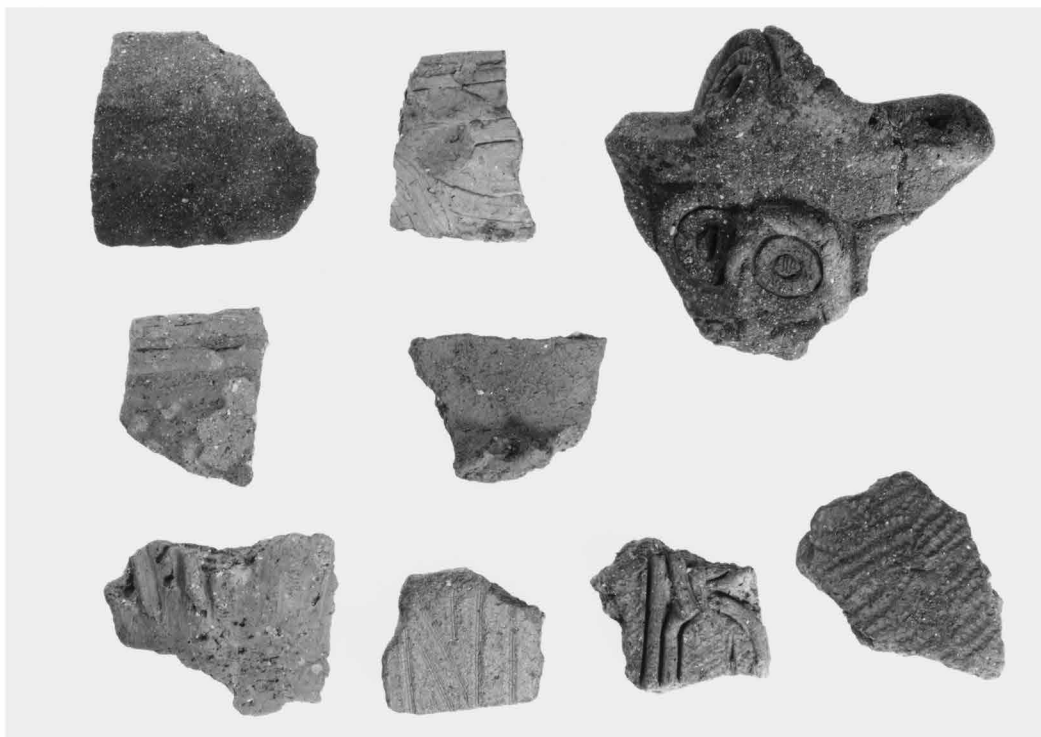
3. 第29号土坑附近出土土偶



1. 第5号集石出土土器



2. 第15号土坑出土土器



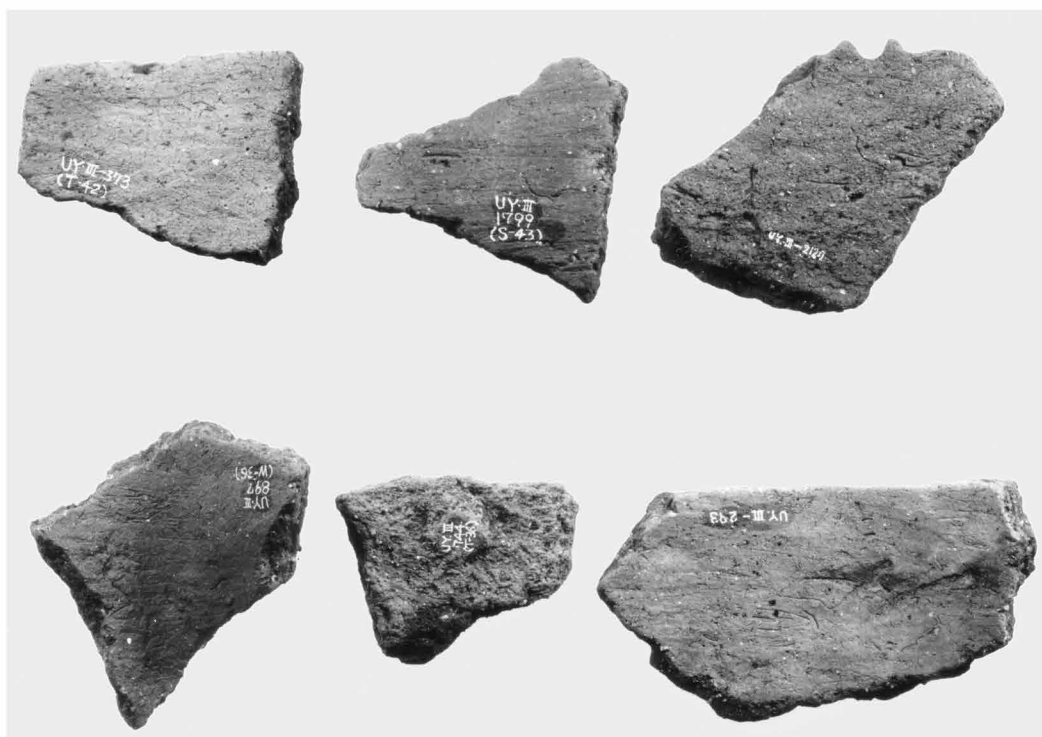
1. 第 25 号土坑出土土器 (1)



2. 第 25 号土坑出土土器 (2)



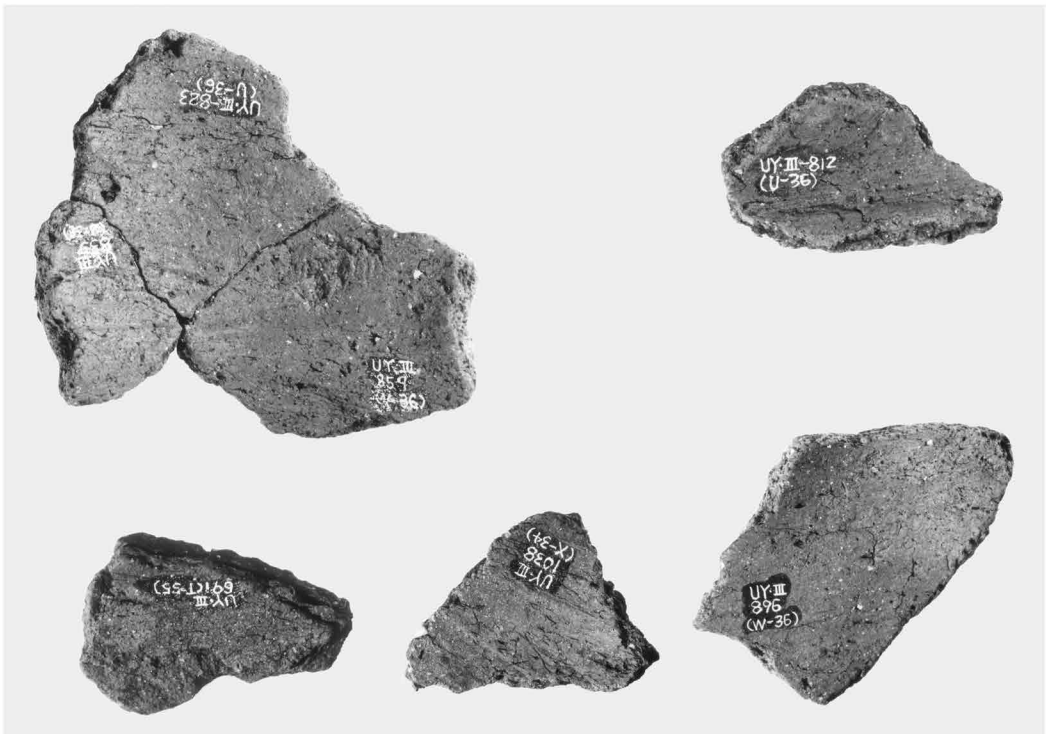
1. 縄文時代早期の土器 (3) 表



2. 縄文時代早期の土器 (3) 裏



1. 縄文時代早期の土器 (4) 表



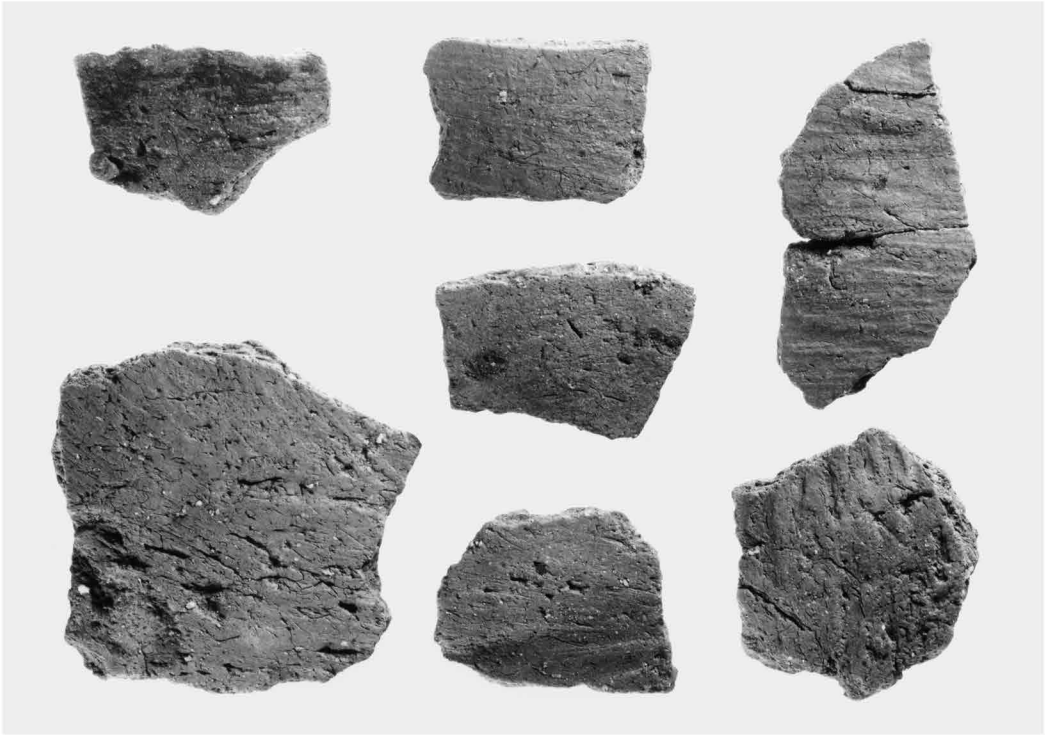
2. 縄文時代早期の土器 (4) 裏



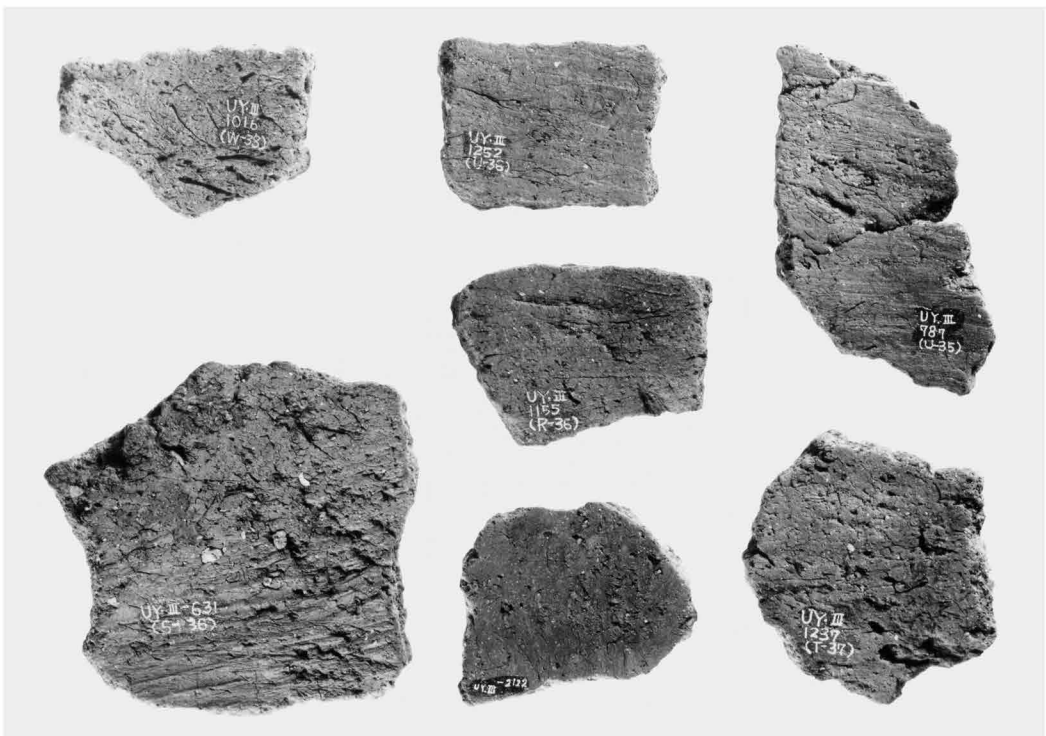
1. 縄文時代早期の土器 (5) 表



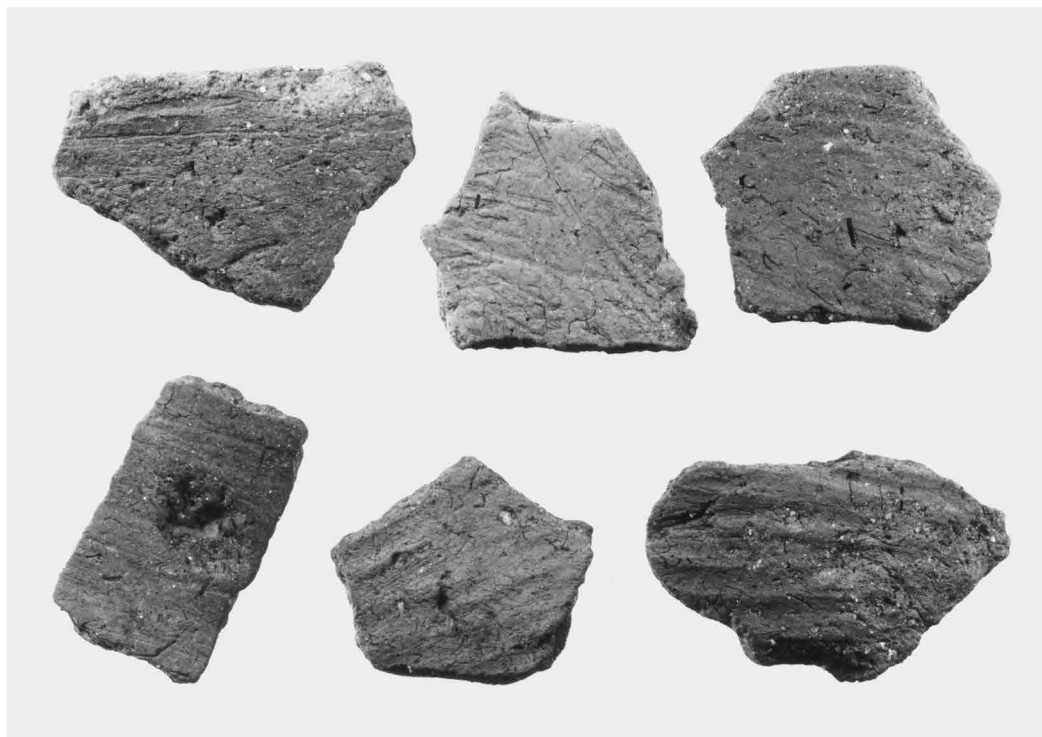
2. 縄文時代早期の土器 (5) 裏



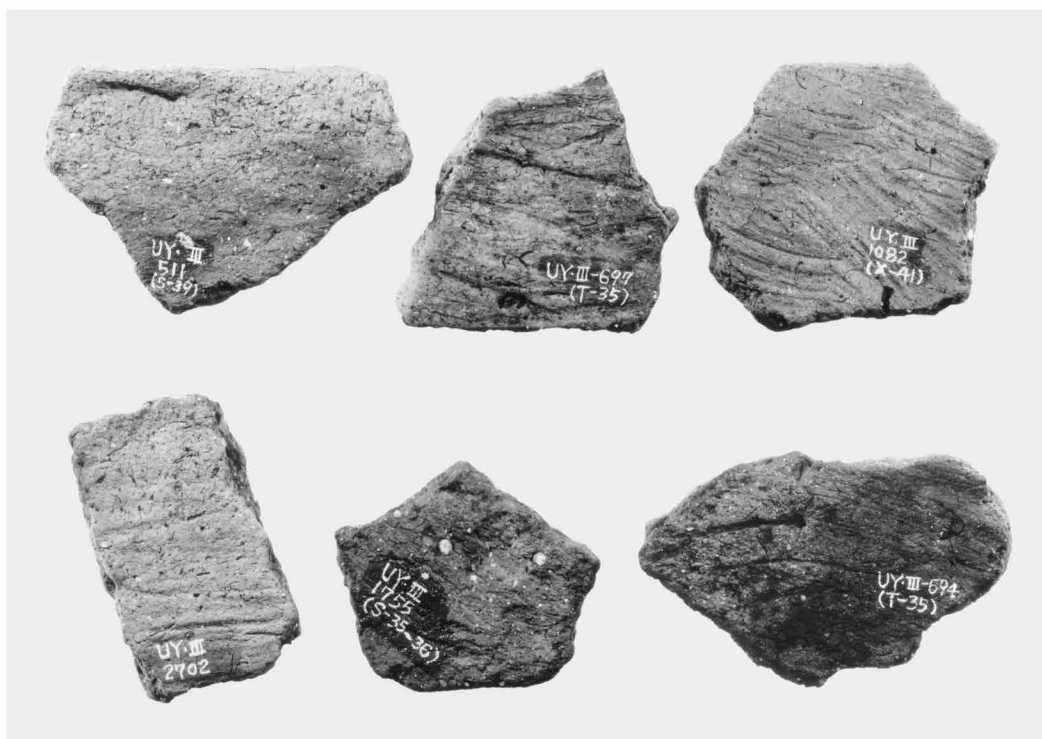
1. 縄文時代早期の土器 (6) 表



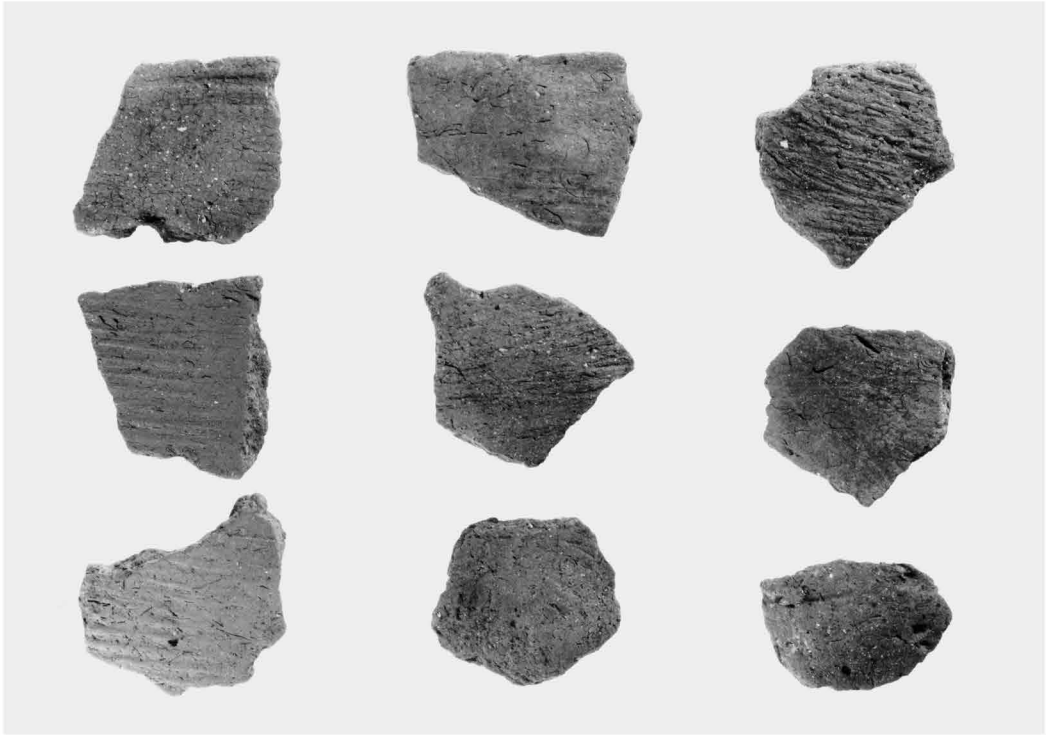
2. 縄文時代早期の土器 (6) 裏



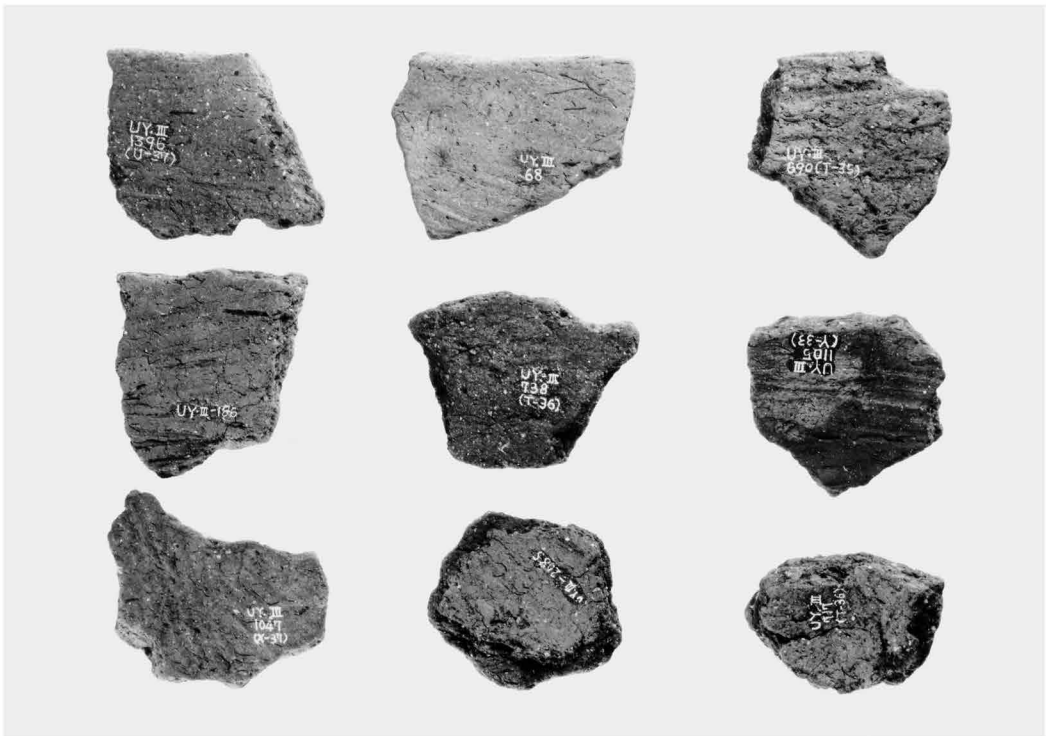
1. 縄文時代早期の土器 (7) 表



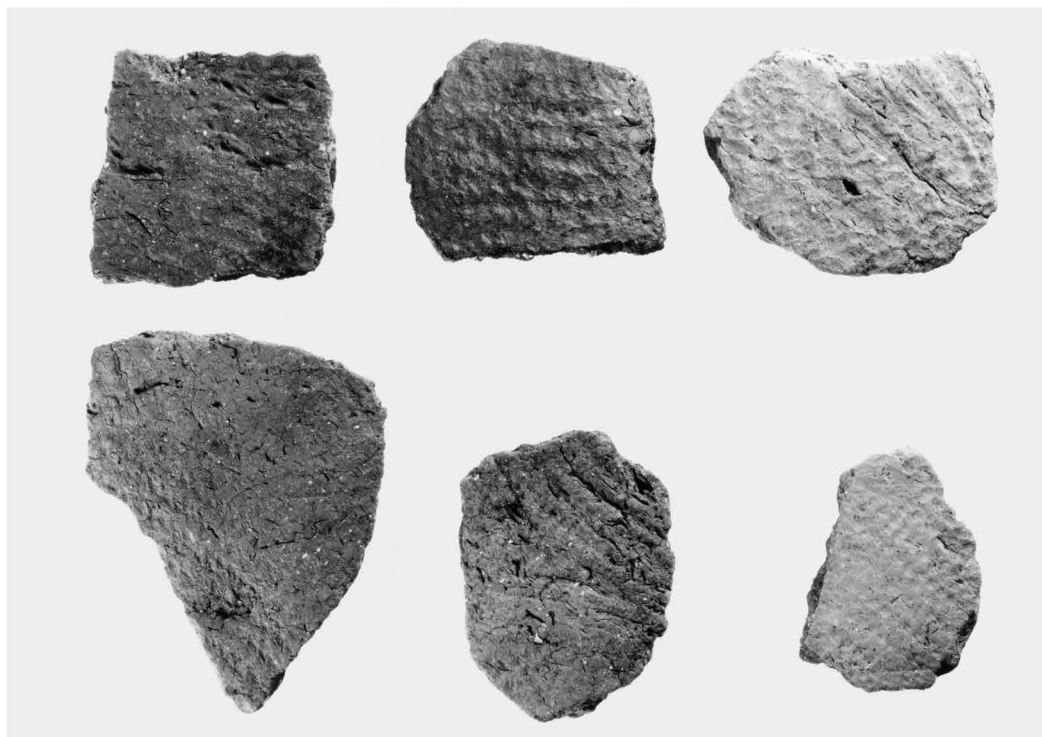
2. 縄文時代早期の土器 (7) 裏



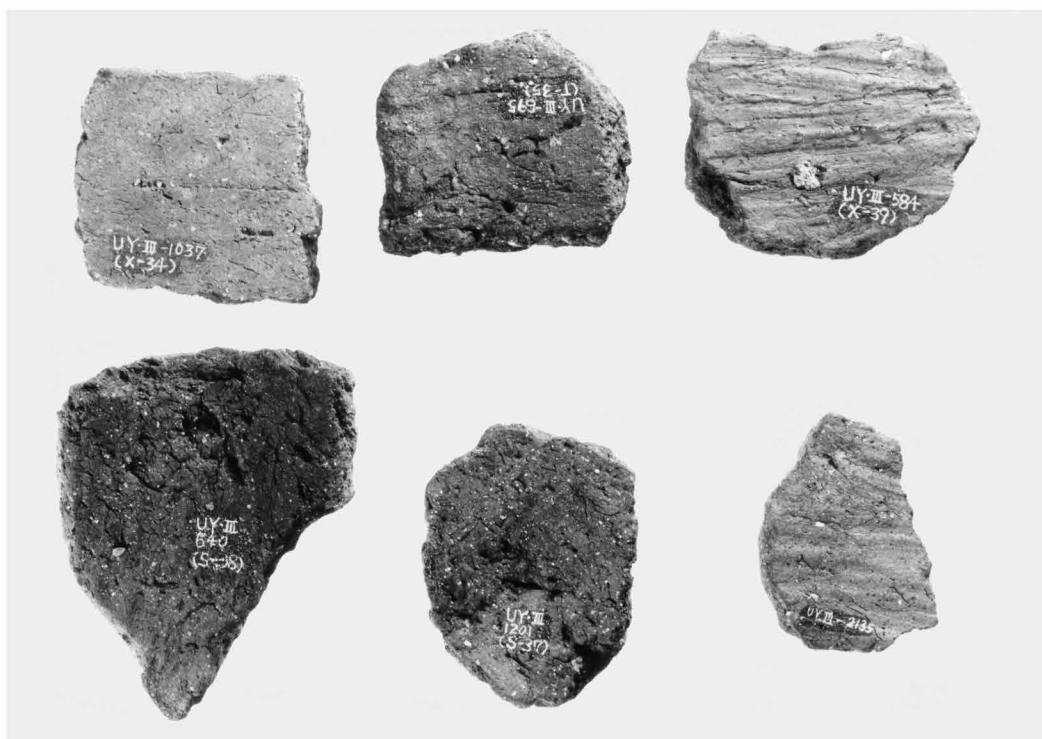
1. 縄文時代早期の土器 (8) 表



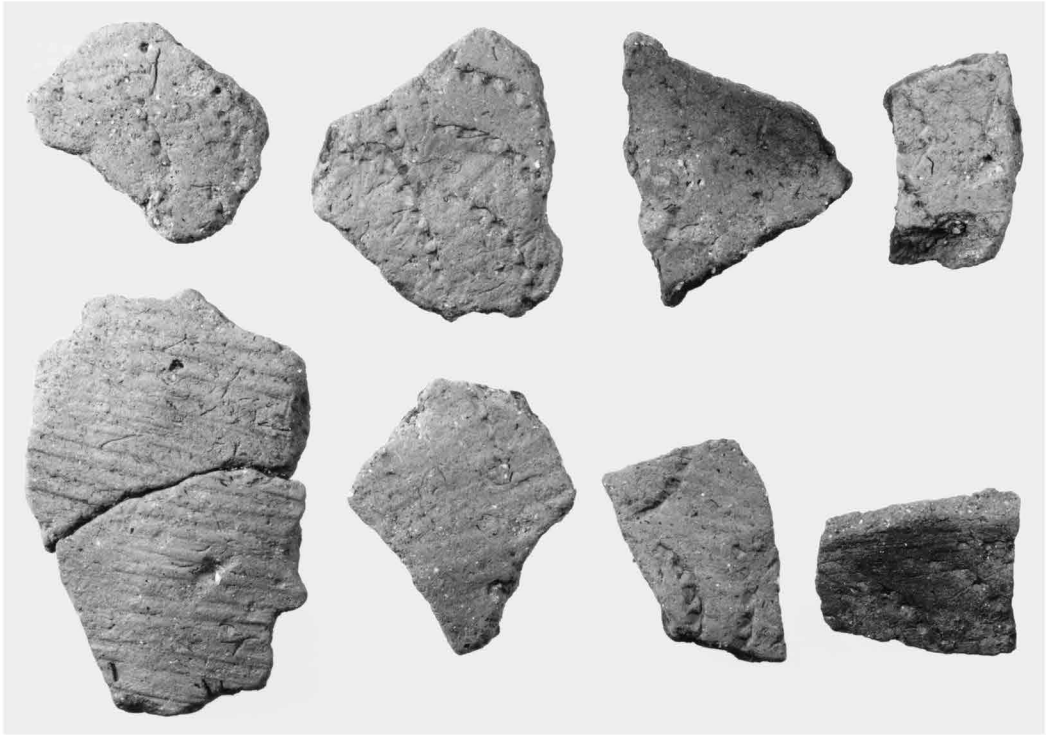
2. 縄文時代早期の土器 (8) 裏



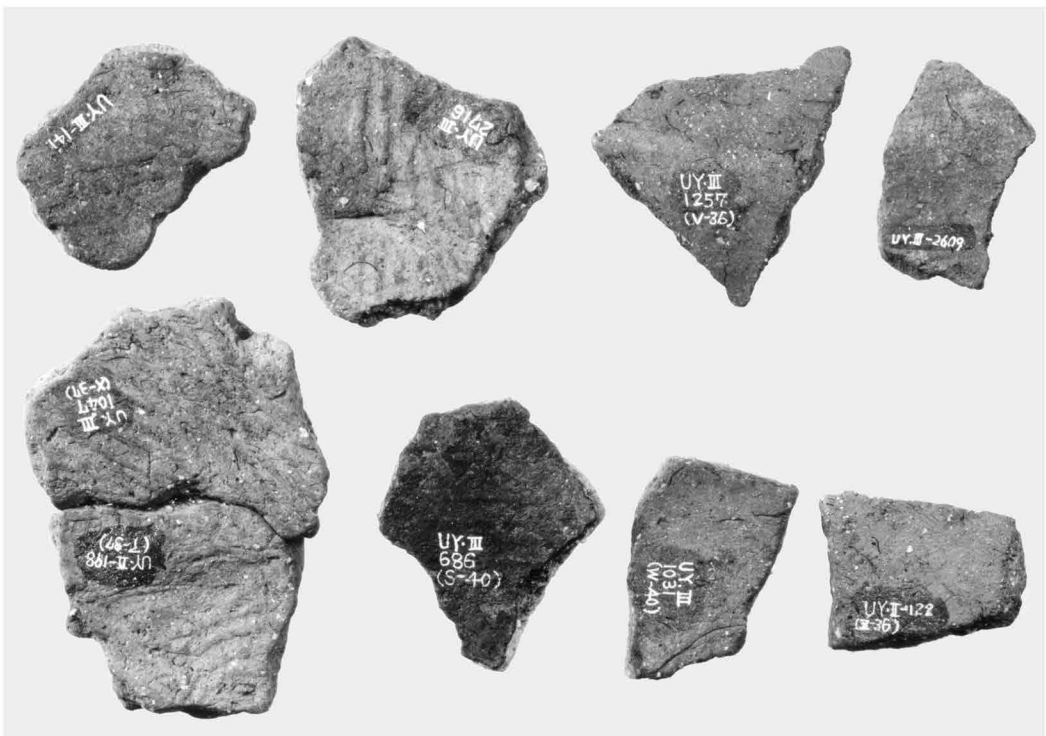
1. 縄文時代早期の土器 (9) 表



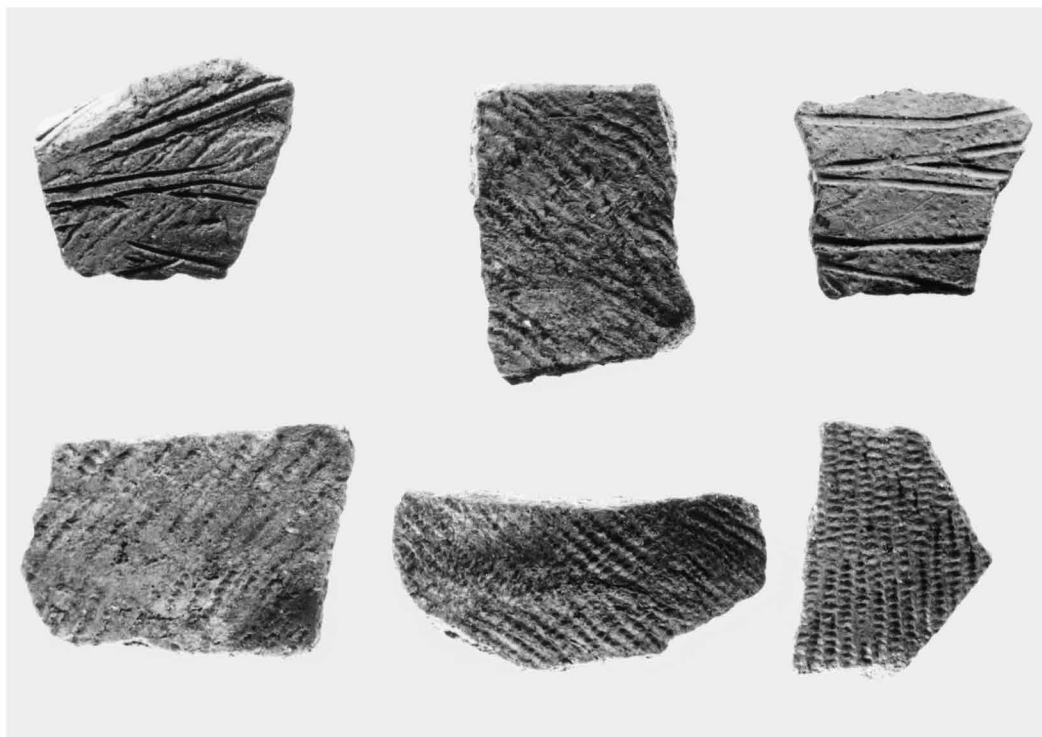
2. 縄文時代早期の土器 (9) 裏



1. 縄文時代早期の土器 (10) 表



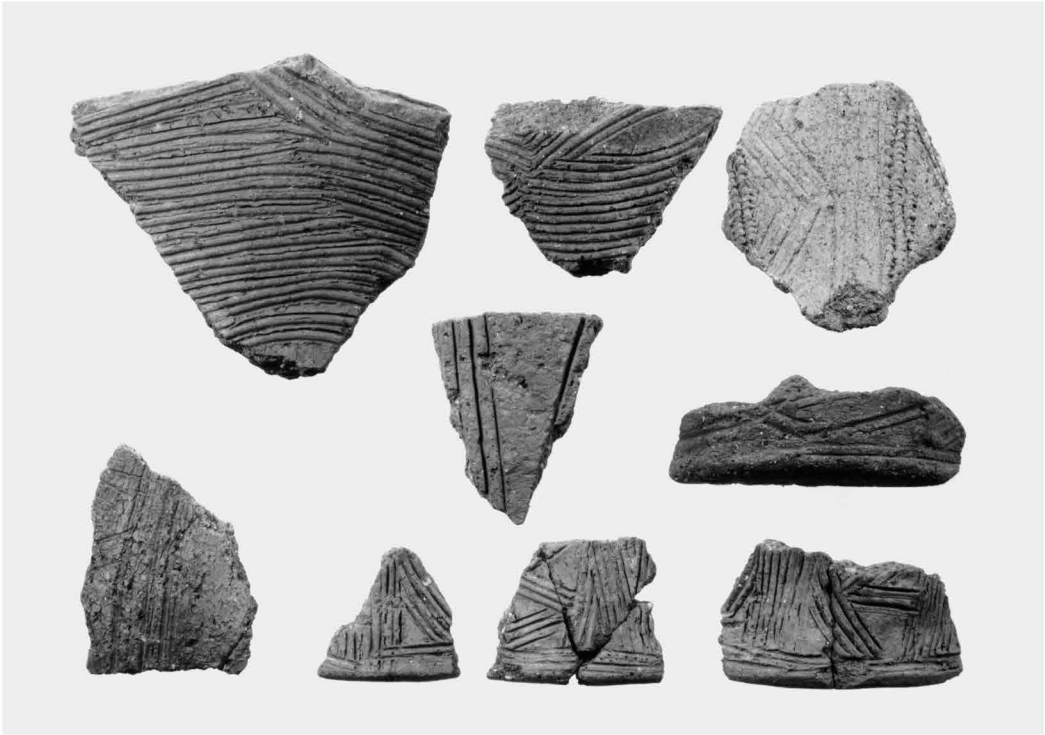
2. 縄文時代早期の土器 (10) 裏



1. 縄文時代前期の土器 (2)



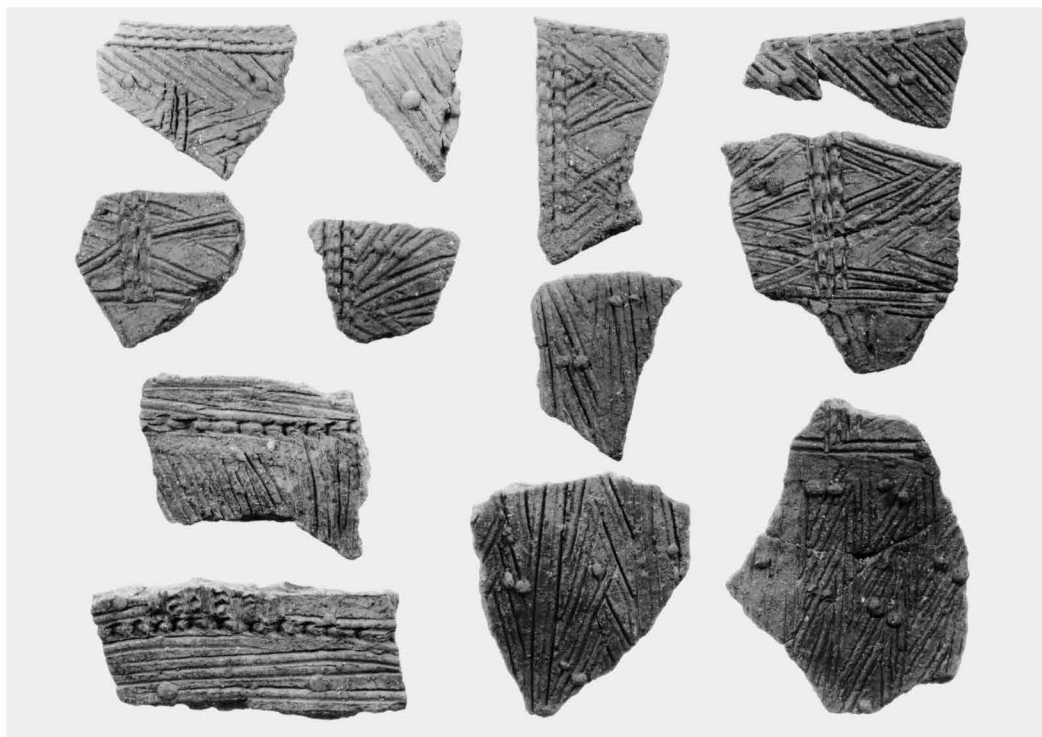
2. 縄文時代前期の土器 (3)



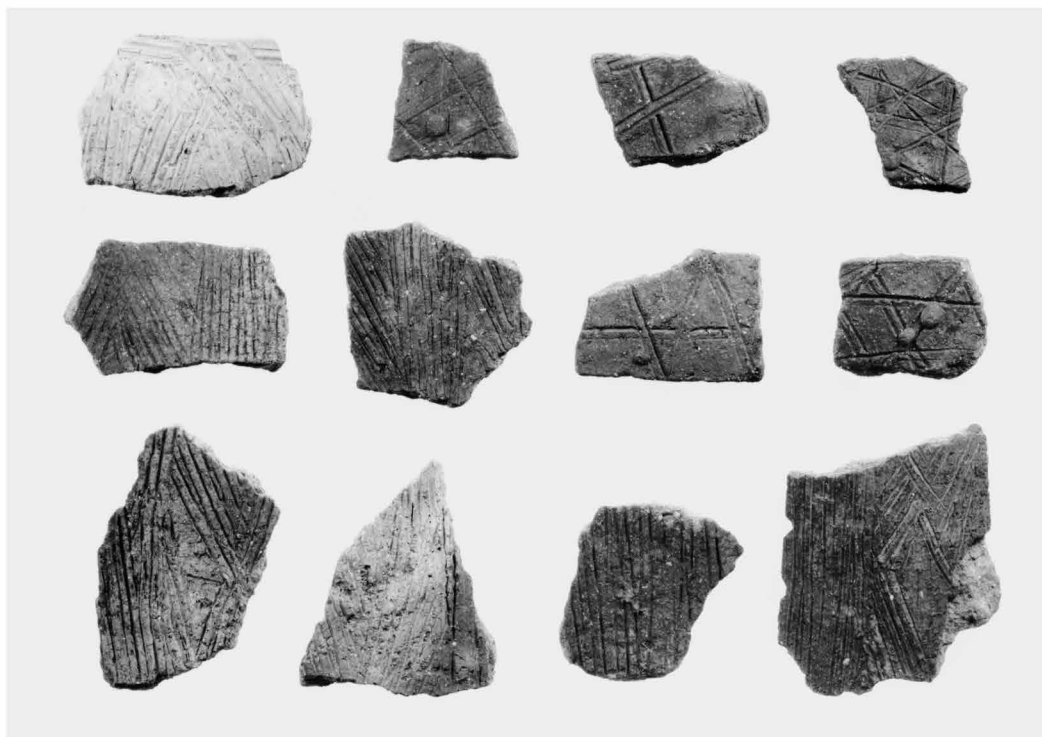
1. 縄文時代前期の土器 (4)



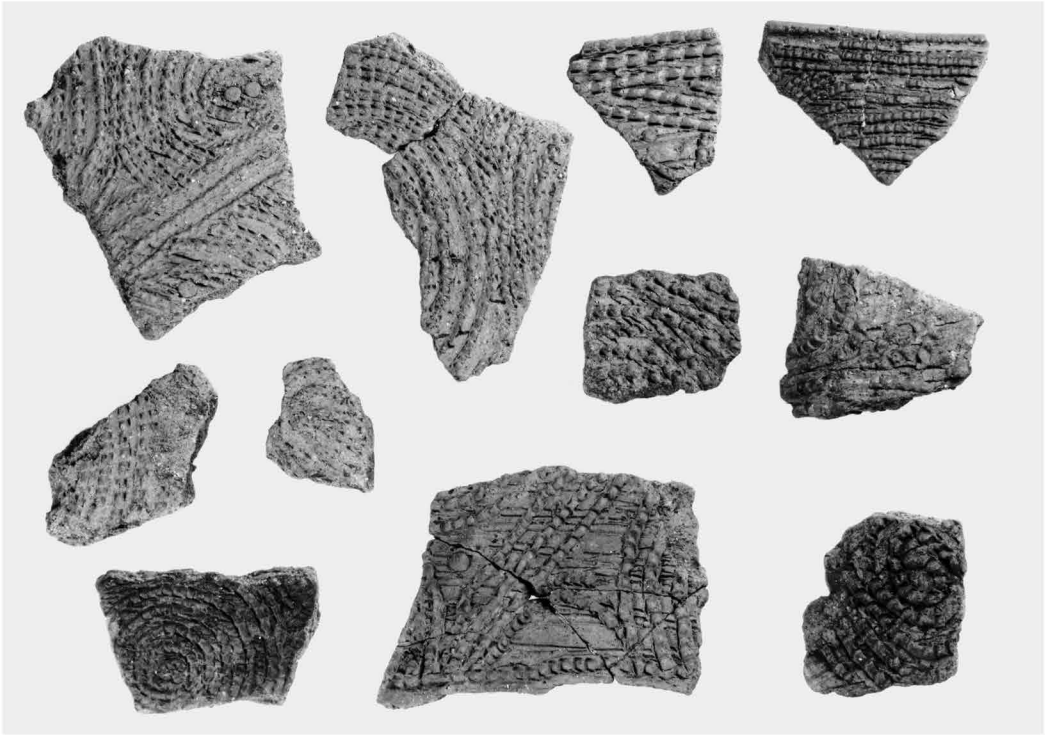
2. 縄文時代前期の土器 (5)



1. 縄文時代前期の土器 (6)



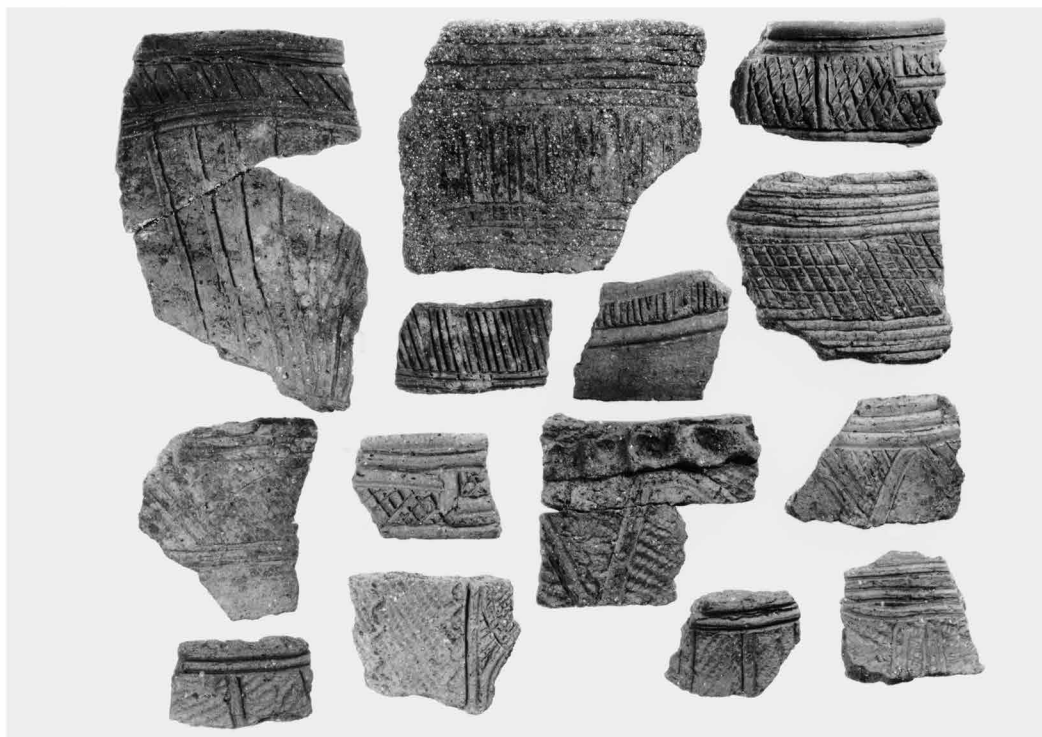
2. 縄文時代前期の土器 (7)



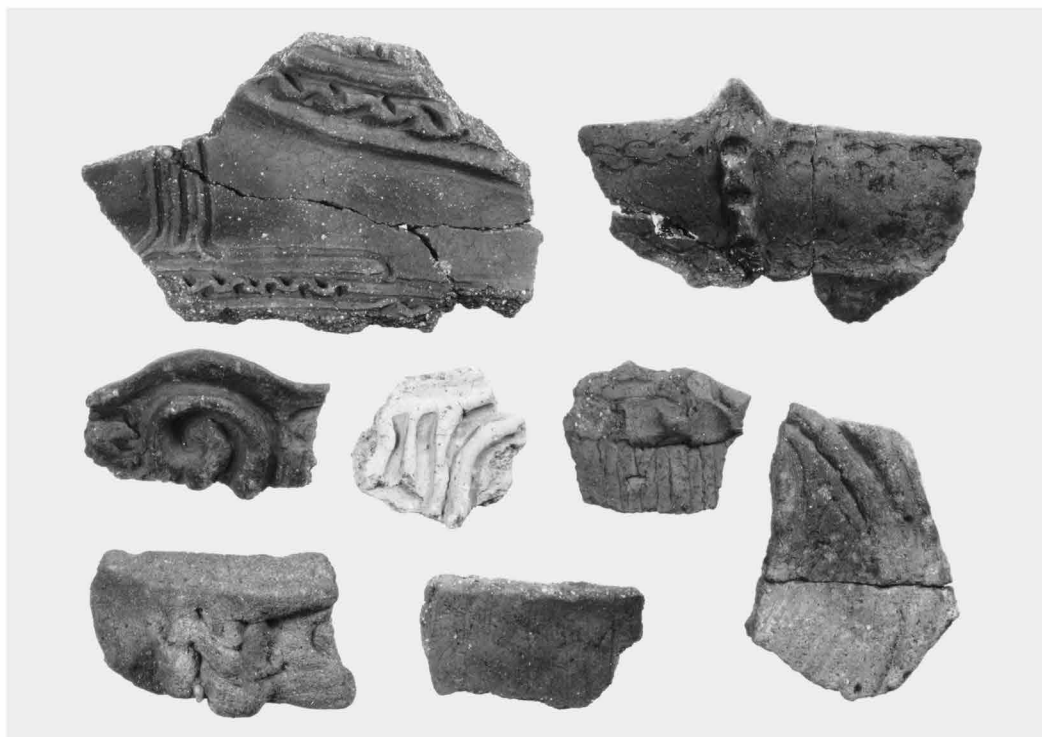
1. 縄文時代前期の土器 (8)



2. 縄文時代中期の土器 (1)



1. 縄文時代中期の土器 (2)



2. 縄文時代中期の土器 (3)



1. 縄文時代の石器 (3)



2. 縄文時代の石器 (4)



1. 縄文時代の石器 (5)



2. 縄文時代の石器 (6)

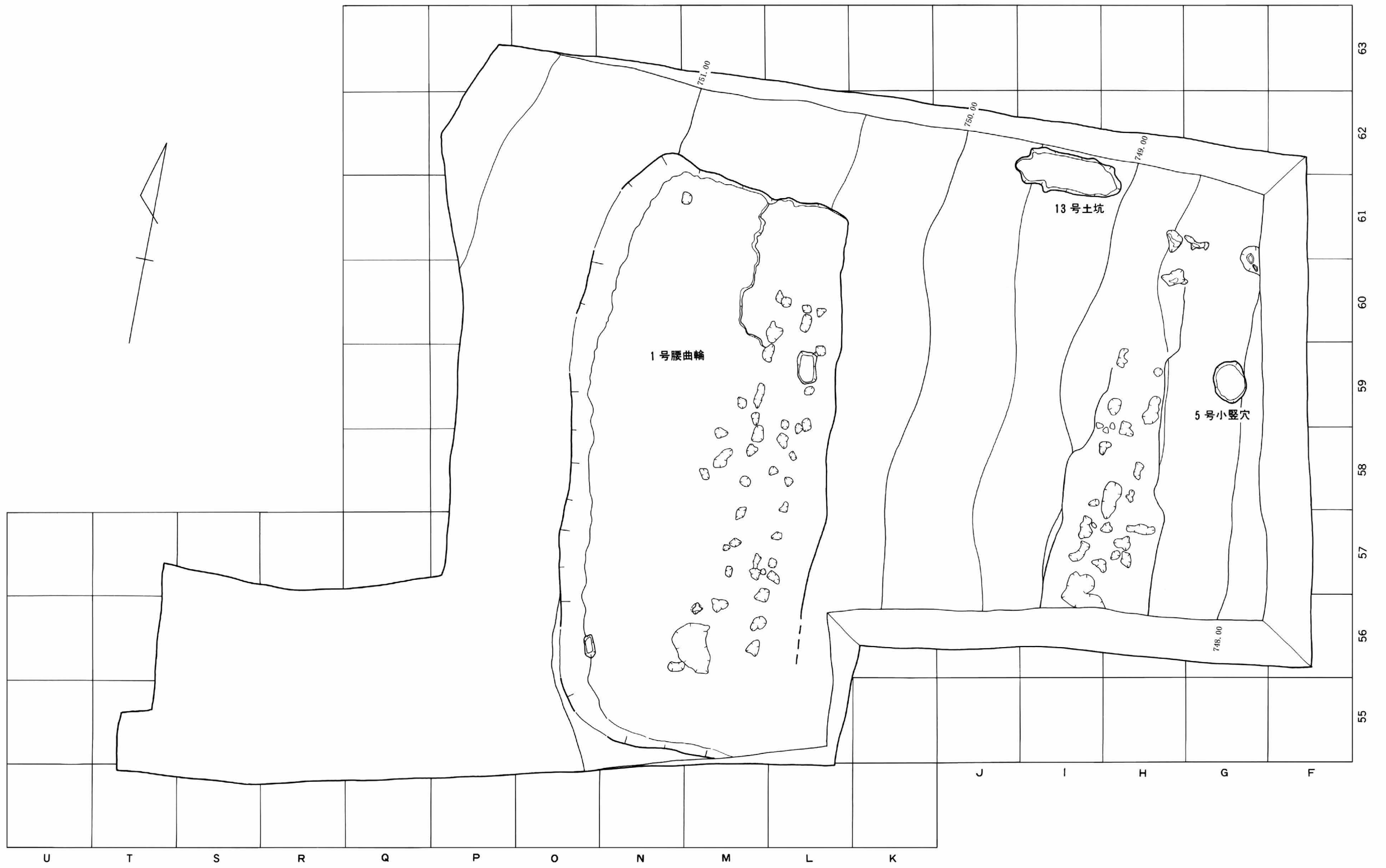


発掘調査風景（第3次）

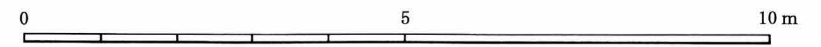
上の山遺跡Ⅱ

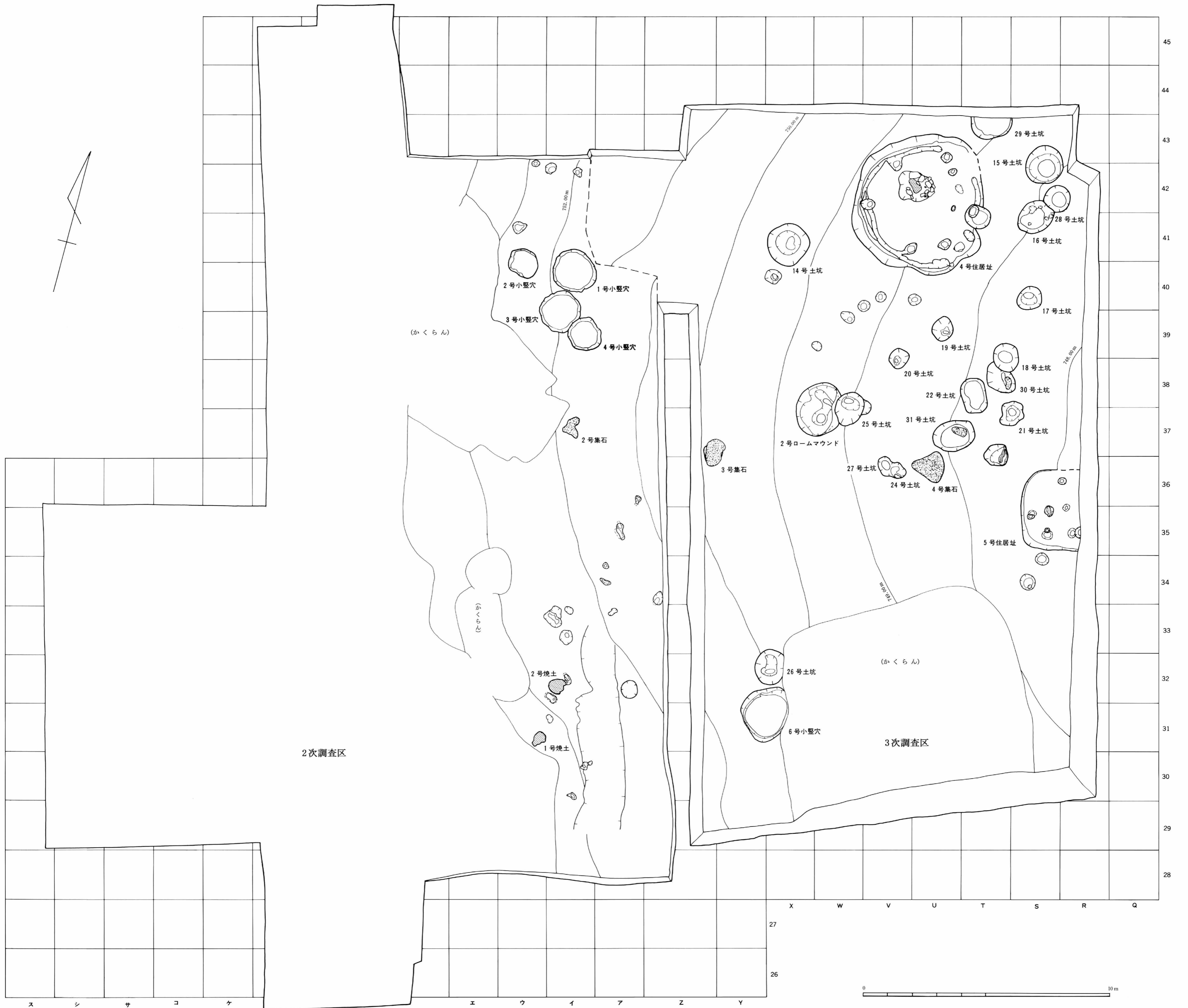
長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第2次・第3次埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成元年3月20日
編集・発行 辰野町教育委員会
〒399-04
長野県上伊那郡辰野町中央1
☎0266(41)1111(代)
印刷所 丸富印刷



付図2 上の山遺跡(第2次調査)音楽棟調査区平面図





付図1 上の山遺跡(第2次・第3次調査)昇降口棟調査平面図